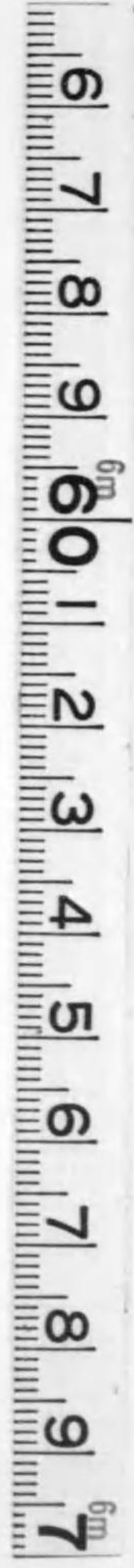


348

101



始



28.9.17



支那繪畫史

中村不折
小鹿青雲
共著

東京
玄黃社刊

大正
2.11.17
丙交

緒言

光琳の屏風が十萬圓以上の價となり府下の新聞が文展記事で其大部分を占領するといふ程我國の繪畫は盛になつた。しかしこれは根のたしかな枝に咲いた花であろうか、或は枯枝にふりつんだ雪のやうなものだらうか、堂々たる一等國しかも美術を呼びものとして居る大日本帝國にはまだ美術の常設館や、陳列館の本統のものが出來て居ない、美術に關する圖書館のやうなものもない、貧乏世帯の困しい中ではこんな事に迄は一般の考が及ばないのも是非がないが、せめて美術史の完全なものはほしい。千九百年巴里に開設された萬國大博覽會の御附合申譯的に稿本といふ題のついた日本美術史が政府の編纂で出來たばかり、其餘二三のものはみんな西洋人の仕事ときいては聊か心細い。これでは逆も他國の支那の繪畫史だけでも手が届くまい、されども支那繪畫は日本繪畫の父母で、支那繪畫が分らなくて日本繪畫のみ分らせようといふのは無理な注文であらう。先年某氏著廿七八枚の支那繪畫史を見た、

中々よい本であるが如何にせんあまり頁がないので物足りない、其外日々出版する書目は夥しくて小説などは發賣禁止をいくらされてもいくらでも出て来るが支那繪畫史はさつぱり見えない。一昨年の春友人小鹿青雲君が一部の支那繪畫史を著はさんとして相談に來た、君は曹洞宗大學校を卒業した坊さんで繪の鑒識では中々委しい、其上支那に五年程遊んで表向の役目は法政大學堂の講師として行つたのだが、^好道の道から大に支那繪畫の研究をやつた、已に大體の筋書も出來て居る、それから小生の意見も採用されて所々に邪魔が入つて段々頁が殖えて二百餘に達したのである、一層の事なほ大に勉強して大部のものに仕様と相談であつたが、先づざつとこゝいらで切上げて、あとは又あとの博識に委せるといふ無精な考から、此儀は中止したのである。

大正二年十月

不折しるす

支那繪畫史目次

緒論

文化發育の兩地點——東西畫別の原因——支那繪畫の遺墨——時代區別——上世の畫風——亞細亞的畫法——中世の畫風——山水畫の格式——玩賞繪畫——近世の畫風——歴史風俗花鳥畫の勃興

第一篇 上世史

第一章 上代の繪畫

文字の發明——畫の祖——十二服章——堯舜時代——夏殷周の時代——春秋戰國の時代——論畫の嚆矢——外國との交渉——烈裔

第二章 漢代の繪畫

漢代の治世——文藝藝術の勃興——圖畫鑒賞の嚆矢——前漢の繪畫——毛延壽——畫院の濫觴——後漢の繪畫——佛教の傳來——佛畫の嚆矢——聽事壁畫——寫景の初——畫讀の初——孝子堂及武氏祠の石刻畫——漢代繪畫の結論

目次

一

第三章 六朝の繪畫

第一節 六朝文化の概論……………一九

六朝轉瞬の興亡——佛教道教の隆盛——自由藝術の萌芽——山水畫の淵源——宗教畫——佛教寺院の一大美術研究所——道釋畫

第二節 魏晉の時代……………二三

曹丕興——佛畫の規範——漢人の南移——山水畫發展の経路——名畫の蒐集——六朝の三大家——佛畫の鼻祖、衛協——顧愷之——其遺品——一筆畫の創始——戴家

第三節 南北朝の時代……………三〇

南北朝文化の相違——南北畫風の別——陸探微——一筆畫の創始——繪畫の材料——賦彩の新制——文人畫の先蹤——繪畫の賞鑒——謝赫——畫六法——官榻の設立——毛惠遠一家——山水松石格——禪宗の傳來——印度壁畫の輸入——法隆寺金堂の壁畫——建康一乘寺の凸凹畫——西域畫風の影響——支那文化の日本に及ぼせし影響——古來の名蹟大抵煨燼に歸す——張僧繇一家——没骨皴の創始——衛夫人筆陳圖——北朝の藝苑——曹仲達の淨土畫

第四節 隋朝の時代……………四七

隋の統一——煬帝の豪奢——鄭家——界畫の發達——展子虔——十六羅漢の嚆矢——古來の名蹟唐室に入る——六朝繪畫の結論

第二篇 中世史……………五二

第一章 唐朝の繪畫……………五二

第一節 唐朝文化の概論……………五二

文運の隆盛——密教の輸入、圖像の豊富——唐朝思想界の二大色別

第二節 唐朝前期の繪畫……………五四

唐朝前期の畫風——貞觀の藝苑——壁畫の流行——燈畫の佛像——關立德の一家——尉遲乙僧——屏風の制、六扇鶴の嚆矢

第三節 唐朝後期の繪畫……………六〇

開元、天寶間の文運——支那繪畫史上の一新紀元——吳道元——印度美術の影響——其門生——山水畫の興隆——南北畫の二大系統——血族傳承より成立せる大流派の樹立を見ず——李思訓一家——金碧青綠の山水——當時の用絹法——蜀道の山水——王維の畫風の流傳——宗

教思想の變遷——禪宗興隆の原因——王維——渲淡の墨法——盧鴻一、鄭虔——張璪、畢宏——動物畫、韓幹——畫馬の變遷——章惇家——德宗以後の藝苑——鑒藏漸く人間に行はる——山水の諸家——王洽の潑墨——佛道人物畫の諸家——周昉の水月體——花鳥及雜畫

第四節 唐朝の論畫……………八二

王維の山水賦——張彥遠の論畫

第二章 五代の繪畫……………八六

藝術の餘命を維持す——文藝の兩中心地——江南の藝苑——南唐の畫院——徐熙の一家——蜀地の藝苑——黃筌の一家——蜀の六鶴殿——僧貫休——山水畫の變潮——荆浩、關同——五代技術の概論

第三章 宋朝の繪畫……………九六

第一節 宋朝文化の概論……………九六

宋朝文運の盛衰——禪宗の隆盛——徽宗皇帝と足利義政——畫道の推移——文人畫の先驅

第二節 宋朝の畫院……………一〇〇

翰林圖畫院の設置——畫道獎勵の極點——畫院の試法——畫院の軋轢——臨安の新都文藝の中心地となる——繪畫玩賞の形式一變す

第三節 宋朝畫風の沿革……………一〇七

(一) 山水畫の沿革……………一〇七

宋朝前期の山水畫

國初の三大家——李成一派——遠近透視法——郭熙の三遠——高克明——董源一派——范寬——郭忠恕の界畫——米家

宋朝後期の山水畫

院體畫——青綠巧整の一派——水墨蒼勁の新派——李唐——馬、夏の兩家

(二) 道釋人物畫の變遷……………一一九

宗教畫の一大變革——禪味と藝術との交渉——羅漢畫の變遷——梁楷の減筆——李龍眠——高文進一家

(三) 花鳥畫及び雜畫の變遷……………一二六

黃氏體——徐氏沒骨法——易元吉——畫院の程式一變——畫竹、畫梅の沿革——墨竹の起原——雜畫

第四節 宋朝の論畫

郭若虛の圖畫見聞誌——李成の透視畫法——饒自然の十二忌——明暗

遠近法について——李廌の畫品の鑑識法

一三四

第四章 元朝の繪畫

一三七

第一節 元朝文化の概論

一三七

元は漢族文化の繼紹者となる——御衣局使——元代畫風既に變遷す——
佛敎美術——波斯畫風の影響

第二節 元朝繪畫の變遷

一三九

元初の藝苑——趙子昂の復古派——鐵線描——高克恭の一派——錢舜
舉、王若水——山水畫の派別——元季山水の二派——元季の四大家——
南畫の典型——山水二派の消長——道釋畫の衰退——顏輝——禪門
樓緣圖——元代佛畫等の多く本邦に流傳せし原因

第三篇 近世史

一四八

第一章 明朝の繪畫

一四八

第一節 明朝文化の概見

一四八

翰林典籍を設く——科擧の法——支那小説の四大奇書——工藝品の發
展——擬古形式に流る——社會風尙——繪畫の特相

第二節 明朝の畫院

一五一

畫院の狀況——畫院の最盛期——院畫——萬歴以降の畫院

第三節 山水畫の沿革

一五六

明、清山水畫の特相——山水畫の三大流派——文人士夫畫の稱

(一) 浙派

一五八

浙派の祖、戴文進——吳小仙——江夏派——浙派の末流

(二) 院體畫の一派

一六一

遺品多く本邦に傳存す——浙、吳兩派との異同——周東村、唐伯虎

(三) 吳派

一六三

吳派の稱呼——嘉靖以後吳派の獨占——沈舟、文徵明——畫中九友——
華亭派、蘇松派、雲間派——董其昌、陳繼儒——明代南宗の四大家

第四節 道釋風俗畫の變遷

一六八

壁畫の衰頹——道釋畫——歷史風俗畫——仇實父——南陳、北崔——
明代人物畫の總評——人物畫の新生面——上官周——傳神寫照の一派
——曾波臣——禪門機緣圖——木庵、心越

第五節 花鳥及雜畫……………一七三

邊文進及呂紀の黃氏體——寫意派、林良——陳道復——周之冕——句
花點葉體——明代花鳥畫の三派——雜畫の變遷——墨竹の四大家——
夏仲昭——墨梅、王元章——孫從吉一家——趙庚

第二章 清朝の繪畫……………一七八

第一節 清朝文化の概見……………一七九

清朝文化の特質——康熙、乾隆の治世——清朝繪畫の特色——清朝の
内廷供奉——藝術の衰退

第二節 山水畫……………一八三

南畫勃興の原因——乾筆點曳の手法——清朝山水の特色——浙派の後
勁——吳派の變遷——江左の三王——王原祁——虞山派等——海陽の
四大家——金陵の八家——畫中十哲——玉山高隱の十三家——日本南
畫の起原

第三節 人物畫……………一九三

人物畫法に就いて——繪畫の本領——道釋畫——揚芝——歷史風俗畫
——陳洪授——柳遇——寫照派——洋畫派——上官周の晚咲堂畫傳

第四節 花鳥及水墨畫……………一九九

花鳥の諸派——王武、惲壽平——常州派の純沒骨體——蔣廷錫——支
那花鳥並に墨戲の總評——日本現代の花鳥畫——水墨雜畫

目次終

支那繪畫史挿圖目次

第一圖	夔鳳紋	○周代	
第二圖	武梁祠刻畫石の一部	○後漢	拓本 中村不折氏藏
第三圖	龍門山刻石中の一	○六朝	同 上
第四圖	顧愷之 女史司箴敢告庶姬圖	○唐朝	英國博物館藏
第五圖	敦煌石室畫壁 太子求佛舍利圖		清國 陶齋尙書藏
第六圖	尉遲乙僧 天皇像	○五代	清國 陶齋尙書藏
第七圖	禪月大師 十六羅漢の一		舊金澤 稱名寺藏

挿圖目次

第八圖 徐熙 雪柳白鷺圖

柳澤伯爵藏

○宋朝

第九圖 李龍眠 阿羅漢圖

美術學校藏

第十圖 趙大年 歸去來圖

赤星鐵馬氏藏

第十一圖 徽宗皇帝 秋冬山水圖

金地院藏

第十二圖 米元章 雪山圖

岩崎男爵藏

第十三圖 馬遠 雨中山水圖

同上

第十四圖 夏珪 江頭泊舟圖

京都 大德寺藏

第十五圖 牧谿 觀音圖

伊達伯爵藏

第十六圖 梁楷 普化和尙圖

京都 智恩寺藏

第十七圖 趙子昂 畫馬及高房山題記

清國 沈氏藏

第十八圖 顏輝 鐵拐仙人圖

京都 智恩寺藏

第十九圖 高然暉 雲山圖

黑田侯爵藏

第二十圖 王蒙 葛稚川移居圖

清國 陶齋尙書藏

第二十一圖 錢舜舉 蓮花圖

京都 本法寺藏

○明朝

第二十二圖 戴文進 山水圖

德川伯爵藏

第二十三圖 周臣 山水圖

桑名鐵城氏藏

第二十四圖 仇英 春江舟遊圖

黑田侯爵藏

第二十五圖 文徵明 山水圖

第二十六圖 唐六如 修竹流泉圖及乾隆御題

○清朝

第二十七圖 玉石谷 雪景圖

中村不折氏藏

第二十八圖 朗世寧 松林虎嘯圖

清國 胡劭菴參議藏

第二十九圖 上官周 蘇武牧羊圖

支那繪畫史

中村不折
小鹿青雲
共著

緒論

支那文明の
起原

文化發育の
兩地點



支那文明發展の起原は、殆んど埃及、カルデア、スシアナの文明と同時代にして、此等の古代文明國は、その特有の文化を後代の國民に遺して、早く既に地平線下に消え去りたるも、支那は獨り四千載の長年月を閱して、其美術、倫理を大成し、又其特殊なる文字を形成して、今日に到りたる光榮を有せり。嘗て世界に於ける東西文化發育の地點は、西方に在りては伊太利亞半島、極東に於ては支那大陸なりとす。伊太利亞が埃及及び中央亞細亞の古代

文明國の文化を吸収し、遂に東方印度の文華と抱合して希臘のヘラクリス、羅馬のオーガスト時代の文化を啓發し、遂に泰西諸國に傳播されて、謂ゆる泰西文化の系統を組織したる發源地となりたるが如く、支那は早くよりメンボタミヤの文明を採りたるが如く、更に印度文明と接着して、唐、宋時代の文運を啓發し、以て東方諸國の間に波及して、東洋文化てふ別個の系統を打成せる泉源をなせり。今繪畫に就いて見るも亦然り。謂ゆる西洋繪畫の源頭は希臘、羅馬に發したるが如く、東洋の繪畫印度方面を含まずは、支那大陸を以て其所生の母となす。而して支那畫は此特種なる文化の下に養育され、其發展の根柢、筆墨絹紙等の資料、はたまた四圍の境遇等に於て、西洋繪畫のそれとは、大いに其趣きを異にせしかば、遂に東西畫別の溝渠、嚴として越ゆべからざるに至れり。

現代の支那は、其國運の傾けると共に墨林藝園に於ても、亦頗る寂寞を極め、名匠巨擘跡を絶ち、稱揚するに足るもの殆んど稀なりと雖も、溯りて往時を觀れば、濟々たる天才星羅棋布して、各一代の光彩を發揮せり。惜むら

東西兩洋畫別の原因

支那繪畫の遺蹟に就いて

くは王朝の興亡、瀕繁にして、其名蹟多くは兵亂の災に罹り、今や其眞蹟を求むるに困難を覺ふと雖も、尙其一部を今日に傳へたるを以て、其畫風の一般を觀観するに足らむ。蓋し從來の研究によれば、支那繪畫の古名蹟は、却つて我國に傳存し、支那に於ては、既に殆んど湮滅に歸せりとなせしが、最近に至りて、支那所藏家の蒐集せるもの、中より、漸次に其名什珍蹟を發見し、其眞に近きものなることを認むるに至れり。

時代區劃

上世の畫風

こゝに上下二千有餘年間に互れる、支那繪畫史を述るに當り、叙事の便宜上、之を上世、中世、近世の三篇に大別して、其變遷推移の跡を尋ねんと欲す。即ち上世史は盤古の時代より、隋朝の終りに至るまでをいふ。而して其間に於ても、漢代の畫風と六朝のそれとを比較するに、漢代の畫風は六朝の作に比して、雄勢なる點に於て、優れたる所あるが如く、其形似傳彩は、六朝に至りて頓に發達せりと雖も、其畫法共に拘剛の法に屬するもの、如し。蓋し支那畫は、六朝の時代に入り、種々なる方面に於て啓發せられたりと雖も、南齊謝赫西曆五世紀中葉の畫家の頃に至るまでの總ての畫は、尙拘剛の

拘剛の手法

緒言

手法により、線を以て輪廓を鈎し、次第に色彩を加へたるものにして、亞細亞大陸に共通せる畫法なりしが如く、かの印度アチアンタ窟の壁畫及び我大和法隆寺金堂の壁畫の如きも、皆此手法に屬したるが如く、たゞ支那畫には、印度壁畫の如き陰影法なるものなかりき。

然るに南北朝の頃より、書道大いに發達し、漸次、書法運筆の妙趣を、畫の上に應用し、線に肥瘦を設けて、莊重の趣きを發揮せんとする傾向を生じ、遂に中唐に至りて、線に一種の技巧を加ふるに至れり。而して此種の畫法の創格者は、實に唐の吳道玄なりとす。道玄中世の劈頭に立ち、謂ゆる吳帶當風の筆力を以て、莊重なる筆勢を發揮し、又其淡彩の法は謂ゆる吳裝の新格を成すに至れり。(後世に及んで、上世に於ける拘剛の法を高古游絲描といひ、吳道玄等の手法を蘭葉描など稱すれども、實は描法など稱するものにあらずして、只加技巧の線に過ぎず加ふるに山水畫の如きも當代に入りて、始めて人物畫の背景より獨立して一體をなし、李思訓、王維等によりて其格式を大成され、宋に及んで古今の絶響を致せり。殊に宋代の學風と禪門の興隆

とは、互に相因縁して水墨畫の發展を促がし、遂に玩賞繪畫なるもの起り來りて、繪畫玩賞の形式に一大變化を及ぼし、其結果山水、花鳥畫の流行となり、花鳥畫に黃氏體、徐氏體の新格を開くに至れり。されば支那の繪畫は、唐以降、渾融大成の時期に進みて、自から、支那繪畫史上に一新紀元を開けるものといふべし。而して元代の畫風は、其大體に於て唐、宋の餘波に屬し、未だ明、清の近體に移らざるを以て、尙、中世史の中に入るべきものか。若夫れ近世の明、清に至りては、社會の風尙移ると共に、畫風も亦一變し、山水畫の如きも、之を大數の上より見るに、大抵、織積または輕軟を以て其特色となし、宋、元の格調を具ふるもの漸く稀なるを致し、又元代以來、佛敎の衰運に傾くと共に、歴史、風俗の新畫は、漸次に道釋畫に代りて流行することとなり、明に斯道の泰斗仇實父を出し、清に陳洪綬等の巨擘を出せり。殊に清朝に入りては、明以降、洋畫の輸入により、從來の人物畫法に洋風を加味せる畫風興り、我菊地容齋の前賢故實の藍本となりたる上官周の晚暎畫傳等出で、人物畫法の上に一新生面を開拓せり。且、又花鳥畫に於ても、

支那繪畫史
明には寫意派並に句花點葉體を創製され、清朝に及んで、更に常州派の純
沒骨法を開始されて、宋、元の徐氏沒骨法の、尙、細拘ある畫風とは、大に
其趣きを異にせるを見む。

されば支那繪畫發展の徑路は、細かに此を區別すれば幾多の小時期に分つ
ことを得べく、随つて各時代々に於て、其特相の認むべきものありと雖も
大勢の上より其畫風の變遷、技巧の發達に徴するに、上述の如く上、中、近
世の三大別に區劃して、其變遷推移の跡を討ぬるを最も適當となすを得べき
か。

第一篇 上世史

第一章 上代の繪畫

太古の狀態は遼として、考ふべからずと雖も、支那民族は、三皇五帝の時
代に至りて、既に黃河の流域に於て、文明の曙光漸く其光りを發せんとする
狀態に進みたるが如し。史の傳ふる所によれば、大皞・伏羲氏は、始めて奇偶
を畫して八卦を作り、以て書數の端を開けりといふ。次いで黃帝・軒轅氏の時
に至り、蒼頡亦文字を作りて、象形文字の端を開きたるが如く、此等の文字
漸次に變形して遂に特種なる。文字組織を成すと同時に、また支那繪畫の淵
源をなしたるが如し。蓋し象形文字は、日、月、艸、木、鳥、魚、
蟲、魚、等皆其形に象りて文字を制したるが故に、此時代に於ては、
文字は即ち繪畫にして、繪畫は即ち文字なりしと見るを得べし。然れども畫
は早くより畫として行はれたるにや、世本呂氏春秋等によれば繪畫は黃帝の

十二風章

臣史皇に始まれりとあり。蓋し黃帝の時、史皇、蒼頡等端冕衰衣を制し、文字を作り、曆數、音樂、律、度、量、衡を設け、始めて五彩を以て十二章を畫きたりといへるが故に、書を以て黃帝の時に始まれりといへるものか、今日に至りては其十二章の如何様なりしやは、固よりさだかならねど、陶器其他の工業品等に就いて考ふるに、其上裳には、

- 一 中に三脛の鴉ある日輪
 - 二 中に不死の妙藥を搗く兔ある月輪
 - 三 星辰
 - 四 山
 - 五 二疋の龍
 - 六 雉
- にして其下裳には、
- 一、二個の臺付の杯
 - 二、水草
 - 三、火焰
 - 四、米粉
 - 五、斧鉞
 - 六、亞といふ文字

堯舜時代

を其模様となしたるが如し。更に唐、虞の世に至りては、文教大いに興り、諸制度亦其形體を具へ、各

夏殷の時代

官を建て、其事に従ひ社會はこゝに其面目を一新して、漸く整頓の域に進みたるを知るべく、當時既に繪畫は繪畫として發達したるを以て、官服の服章模様如きも、亦之れに従ふて發達せしならむ。舜の妹、嫫の如き書を善して繪畫の祖となれりとは、書史會要等に載する所たり。されば夏代には、遠方より奇異の物像を圖書にして、之を朝廷に獻じ、圖する所の物に象りて之を鼎に著はし、鬼神、百物の形を圖して、民をして逆め之に備へしむること行はれ、般には武帝其夢みる所の像を工人に命じて畫かしめ、直ちに其工人を宰相に任じたりといへば、既に此時に於て、人物畫の描かれたるを知るべく、また畫の如何ばかり尊重されたるかを想見するを得む。

周の時代

周の世に至りては、畫の用途、漸く廣く、周禮、設色の工に畫、鐘、篋、篋あり、又地官大司徒の職は、建邦の土地の圖を掌れりとあり。又周官、國子を教ゆるに六書を以てせしが、其中の象形は實に繪畫のことにして、當時既に繪畫の術を教へたるを知るべく、明堂の四門墉には、堯舜の容、桀紂の象並

明堂四門墉の壁畫

王門の畫虎

春秋、戦國の時代

論畫の嚆矢

びに周公が成王を相けて斧辰を負ふの圖を畫き、以て鑒戒の用に供したりといふ。孔子曾て此圖を見、徘徊去る能はず、從者に謂つて曰く、此れ周の盛んなる所以なりと。又王門には虎を畫きて威を示したりといふ。然れども三代の技工今にして觀るべきもの、僅かに銅器の鑄文あるに過ぎず。更に春秋、戦國の時代に及びては、楚には先王の廟、公卿の祠堂に、天地山川の神靈並びに古聖賢の像を畫きたりと云ひ、宋の元君は畫人を召して其槃礴を喜び、周君の畫筴者は、三年にして龍蛇、禽獸、車馬、萬物の狀を畫き、魯の公輸斑は、付留神の像を寫し、齊の敬君は、齊王の爲めに九重の臺に畫き、久しく歸ることを得ずして家を思ひ、其妻を畫きて之に對せしに、王其妻の美なることを知り、錢百萬を與へて其妻を納れたりと云ふ。又韓非子に見えたる所の齊王の爲に畫きし客の、王の間に對して、狗馬を畫くは難く、鬼魅を畫くは易しとあるは、寫生畫の困難なることを言ひしものにして、支那に於ける論畫の嚆矢とも見るべし。然れども此等の畫は今日に傳はらざるが故に、其圖様の如何様なりしやは、固より明かならざるも、其の技工の

幼稚なりしことは、漢代の遺物たる石刻畫等によりて、類推することを得べし。

吹畫

秦代に至りて外國との交渉始めて興る 烈裔の畫

蓋し夏、殷、周の時代に至るまでは、支那の美術は其大體に於て自然的に發達したるもの、如く、未だ外邦の藝術に接觸せざりしが如し。然るに西紀前三世紀の頃に至り、秦の始皇帝天下を統一し、其版圖西南の方面に擴がりしかば、茲に外邦との交渉漸く興り、印度との陸上貿易の如き、緬甸、安南の道を借りて、西南の支那商人によりて開かれ、西域の美術品の漸次に將來せらるゝに至りたるが如し。秦皇二年、秦皇の畫人、烈裔なるもの入朝し、口に丹墨を含み、壁に噴して龍を成し、指を以て地を壓するに繩界の手に隨ふて轉するが如く、方圓規矩に據るが如し。方寸の内に五嶽四瀆を容れ、土を列ねて備はる。善く鸞鳳を畫く、軒々然として惟、飛び去らんことを恐る。蓋し、秦皇の畫國は西域の一國にして、其技術大に進み居たるが如し。かくて支那繪畫は始めて外來の新様式に接觸して、其技工を傳へたるにや、唐代に於ては雲龍などを畫くに吹畫なるものありたりと見え、唐の張彥遠に其著歴

代名畫記に吹畫のことを論せり。而して始皇の阿房宮の大建築は、大いに藝術を益したるべく、繪畫の姉妹藝術たる建築術の、三代の時代よりも遙かに進歩したるを以て。繪畫に於ても亦多少進歩したる點ありしならん。然れども今や文獻の徴すべきなし。

第二章 漢代の繪畫

漢は始皇の四海統一の後を繼ぎて天下を料理し、中頃、王莽の篡位によりて中絶され。前漢後漢の兩期に分れたるも、前後約四百年間の治世を見るに至れり。即ち西紀元年を中心として、前漢は西紀前二百年に互り、後漢は西紀後二百年の間、相續せり。而して漢の王業を建てたる時は、久しく春秋の戦亂、始皇の暴政によりて民力を蕩盡され、社會民衆の困憊其極に達し、一世の風尚、厭世的傾向を帯び、虛無恬淡の道教、漸く盛んならんとしたる時代なりしかば、當時社會の改革は目前の急務にして治安策の論著大いに興り、文帝、武帝の頃には、既に社會の制度文教大いに整頓し、加ふるに威令

漢代の治世

文教の隆盛

再び西域の諸國に行はれ、國家唱平殷富となりて、此に支那國民は一時休息の時代に入ることを得たり。

されば秦の書を焚き儒を坑にしたる後は、學術久しく興らざりしに、武帝雄偉の才を以て、外は四方を經營し、内には大學を設け、博士を置き、儒教を以て政治の標準となせしかば、公孫弘、董仲舒、司馬遷等の學者輩出して、文教大いに興り、建築の如きも上林苑を築いて盛なる工事を起し、又七寶林、雜寶案を爲り、寶屏風、列寶帳を柱宮に設くるなど、藝術の需要大に起れり、當時張騫、西域に使用して葡萄、柘榴等の植物を、安息國より將來し、此を上林苑に培養したるが如き、今日漢代の遺品として知られたる、鏡背の葡萄文は、此を證すると共に、西方藝術の影響を見るに足らん。其他彫刻には、丁緩、李菊等の名匠ありて、銅人、石像の類、之を書史に徴すも、其技工の進みたるを察すべし。

藝術の勃興

此の如く漢代の文運隆盛となりしかば、繪畫も亦此に發展の歩武を進むるに至れり。此れ繪畫は文化の雨露に養はれて、其花を開き其實を結ぶものな

支那の繪畫は漢代に入りて漸く其明瞭を加ふ

圖畫鑑賞の嚆矢

前漢の繪畫

支那繪畫史

一四

るが故に、繪畫の發展は常に文化發達の後にあるを以てなり。蓋し支那の明確なる繪畫史は、漢の時代に始まりとすべく、漢以前の歴史は、多く朦朧の霞に鎖されて其明瞭を缺けりと雖も、漢代に入りては、繪事の書史に徴すべきもの漸く多く、又其遺物たる石刻畫等存するを以て、前代に比して遙かに明瞭を加へたるを覺ゆ、殊に畫題の範圍の如きも漸く廣くなり、又其技工の進むに従つて其用途も増加し、佛敎畫の如きも、其東傳と共に輸入され、圖畫の鑑賞の如き、實に漢代より始められり。されば漢代の畫道は、種々なる點に於て大いに發達したるものといふべし。
今之を史冊に徵するに、武帝は秘閣を創置して天下の書畫を蒐集し、甘泉宮中の臺室には、天地太一諸鬼神を畫かしめ、又明光殿には胡粉を以て壁に塗り、紫青の界を施して古烈士の像を畫かしめ、宣帝は甘露三年(西紀前五)に、麒麟閣に功臣十一人の像を畫かしめ、以て士夫の功勳を表旌せりといふ。其他魯の靈光殿には、天地品類、群生雜物、奇怪、神靈等の圖を寫し、民の門戸には、神荼、鬱壘及び鷄を畫きて厭勝と爲したるが如き、畫題の種類漸

毛延壽

畫院の差勝

第一篇 上世史

一五

く多きと共に、其用途又多きに至り、畫道隆盛となりしかば元帝の頃には、毛延壽、陳敞、劉白、龔寬、陽望、樊育等の畫工輩出するに至れり。少美惡皆其意を得たりといふ。元帝の朝に事へ、後、王昭君の事に坐して、棄市藉沒せらる。當時帝の後宮頗る多く、一々見るに堪えず、因りて畫工をして其狀貌を圖せしめ、毎に圖を披いて其美なるものを召し見る。後宮競ふて畫工に錢帛を贈りしが、獨り王昭君天質美麗にして、更に工人に求むるの意なし、爲めに醜狀に爲らる。當時匈奴、漢の美女を求む、帝、圖を按じて昭君を送らんとす、既にして昭君の絶世の美貌なるを知り、大に之を悔ひしかど、既に定まりて奈何ともする能はず、因りて其事を窮めて畫工を市に棄り、其家を藉沒せしに、其富、皆巨萬に及べりと。
陳敞、劉白、龔寬は、其人物、延壽に及ばざりしも、共に牛馬鳥類に巧にして、陽望、樊育等は尤も布色を善くせりといふ。
蓋し當時既に宮廷には尙方の畫工なるものありて、毛延壽の輩之に興りた

後漢の繪畫

るが如く、後世に至りて大に發達したる書院の濫觴をなせり。
 後漢の時代には、明帝頗る文雅を好み、深く丹青を愛し、別に書官を設け、博洽の士班固、賈逵の輩に詔して、諸經の史事を選ばしめ、更に書工に命じて之を書かしむ。又鴻都學を創立して盛んに天下の奇藝を蒐集し、中興の功臣二十八將の像を南宮の雲臺に圖寫せしむ。殊に明帝は光武中興の後を繼ぎ、光武帝の柔道の政策を改めて、西域諸國との交渉を開き、當時班固の弟班超西域に在りて屢々戦功を建て、前漢の武帝以來再び國威西域に震ひしかば諸國競ふて漢廷に入朝し、西域との交通益々濶繁を加へたるにより、茲に佛教は東傳の機會に遭逢し、六朝弘宣の端を啓くと同時に、六朝に於ける宗教畫の端緒を見るに到れり、即ち明帝は金色の佛陀を夢み、蔡邕等の使を月氏の國に遣はし、佛教の經典及び彫像と共に、白氍毹の畫像等を將來せしめ、これを寫して數本を作り、南宮の清涼臺及び高陽門、顯節壽陵上に安置せしめ、又白馬寺の壁上に千乘萬騎、遠塔三匝圖を作らしむ。又蔡邕等の迎へたる摩騰竺法の三藏は、保福院に首楞嚴二十五觀の圖を書きたりともいふ。願ふに此

佛教の東傳

佛教畫の嚆矢

畫像陳列の風行はる

廳事壁畫

等の畫は、支那に於ける佛教畫の嚆矢ならむ。
 而して前漢以來樓臺に古聖賢人の畫像を陳列して、鑿戒の標目と爲す風、王室及び諸侯の間に行はれ、光武帝の如き、曾て馬皇后と共に、畫像陳列の樓臺を觀覽し、帝、娥皇女の圖を指し、后に戯れて曰く、恨くは此の如き妃となるを得ざること。又進んで陶唐像を見る、后、堯を指して曰く、陛下、百僚の臣、恨くは此の如くなるを得ざること。帝顧みて笑ふと。又靈帝の光和元年には、鴻都門學に孔子及び七十二弟子の像を書き、獻帝の時、成都學の周公禮殿には、盤古の三皇五帝、三代の名臣、及び仲尼七十弟子の像を壁間に書きたりといふ。其他郡府には、廳事壁畫あり。郡尉の府舎には、皆彫飾を施こし、山神海靈、奇禽異獸を書きて、炫耀を極め、夷人益々畏憚せりといふ。
 斯の如く漢代に至りては、繪畫の需要盛なりしかば、其畫工も隨つて多かりしなるべく、後漢の畫工として今日に傳はれる重なるものは、蔡邕、張衡、劉褒、趙岐等にして、尙方の畫工には劉旦、揚魯等あり。其中張衡は浦城縣

寫景の初め

靈讀の嚆矢

孝子堂山祠の石刻畫

武氏祠石室の刻畫

の神獸を寫し、劉褒の雲漢の圖を作りて支那に於ける寫景の始めをなし、蔡邕の書畫に巧みに、琴鼓をも善して、其名尤も聞ゆ。曾て靈帝を召し、赤泉侯五代の將相を畫かしめ、兼て讀及び書を命ず。時に三美と稱さる。因りて思ふに畫讀の如きも、既に後漢の時代に始まれりとすべきか。然れども此等の畫蹟固より存せず、其畫風の如何様なるやを知るに由なきも、幸に後漢の時代に作られたりと思はる、山東省肥城縣の孝堂山祠及び同省嘉祥縣の武梁祠等の石刻畫、今に傳存し、彷彿の間に其技工の一般を窺ふの便あり。其中孝子堂山祠の石刻は、石上の題銘より推すに、後漢順帝の永建四年(西紀後一二九)以前の作なるを知らるべく、其圖様は大車、成王、貫胷國人、昇昇の故事及び戰爭、庖厨歌舞の風俗等にして、其畫は線畫を陰刻したるものなり。又武梁祠の石室の刻畫は、其石闕の銘によりて、桓帝の建和年間(西紀後一四七、一四九)の製作なることを知るを得べし。其圖様、帝王、聖賢、名士、烈女、戰爭、昇昇、車馬、庖厨、龍魚、鬼神、奇禽、異獸、祥瑞等にして、神話、歴史、古代支那の生活状態を示して、變化極めて多端

漢代繪畫の概論

六朝轉瞬の興亡

なり、大抵、先きの孝子堂山祠の刻畫と同様なるも、其刻法は陽刻にして前者と異なれり。こゝに兩祠堂刻畫の一部を載せれば就いて見らるべし。之を要するに漢代の繪畫は、其形似の如き甚だ古拙たりと雖も、其描線に至りては、最も氣勢の雄大なる趣きを發揮せり。只夫れ未だ唐代の作品の如く、其線に技巧の加はりたるものなしと雖も、其筆勢の雄偉にして、うぶなる所に多大の興趣を認め得らるゝが如し。之を後世に至りて發掘されたる當時の刻畫の彫塑或は工業品等に徴するに、其間に自から一貫せる特相の認めらるものなきにあらず。蓋し繪畫といひ其他の藝術といひ、互に相關聯して發達するものなるが故に、一を知れば其他は自から類推し得らるゝなり。

第三章 六朝の繪畫

第一節 六朝文化の總論

漢の鴻圖漸く傾きて、魏、蜀、吳、の三國鼎立し、中原の鹿を逐ふ事僅かに五十餘年にして、亦六朝轉瞬の興亡を見るに至れり。所謂五胡、十六國爭

佛教及び道
教の隆盛

亂の時代にして、其間凡三百五十年、世は實に走馬燈の如かりき。然れども六朝の帝王將相多く書畫を好み、蒐藏賞鑒盛なりしかば、頻々たる國家争亂の間、尙、畫道の興隆を見るに至れり。加ふるに漢以來、西域との交通頻繁を加へ、西域の僧支那内地に來化するもの漸く多く、六朝の思想界は、國家争亂、禍難相繼ぎて、社會は困憊し、天下終に一日の治を樂しむ能はず、炎運漸く傾くに及びては、節義の士も亦其終りを全うし得るものなかりしかば、漢代以來の厭世思想、頼みに高潮を呈し、老莊超脱の學風、士人の間に流行し、内外の形勢は、益々佛教の東傳を助長せしかば、當時佛教は蕩天の勢を以て支那の内地に蔓延し、北朝には符秦、姚秦、北魏等の諸王大に佛教を保護し、南方に於ては吳の孫權以來、南朝歷代の帝王佛教に歸向し、造塔建築の盛なると共に、繪畫の需要大に起り。殊に佛教の東傳に伴ひて輸入せられたる佛像佛畫は、支那繪畫の上に、新たなる要素を與へ、此に六朝の繪畫をして、一大發展の機運に向はしむるに至れり。

抑も六朝以前に於ては、繪畫を以て、大抵、人倫の補助、政教の方便とな

羈絆藝術

自由藝術

山水畫の源

し又は建築物の裝飾として用ひられ、未だ羈絆藝術の區域を脱せざりしも、六朝に至りては、美を美として樂む審美的風尙起り來りて、支那繪畫史上に、漸く自由藝術の萌芽を見るに至り、其技巧頗みに進み、畫題の如きも、佛道、人物、牛馬、山水、林石、花鳥、龍魚、車馬、樓臺等に及んで、其限界大に進みたるを見る。且つ南齊謝赫の畫品、梁の元帝の山水松石格、陳の姚勗の續畫品等の如き、畫品、畫論盛んに行はるゝに至れり、山水畫の如きも、北方、胡族の中原に侵入するに遭ひ、漢族の漸次南下するにつれ、四圍の境遇は、遂に彼等漢人をして山水畫なるもの、端を開かしむるに至れり、而して其根柢をなせしものは、實に老莊哲學の影響にありとす。蓋し春秋、戰國の世、自由思想の勃興と共に、南方思想の結晶體ともいふべき老子教は、漸く北方人の間に流布し、其自由を愛し、自然を樂しむ風尙は、南方、山水の自然美に接して、自ら山水畫なるものを啓發するに至りしものか。されば山水畫の如き、老子教の遵奉者たる願愷之によりて始めて傳へられたり。然れども其山水畫なるものは、未だ獨立せる山水畫にあらずして、大抵、人物畫の

龍の圖は老
莊哲學より
來る

支那繪畫史

背景として畫かれたるが如し。而して此派に屬する人は、最も龍を珍重せり、是れ龍は無限の變幻、自在力を顯すものなるを以てなり。かの龍虎の圖は、主客兩界の戦ひを表はし、物質の虎は、主觀の龍即ち靈界の不思議力に對し、恐れを懷きて戰を挑むの狀を表はしたるものなり。よりに思ふに支那繪畫の自然界に親しみたるが如き、又龍虎の圖の變幻を窮むるが如きは、大いに老莊哲學の影響を受けたるものといふべきか。

宗教畫佛

佛教寺院は

斯の如く六朝の繪畫は、諸方面に亘りて大いに發展したりと雖も、此時代の繪畫をして、支那繪畫史上に重きをなさしむるものは實に佛教の傳播に伴へる宗教畫なりとす。蓋し當初の佛教畫家は、大抵、印度の宣教師が然らざれば支那の求法者にして、佛教の新宗教に對して熱烈なる信仰を有し、繪畫を以て宗教的敬虔の事業となせり。されば其製作せる宗教畫は、縱令、形似に於て完たからざるものありとするも、もと信仰の溢れて外形に發露せしものなるを以て、自然に靈光不思議の面影を存し、人をして崇敬の念を起さしむるに足りしならむ。當時、佛教の寺院は、新宗教の理想によりて靈化せら

一大美術研
究となる

道釋畫

れたる、一大美術の研究所となり、其敬虔なる宗教畫家は、曾て祖先の知らざる諸佛諸神の淨土を畫きて、其信念を充實せしめ、印度的傳説は、西方より絶えず入り來る宣教師によりて鼓吹せられたりき。而して此時代は前述の如く、道教は佛教と共に大に行はれ、南方人士の間には、竹林の七賢人の如く、虚無恬淡の説を弄して、人生を無視するものを生じ、北方に於ても北魏の道士寇謙之等の大いに道教を宣揚し、後漸く佛教の像設に倣ひて、繪畫彫塑に天尊等の圖像を作るに至りしかば、支那繪畫に道釋畫の一科を開き、爾來北宋の時代に至るまで、人物畫の主要なる畫題となり、支那繪畫發展の劈頭に於て、全盛を極むるを致せり。而してこの信仰畫の隆盛は、漸次純粹なる信念の減退と共に、漸く審美的限界に闖入し、終に歴史、風俗の人物畫等の發展を助長するに至りたるが如し。吾人は茲に六朝の繪畫を述ぶるに當り、叙事の便宜上之を數節に別ち、各時代を追ふて其梗概を叙述すべし。

第二節 魏晉の繪畫

魏には曹髦、楊修、桓範、徐邈等の畫工あり、蜀に諸葛亮、吳に曹弗興、

趙夫人等あり。中に就き其名の尤も顯はれたるを曹弗與となす。吳興の人に
 して、赤烏元年(西紀二三八)清谿に行き、赤龍の水上に出づるを見、寫貌して
 之を吳王孫皓に獻す。皓之を秘府に送り、遂に劉宋の朝に傳はる。劉宋の陸
 探微之を見て其妙を歎すといふ。曾て孫權、弗與に命じて屏風に畫かしむ。
 弗與誤つて落筆し、素練を汚す、因りて、蠅狀を成す權其眞なるかを疑ふて
 手を以て彈せりと傳へらる。最も大規模の人物を善す。曾て長さ四十尺に連
 れる素練の上に人物を畫く、其筆を遣る極めて迅速、頭面、手足、胸背忽ち
 にして成り、各々調和を得たりといふ。或は云ふ弗與、天竺の僧康僧會に就
 き、西域の佛畫儀範を見て之を寫せりと。蓋し當時康僧會遙に南方の吳に赴
 き、吳王孫權の歸向を受け、建鄴に建初寺を建て、江南佛敎の祖となり。
 弗與の弟子と謂はる、東晉の衛協は、佛畫に於ける支那畫家の鼻祖と稱せら
 る、より考ふるに、或は弗與等の康僧會の將來せる佛畫を以て畫像の新規範
 となせしやも知るべからず。唯、夫れ其筆蹟早く湮滅して、南齊の謝赫の時
 にだも、僅に秘閣内に龍頭のみを存したるが如き有様なれば、固より其畫法

を知るに由なし。

西紀二六五年、西晉の武帝、三國を統一して位に即きしが、後幾干もなく
 して内に八王の亂あり。當時漢魏以來塞内に蟄居せし胡族、漸く強大となり、
 晋室は其壓迫に堪へずして、遂に西紀三二七年に至りて亡びしかば、瑯琊王
 睿は位に建康に即きて、晋の祚を嗣ぎ、漸く江南の地を保つに至れり、之を
 東晉の元帝となす。事態斯の如くなりしかば、江北の地は空しく諸夷族の紛
 争に委ねられ、晋室の南下と共に、支那文化の中心點は、漸次南方に移り行
 き、其漢人の南下は、偶々、山水畫の發展を促すに至りしこと、前に述べた
 るが如し。支那に於て寫景の源を啓きたるは何人に始まれるや明かならず。
 されど秦時には烈裔が四讀五岳及び列國圖を畫き、漢代には後漢の劉褒が雲
 漢の圖を畫き、人をして熱を覺えしめ、又北風の圖を畫き、人をして涼を覺
 えしめたりといへば、其淵源の古きことを推測し得らるべし。更に吳王趙夫
 人は、皇子の出陣に當り、其軍服に山河の形勢を繡作して、皇子をして便な
 らしめたりと云へば、既に山川の景を實用に應用せしを知るべし。斯の如く

晉以前に於て既に山水畫の起源を見たと雖も、稍々、其體を得るに至りたるは、蓋し漢人南移の後にありとすべきか。之を史冊に徵するに、晉の明帝の輕舟迅邁圖、衛協の穆天子宴瑤池圖、戴逵の吳中溪山邑居圖の如き、其他史道碩の金谷園圖、顧愷之の雪霽望五老峰圖の如き、何れも晋室南移後の製作にして、爾來、宗炳や王微の山水の間に逍遙して、其景を寫し、咫尺萬里の趣きを述べ、昭胃の扇上に山水を圖して、自ら娛みたるが如き、之を記傳に徵して、其發達の跡を尋ね得べし。蓋し北方の地は、地處多くは平原なるを以て、未だ材題を山水に採るの機會を與へざりしも、南方の地は、山川の勝景致る處に、自然美を擅にせしかば、彼等はこゝに好個の材題を得ることゝなりて、其發達を促すに至りしものか。而して其始めは、人物畫の背景より出で、漸次に山水畫の獨立を見るに至りしこと、各國其例を同うせり。明西晋には荀勗、張墨等の名手を傳へ、東晋に入ては、更に多きを加ふ。明帝、王廙を師として書畫を善し、最も佛畫に長ず。加ふるに鑑識の明ありしかば、胡族、洛陽に入りて、魏晋以來の名蹟、大抵焚燒の禍に罹りたりしも、

人物畫の背景

景名蹟の蒐集

六朝の三大家
佛畫の鼻祖
衛協

顧愷之

再び明帝によりて法書名畫を蒐集せらるゝに至れり。後、桓玄の纂立するに及んで、此等の名蹟悉く桓温家に入れりといふ。衛協、王廙、顧愷之、戴逵父子、史道碩兄弟の如き、竝に東晋の名匠巨擘なりとす。中に就き衛協、顧愷之の二人尤も顯はれ、殊に顧愷之は劉宋の陸探微、梁の張僧繇と共に、六朝の三大家と謂はれ、畫聖とまで謂はる。衛協は吳の曹弗興の弟子にして、佛畫に於ける支那畫家の鼻祖と稱せらる。曾て七佛の圖を作る、點睛を施さず、點睛すれば飛び去るを恐れてなりと。謝赫の云ふ所に依れば衛協、以前の畫には未だ精微なるものなかりしも、衛協に至りて始めて細密を加へたるが如く、未だ形似に於て優秀ならざりしも、其骨法に於て卓越なりしが如し、弟子に顧愷之あり、字は長康、小字を虎頭といふ。晋陵無錫の人なり。博學宏才、老莊の學に精しく、支那畫家中最初の科學的批評家にして、又實に當代第一流の巨擘なりとす。其著に魏晋名流畫贊、及論畫一篇あり、竝に描寫の要法を述べ、其畫く所の種類極めて廣く、佛像、帝王、將相、宮女の人物畫を始めとし、龍虎、豹、獅子、神獸、野鷲、鳴鶴の類より、山水畫に至る

まで悉く手をつけざるはなし。毎に人物を畫けば、數年の間、目睛を點せず、人其故を問へば、答へて曰く四體妍蚩、もと妙處に關する亡し、傳心寫照、正に阿堵の中に在りと。

瓦棺寺の維摩詰

興寧中西紀三六三——三六五瓦棺寺始て置かる、僧衆、會を設けて朝賢に請ふ。時に士大夫十萬錢に過ぐるものなし、既にして愷之、百萬錢と記す、愷之素より貧なり、衆、以爲らく大言壯語と。後、寺衆、愷之に其寄附金を請ふ、曰く宜しく一壁を備ふべしと。遂に戸を閉して往來すること一月餘、書く所の維摩詰、工、畢りて將に眸子を點せんとす。乃ち寺衆に謂つて曰く、三日ならずして觀者施す所百萬錢を得べしと、戸を開くに及んで光彩陸離、一寺を照らす。施者嗔咽して俄に百萬錢を得たりと。(晋の義熙の初、印度より一玉色にして特異なり。晋を經、劉宋の時に至り、瓦棺寺に安置さる。寺内、思ふに其眞蹟は又戴安道の佛五軀あり。願愷之の維摩詰と共に、時人稱して三絶といふ。)既に湮滅に歸せるが如しと雖も、幸ひに宋人の模作今に存し、其畫風の如何様なりしかを窺ふの便あり。かの端方の所藏にかゝりし洛神圖の如き、蓋し其一ならむ。之を史冊に徵し、また當時の彫塑等に見るに、其間に自から一

其遺墨

王家

一筆書の創設

南路點
北路點

戴家

致契合の點を見るを得べし。

其他王虞の孔子の弟子十哲の圖を畫き、其從子王羲之の逸を獎勵し、逸少をして遂に書に於て古今の冠冕とならしめ、其子、獻之、敬之、風流高邁にして入木、丹青二つながら乃父の美風を繼ぎ、其書風漸く婉媚を加て、遂に一筆書を創め劉宋の陸探微をして、其書風より一筆書を成さしめ、書道に於て線の抽象美を益々發揮せしむる根柢を涵養するに至らしめたるが如く、本邦狩野家に傳へられたる、南路點特更に婉媚を北路點を強いて筆圭角の書法の如きも、其源を尋ねれば皆王獻之の書風より淵源したるものといふ。更に彫塑に於て西域の制を精くし、東夏造像の妙を極めたる、戴逵一家の如きも、亦書を善し、戴逵の作、故人弄猿圖、五天羅漢圖等唐以前に傳はり、北宋の米芾の蒐集せし書畫中には、其作觀音の像あり、其背後は悉く範金賦彩を以てし、其畫像は、形神人の如く、髯を有せずといふ。或は人物宗教畫の上に、西域造像の制を用ひて、別に一家の風格をなせしものか。其子、勃、勃の弟、竝に父の琴書丹青を傳へ、殊に勃の山水畫は、顧愷之の上にあるといふ。一門隱遁し

第三節 南北朝の時代

西紀四百二十年、東晋の禪を受けて、劉宋の武帝、位に即き、以て南方を統御せり。當時、北方の地は、拓跋魏の爲めに統一せられしかば、支那大陸は、此に南北兩朝によりて支配せらるゝに至れり。されば史家、劉宋以後の時代を稱して南北朝の時代といふ。後、隋朝の爲めに亡ぼさるゝに至りて南北一に歸す。此間、凡百五十年なりとす。

南北文化の
相違を生じ
たる遠因
南北地理上
の相違

抑も南北朝の兩立は、後來支那の文物の上に大なる影響を與へ、南北の差異を生せしめたる遠因にして、南北兩朝の相續期間は、百五十餘年に過ぎりしも、既に西晋の終りに當り、西北胡人種の侵入によりて、漢人の南下を促迫せし以來、北方は滿州及び蒙古人の據る所となり、南方は漢人種の據る所となりて、南北朝の基を開きたるが故に、前後、二百五十餘年の久しき間、各々南北人種を異にして支配され、殊に北支那と南支那とは、大に自然の景趣を異にし、一は黄河の流域に在りて、山秃げ地廣く、樹木稀少、人煙亦稀

南北畫風の
別

にして、塞外荒寒の風景を存し、一は揚子江の流域に屬し、山秀で水廣く、田園拓け、雞犬の聲相應じて、風流温籍の光景を呈するに由り、自然に南北の文物をして其間に差異を生せしむるに至れり。されば言語の如き南北其音聲を異にし、清淡の俗は南朝に行はれて、北朝に行はれず、優美の風尙も南朝に富みて北朝に乏しく、南人の牛車肩輿により、北人の専ら騎馬によるが如き、其一斑を窺ふに足るべし。更に文學の方面より見るも、詩賦文章は南方の産にして、經術訓詁の學は、北方の長ずる所なりとす。斯の如く南北朝に於る文物には、各々其特相を異にしたるを以て、書畫に於ても亦自ら其風格を異にせるものありしならむ。後世に至り風土の夷險に本づけて、南北の畫別を立てたるが如き、必しも則るべからずとするも、其用筆に自から硬軟の別を存し、一は軟性的にして風流温籍の趣味に富み、一は雄大奔放にして硬性的なるが如き、溯りて其起原を尋ねれば、或は南北各其書畫の風趣を異にせるに淵源せるやも知るべからず。(南北兩宗畫別、參照)

南北朝の繪畫

陸探微

一筆畫の創設

繪畫の材料

支那繪畫史

南北朝の繪畫は、支那繪畫史上に於て、變化發展の途に上りたる時代にして、一代の名手彬々として輩出せり。南方には陸探微、張僧繇、名聲最も高く、北方には曹仲達、揚子華の輩其名聞ゆ。陸探微は劉宋の明帝に事へて左右に侍す。其畫六法を備ふと謂はれ、多く佛像、古聖賢の像を作り、其筆迹勁利にして錐刀の如く、秀骨清像、生動を覺ゆるが如く、人をして凛々神明に對するが如からしむと。蓋し王獻之の一筆書に因りて一筆畫を創始し、書道運筆の妙趣を畫の用筆の上に移せるを以て、自から體運遒舉、風力頓挫の趣きを發揮するを得たるものか。其描法唐の吳道玄の吳帶當風の起倒ある描法の先蹤たり。其子、綏洪、弘肅、竝に乃父の遺風を傳へ、袁倩、顧寶光等の如き皆其門弟なりといふ。中に就き綏洪の麻紙立釋迦の像は、有名なりしものといふ。

蓋し支那に於て繪畫に用ゐたる筆の最も古きものは竹にして、後毛筆の發明せらるゝに方り、毛筆を以て畫きたりとは一種の説なれども、文字が已に周の世に毛筆にてかゝれたりといふ。覺しき石鼓文の存するを見れば、毛筆發明の

製紙の權輿

賦彩の新制

文人畫の先

淵源は已に三千年以前にありしことを想像すべし。

紙は幡紙とて縑帛を截て用ひ、後漢の元興中世紀一〇五蔡倫によりて樹膚、麻頭、敝布、魚網等を搗きて始めて、紙を製するに至りたるも、尙、畫工の用ゆる所とならず、六朝に入つても、大抵、縑素を用ひしが、間々紙を使用するものあるに至れり。斯の如く紙の使用の其發明に後るゝこと久しかりしは、麻紙等の面、墨汁を吸收して推筆を受けず、後より筆を加ふること困難なるを以て、古への色彩を用ひたる畫工の、最も難事としたる所なればなり。綏洪は實に其率先者なりとす。此等陸家一派の外、佛道、人物に吳暕、劉胤祖兄弟、謝莊等あり。顧景秀、顧駿之亦劉宋武帝の時に名あり。竝に形似賦彩に長じ、賦彩の新制を創めて、古體を變じて新體を開く。又宋炳と王微とは、山水の名手にして竝に畫叙一篇あり。共に跡を煙霞水石の間に晦まし、自己の消遣娛樂の爲に、丹青を弄して、以て北宋に至りて勃興せる行家外の畫、謂ゆる文人畫の率先を成せり。其他、當時北魏には、蔣少遊、揚乙德、王由等の佛道人物に長じて、北方の畫苑に名を成せるあり。

南齊に入りては、齊の高祖文學に通じ、頗、畫を好む。曾、劉宋の高祖、桓玄を亡して其書畫を收藏せしが、後、劉宋の亡ぶるに當り(西紀四七九)、更に齊の高帝に傳はり、高帝聽政の暇、旦夕之を披玩して措かず。乃ち古へよりの名畫を品第するに、年次の遠近に因らず、たゞ其技工の優劣を以て等差を附し、陸探微より范性賢に至るまで、四十二人、四十二等、二十七帙、三百四十八卷と爲せり。斯の如く繪畫の鑑賞微に入ると共に、畫論も亦漸く精密となり、當時謝赫の畫六法あるに至れり。

謝赫は西曆五世紀中葉の人にして、尤も人物を能す。顧愷之以後の科學的畫家にして、從來の畫工に比するに、寫生に長じたるが如し、其人物を寫貌するに當り、對看を俟たず、先づ一覽して家に歸り、記憶を辿りて筆を取る、然も毫髮を遺失せず、又麗服、靚粧時に隨つて變改し、直眉曲鬢、時と新を競ひ、其形似の細微にして一種新様なる、時人をして皆其鬣に倣はしめたりといふ。蓋し謝赫に至りて、畫の形似漸く完全の域に進みたるが如く、中興以來、象人に於て最となすと謂はる。其六法に準據して、其目撃せる古來の

名蹟二十六本を評價せる中に、顧愷之の作を以て第三品に置き、其聲、實に過ぎたりと評せるは、傳來の批判に反したるものにして、寫生的見地に立ちたるが爲ならむ。其六法に曰く、一に氣韻生動、二に骨法用筆、三に應物象形、四に隨類賦彩、五に經營位置、六に傳彩模寫是れなり。この畫六法は古來よりの畫家が、自然に畫に對する心得として暗合せる個々の個條を、謝赫に至りて六個の條目に總合し按排されたるものにして、後來、畫家の金科玉條として遵奉せる所となれり。思ふに西曆五世紀の中葉に當り、早く既に斯の如き法則様のもの、一般の畫家に認められたるが如き、世界廣しと雖も、其類例の他に認むべきなく、實に支那繪畫の一大光彩と爲すを得べし。

又古畫の模寫は、既に晋の顧愷之によりて、模寫の大要を述べられたりしも、謝赫の時に至りて其制法の委しきを見るに至りたるが如し。爾來、模寫の勞少きが爲め、大に行はる。然れども普通の畫工に取りては、其原本の氣韻を寫し出し能はざるは、固より其所なりとす。傳寫に二法あり、謂ゆる模寫、臨寫是れなり、模寫とは素練を原本の上に置き、敷き寫しにするをいひ、

官楯の設立

毛惠遠一家

梁の時代

支那繪畫史
 臨寫は其原本を傍に置きて一々違はざる様に寫し取るをいふ。かくて朝廷に
 も此風行はれ、之を官本といふ。唐の時代には之を御府楯本又は官楯といひ
 て、内庫翰林院の諸生盛に之を行ひ、徳宗の朝、國歩艱難となり、書道の漸
 く衰ふると共に、楊寫の法も漸次に廢るゝに至れり。
 南齊には上述の謝赫の外、毛惠遠其名尤も高く、弟惠秀と共に高帝に事へ、
 官、少府卿に至る。顧愷之を師法とし、書體周贍にして意匠窮りなしといふ。
 惠秀は永明中秘閣の待詔となり、高帝將に北伐せんとする時、命じて漢武帝
 北伐の圖を畫かしむ。其子稜又書を善す、其餘劉瓛は婦女を以て其名毛惠遠
 と並び馳せ、姚曇父子は、魁魅鬼神を以て、章繼伯及び邊道愨一族は、寺
 壁、書扇を以て、沈標、沈粲は色彩、綺羅、屏障を以て、竝に當代に其名を
 揚ぐ。
 西紀五百〇二年、齊の疎族蕭衍、南齊の禪を受け、位に即く、之を梁の高
 祖武帝となす。武帝人と爲り英邁にして文學に通じ、且つ繪畫を好む、武
 帝齊の王室に傳はれる古來の名蹟を收藏し、更に蒐集して異寶を加ふ。其七

元帝の山水
松石格

方等

釋宗の輸入

子元帝字は世誠、元帝の長子方等字は實相の如き、共に書を能くす。元帝に
 山水松石格の論著あり、曾て蕃客、入朝圖を畫き、又游春白麻紙圖等の作あ
 り、其技工天生に出づといふ。方等又寫生に長じ、座上の賓客、意に隨つて
 點染す。童兒に問ふに皆之を指示し得たりといふ。加ふるに武帝の在位、四
 十八年の長きに及び、當時北朝の屢々兵革を見るに反して、南方は太平日久
 しく、武帝大に佛教を尊崇したりしかば、當時印度より海路を経て、直ちに
 支那に渡航する僧侶多く、禪宗の二十八代の祖にして、支那禪宗の初祖とな
 りし菩提達磨の如きも、帝の歡迎を受けたる一人なり。蓋し佛教は五胡の亂
 入と共に、支那の西邊より其北方に輸入され、長安、洛陽の兩都を中心とし
 て支那の南方に蔓延したりしが、梁の時代頃より盛んに海路によりて輸入せ
 らるゝに至りしかば、當時、建業の都は、佛教の中心地となり、却つて南方
 より北方に蔓延するに至れり。されば印度美術の如きも、梁の時代よりは多
 く海路によりて南方に輸入されたるが如く、梁の郝騫は武帝の命を奉じ、印
 度、室羅伐悉底舍衛國の祇園精舍の鄔陀衍那王の佛像を模造して歸れり。更

に史家の傳ふる所に依れば、印度中部の壁畫も、此時代に輸入され、當時武帝によりて盛んに起興せられたる寺院の壁面に施こされ、爾來朝廷の宮殿、大官、紳商の家屋に至るまで用ひらるゝに至れりといふ。

思ふに壁畫は、既に上古より王宮又は祠堂等に用ひられたるものなるが、更に一種新様の印度壁畫の此時代に輸入せられ、初めは専ら寺院の裝飾に用ひられしも、後には其漸く支那化すると共に、國民の風尚に投合して、一般に使用せらるゝに至りしものならむ。而して其印度壁畫の畫様の如何なるものなりしやは明かならざるも、恐らくは今日印度アジヤンダ窟に遺れるものと大差なかりしならん。我國大和法隆寺の壁畫の如きも、亦此梁代に支那に傳はりしものが、支那を経、朝鮮を経て、多少變化されたる印度暈染法の傳へられたるものにあらざるか。支那に於ては今日此種の壁畫を見る能はざるも、梁史に見ゆる所の張僧繇の建業の一乗寺の扁額の畫は、思ふに此手法を傳へたるものならむ。今參考の爲に帝國美術略史中より、法隆寺金堂の壁畫の説明を轉載せん。

今熟ら其作法を案するに、壁面全體に白土(胡粉)を塗抹し、其上に描線を以て圖を作り、次第に彩色を施し、ものにして、其色料は墨、朱、紅、黄土、青黛、綠色の液汁、綠青にして、各色濃淡を分ち、潤筆と乾筆ともに併せ用ひられたり。其畫風は、全く日本、支那固有の古畫と異なる點多く、線は殆んど無意味にして、形狀を作り彩色の野界たらしむるに過ぎず。最も特異なるは、暈染俗に隈取の法にして、全く陰影を作らんが爲めに、濃くして且つ深く施されたり。されど彼の埃及の棺中より出でし古代の肖像畫又アジヤンターの圖像の如く、十分に陰影を作りたるものにあらず。思ふに印度暈染法の、支那を経、又日本人の手によりて、多少薄らぎしものと見るべきなり。又佛菩薩の面相は、全く印度様を帯ぶるもの多く、アジヤンター圖像の中代のものに類似し、姿勢は凡て雄偉にして、手指の如きは最も寫實にして、緻密なる變化の巧を弄せり、服裝は、中尊は何れも衣を全身に纏ひ、其衣に多くの襞を有せり。他の佛菩薩は、上半裸體のもの多く、皆胸飾、腕環などをつけ、左肩より右腋下に袈裟をかけたなり。又腰

部には、極めて薄き裳をつけて、兩足は透き通りて見ゆ。又諸裝飾中、其意匠の印度様にして、奇怪なる想像に出づるもの少からず。例へば普賢菩薩の乗れる象は、其牙延長して二莖の蓮華となり、其一莖は腕轉して、花形の燈と變じ、普賢の足を此上に載せたる類なり、中尊の背部に立てる屏障には、埃及の古圖に見る所の水瓶を積み累ねし模様又多く、印度阿育王時代の建築飾装に見る所の、輪寶形の蓮花文等あり。其他の模様中には、アカンサスの葉の如き、希臘風のものもあり。又菱花形、麻の葉ツナギの如き、支那日本風のものも少なからず。且衣服には染物と見ゆる模様と、織物と見ゆる模様との二種あるが如し、これ等の諸點に徴するに、全く此壁畫は、印度中部邊の圖様の、多少支那に於て變化せしものを模範として、我畫工が適宜にこの金堂の壁面に配して畫き成せるものにして、實に非凡の大作、千二三年前東西交通の事跡を證明し、當代藝術の進歩を示して、煥然たる光彩を世界の歴史に放つものといふべし云云。

又建康の一乗寺の扁額の畫に就いて書史に徴するに、梁史に、

一乗寺の凹凸畫

西域畫風の影響

建康にある一乗寺の門なる扁額の畫は、張僧繇の筆跡にして、其花形の如き天竺の遺法と稱し、朱及び青緑を以て成る。遠望すれば眼暈して凹凸あるが如く、就いて之を視れば尋常の畫なり、故に人此寺を凹凸寺と稱す。即ち遠望すれば眼暈して凹凸あるが如く、就いて之を視れば尋常の畫なりといふは、從來、支那畫家の用ひざりし陰影法の著しきをいひしにはあらざるか。されば一乗寺の凹凸畫は、我法隆寺の壁畫と手法より出でたるもの如く、共に印度のアチアンター窟の壁畫に相似するものあるが如し。

蓋し支那に於ける六朝の時代は、實に佛教弘宣の時期にして、當時西方より翹集せる僧侶、甚は多く、かの天竺の康僧鑠、佛圖澄、龜茲國の羅什三藏等の如き、又求法渡天者、法顯、智猛、宋雲等の如き、何れも皆弘道の第一方便として圖畫佛像を齎らし、加ふるに南朝、北朝の帝王、將相盛んに起塔、造像の業を興したるにより、自然に從來の支那畫の上に影響を與へたるべく、殊に梁代に於ては、印度の壁畫の輸入され、迦佛陀、摩羅菩提、吉底俱等の畫を善くしたる僧侶來化したりしかば、張僧繇の如き先づ其の手法を

支那文化の
日本に及ぼ
せし影響

侯景等の亂
によりて名
蹟大抵燬盡
に斷す

傳へて、一新機軸を出したるものならん。而して我國の支那文化の影響を受くるに至りたるは、六朝の時代にして、本邦に傳存せる古代の小銅像は、大抵、北朝の遺物なりといふ。又我國の舞樂の如きも、六朝の支那文化の影響を受け、奈良、平安の時代に至りて發展したるものにして、もと印度的要素と古代漢人の樂とを結合して成りしものなり。殊に本邦佛匠の祖たる司馬達等は、梁の人にして其本邦に來りたるは、繼體天皇の十六年、梁の武帝の普通三年なりとあれば、法隆寺の建立を隔つること僅かに四十年前のことなれば、其間の關係も略ぼ推察せらるべし。

斯の如く武帝の治世は、藝術の發展に便なりし時代なるを以て、張僧繇の如き古今の一大巨擘を出し、六朝の藝苑に一大異彩を放つに至れり。然るに帝、晩年に至り、漸く政事を怠り、遂に侯景の亂を招き、建康の陥るに當りて、内府に充溢せし名蹟、多く燬盡に歸し、後、文帝其餘す所のもの皆載せて江陵に據りしも西魏の將、于謹の爲めに陥られ、將に降らんとするに當り、帝乃ち名畫、法書及典籍二十四萬卷を集めて焚かしめ、火に投じて共

張僧繇一家

沒骨皴創始

に焚かれんとす。宮嬪、衣を牽いて僅かに免る。歎じて曰く、肅世誠遂にここに至る、儒雅の道、今夜窮すと。于謹等の燬盡の中より書畫四千餘軸を收めて長安に歸る。爾後轉々して唐室に傳はるといふ。

梁の畫工にして今日に傳はれるもの多しと雖も、張僧繇は、恰かも群星中の月の如く、此時代の他の作家をして其光りを失せしめたるの觀あり。僧繇は吳中の人、梁の武帝の天監中、歷官して吳興の太守となる。時に武帝深く佛敎に歸向し、頻りに僧院、堂塔を建立し、多く僧繇をして畫かしむ。當時諸皇子多くは外征して内に在らず、帝、毎に其面目を想見す、因つて僧繇を遣はして之を傳寫せしむ、之に對すれば其人を見るが如かりしと。其畫風今日に於ては固より明確なるを得ずと雖も、之を記傳に徵するに、前述の如く彼は西域の畫風を學びたるが如く、其創始にかゝる沒骨皴は印度暈染法より脱化せるものならむ。其法先きに筆墨を以て鈎研せず、青綠、重色を以て適宜に染め出すものなれば、從來の鈎研の畫法とは、全く其の趣を異にせるものにして、唐の王洽等の手法又此に類するが如し。されば支那畫は張僧繇に

衛夫人筆陳

至りて一、新面を開かれたりとするべきか。其天女、宮女の如きも願、陸等の列女と異なり、面、短にして艶なりといふ。然れども彼の點曳所拂は、衛夫人の筆陳圖に依れるものにして、其一點一畫と雖も、鈞戟利劍、森々然たりといふ。

筆陳圖は點畫を七つに分ちて其作法を説きたるもの、即、一如千里陳雲、隱々然其實有形。一萬歲枯藤。一陸新犀象。一崩浪雲奔。一勁努筋節。乙百鈞弩發。如高峯墜石、磕々然實如崩也。

其子、善果(或は張果)弟、儒童竝に畫を善す、善果標置點拂、殊に佳致多く、其合作に至ては、往々乃父の作に紛ふといふ。

張家の外當時、専門の行家として其名の著はるものは、袁昂、焦寶願、嵇寶鈞、解倩等の名手あり。焦寶願は其樹色皆新意を出し、點黛に朱を施して輕重失はず、嵇寶鈞は意、真俗を兼ね、賦彩鮮麗にして之を觀るもの皆悦ばざるはなかりしといふ。江僧寶又象人に於て名あり、其他、梁室に事へ、士夫にして畫を善せるもの、陶弘景、蕭貴等あり、弘景は山中の宰相と謂はれ、

陳の時代

蕭貴の扇上の山水は、咫尺に萬里を容るといはる、竝に前述の宋炳、王微の亞流たり。

更に陳の時代に入りては西紀五五七、陳の文帝大いに畫を好み、銳意古畫を搜求して得る所八百餘卷なりと謂はる。後、亡ぶるに當りて其名蹟大抵、隋の王室に傳はるといふ。當時、書畫に於て最も其名を得たるを、吳郡の顧野王とす。畫は最も草蟲を善す。

北朝の藝術

當時、北朝に於ては屢々兵革を見、殊に北魏の太武帝、北周の武帝の如き共に大滅法を行ひ、天下の寺像等多く破壊せられ、加ふるに北人の武弁的風尚は、偶々藝術に非なりしが如し。然れども北魏の拓跋家の如きは、早くより佛教を以て其國教となし、歷代の帝王大抵、佛教を保護し、盛に殿堂、伽藍を興し、道武帝は千軀の金像を作り、孝莊帝又一萬軀の石像を作りし程なれば、彫塑の技工大に發達し、最初、本邦に傳はれる小銅像は、皆北朝の遺法なりとす。されば前述の揚乙徳、王由等の佛畫及び蔣少遊の人物畫の圖様の如きも、略類推するに難からず。爾來、北齊に入りては、世祖最も畫を好

北齊の時代

田僧亮
劉殺鬼
揚子華

曹仲達の淨
土畫

み、其二子高孝術の如き、鳥類を善せし程なりしかば、蕭放(梁の武帝)入つて待詔詩林館となり。曾て宮中に於て諸畫工を督し、古來の聖賢及び詩意を畫き、又揚休之と共に同じく御覽を撰し、田僧亮、劉殺鬼、揚子華など、皆世祖の爲に重んぜらる。田僧亮、最も形似に精通し、畫名一世に高く、劉殺鬼は鬪雀の圖を妙にし、揚子華は唐の閣立本の爲に、古來名手多しと雖も、其妙を曲盡し、其美を發揮し、一筆も減するに餘りなく、一毫を加ふるに餘地なきは、其れ唯揚子華なるかと激揚され、最も世祖の爲に重んぜられて毎に宮中に居り、世稱して畫聖といひき。曾て馬を壁上に畫く、夜に至れば水草を求めて、蹄齧馬鳴するが如きを聴けりと。蓋し北朝に於ける寫生家の第一位に居たるが如し。

當時、梵像及び淨土畫に於て、其技工北齊第一といはれたるは、曹國の人、曹仲達、官朝散大夫に至るなりとす。唐の張彥遠曰く、北齊曹仲達、梁朝張僧繇、唐道玄、周昉、各々有損益、聖賢勝饗、有動足人。瓔珞天衣、創意各異、至今刻畫之家、列其模範。曰曹、曰張、曰吳、

曹衣出水
吳帶當風

北周の時代

隋の統一

曰周、斯萬占不易矣。

蓋し其衣褶一種新様の手法なりしが如く、後世の畫家、曹衣出水、吳帶當風といふに至る。(宋の郭虛若の説に依りて思ふに、曹の畫風は其體稠疊にして衣服緊窄し、描法に舞筆少く、後世の謂ゆる蚯蚓描に似たるものありしが如し。彫塑鑄像に於ても、後世亦曹、吳の法を傳ふといふ。更に北周に入りては、馮提伽北平等の名手あり。馮提伽最も寺壁に長じ、其山川草樹は宛然塞北の景を存し、又車馬を善せりといふ。

第四節 隋朝の繪畫(章下に入れた)

東晉元帝以來、凡二百七十年を経て、隋の文帝北周及び陳を亡ぼし、此に久しく相對峙せる南北の兩朝を併せたるは、頗る秦の始皇が六國を滅して海内を一統せしにも似たり。而して其結果、北朝の風は南朝の習を抑へ、清談跡を絶ち、經學も亦興りたるが如く、南北相對抗せる思想界の墻壁は、自然に打破されて、其融合を促進したるが如し。されば繪畫の如きも、自から其南北畫風の特色を融和せる機會多かりしならむ。展子虔、董伯仁の召されて

朝廷に入るや、初めは其圖様各々異なりしも、後には互ひに其意を採りて相益したりといふを見ても、其一般を窺ふに足らむ。

文帝心を政治に傾け、節儉を主とせしかど、尙、東京の觀文殿に二臺を起し、東を妙楷臺といひ、古へよりの法書を藏し、西を寶蹟臺といひ、古來の名書を收む。又開皇二十年には侍官、夏侯明に命じて、三禮の圖を作らしむ。殊に諸王子多く奢侈に耽り、煬帝の如きは即位の當時、大業元年(西紀六〇五)洛陽に顯仁宮を興し、又長安より江都に至るまで、離宮を四十餘個所に設け、同四年には汾陽宮を造るなど、其建築、土木殆んど漢帝を凌駕して、豪奢百代を壓せり。加ふるに當時寺觀、道觀、邸宅等の建築續々起り、何れも其裝飾に繪畫を要せざるはなく、又煬帝は自ら古今藝術五十卷を撰したる程なりしかば、こゝに幾多の名工を出すこととなりぬ。此時に當り、展子虔は河北より、董伯仁は江南より、共に長安の都に上りて朝廷に事へ、其他、閻毗、揚契丹、鄭法士兄弟等の如き、皆隋室に事へて、其大土木に與り、各々其天縱を發揮して後世に其名聲を垂るゝを致せり。

煬帝の奢侈

鄭家

界畫の發達

展子虔

輦輅に長じ、閻毗は其技工を、其子閻立德兄弟に傳へ、揚契丹は當代寫生家の泰斗たるが如し、鄭法士太夫は僧繇を師法とし、江左に於て僧繇以後獨歩と稱され、最も人物、樓臺に長ず。其層樓は添ふるに喬林嘉樹を以てし、碧潭素瀨には、綵るに雜英芳草を以てし、必ず暖々然として春臺の思ひあらしむといふ。蓋し樓臺の如き界畫は、展子虔、董伯仁等の如きも、亦此を善せしかば、界畫の如きは、隋朝に及んで大に發達せるが如し。法士の弟法輪、徳文、其孫尙子、皆書を善し、一門藝名を時に擅にす。其中、尙子は多く戰筆の體を作り、當時王仲舒亦其衣服手足木葉川流戰動し、鬚髮殊に獨爾の妙を存せりといふ。法士の畫風は當代の袁昂、陳善見、劉烏及び初唐の閻立本兄弟等、竝に其法を傳ふものといふ。然れども唐以降、大いに發展の氣運に向ひたる山水畫に影響を及ぼしたるは、展子虔の鮮麗巧緻なる畫風なるが如し。子虔北齊、北周を経て隋に事へ、朝散大夫帳内都督と爲る。故實、人馬を畫き、其山水樓觀は六朝第一と謂はれ、命意精深、造景奇堀なりといふ。唐の閻立本、李思訓等多く展の手法を宗とせりといふ。

十六羅漢の
嚙矢

古來の名蹟
唐室に入る

六朝畫風の
概論

此等諸家の外、江志の山水木石、李雅の佛像、鬼神等、又一時の撰たりしが如く、當時西域地方より來りたる東部、土耳其の尉遲跋質那、印度の僧曇摩抽、及び拔摩等、又西域の畫を善し、其畫風、支那繪畫に影響を及ぼしたるが如く、拔摩は佛陀の直弟十六羅漢の像を畫きて其濫與をなせり。斯の如く、隋朝の藝苑隆盛なりしが、煬帝の晩年に至り、國用足らず、内亂頻りに至りて、群雄四方に蜂起し、遂に前朝以來、傳來したる法書、名畫を戴せて、東揚州に據ることとなりしが、中途、船覆りて其一半を失ひ、其大半、傳へて唐室に入る。貞觀畫史に載する所のものは是れなり。之を要するに、六朝の畫道は、種々なる方面に於て發展し、殊に宗教畫に至りては、支那繪畫史上に重きをなすと謂はれ、宋の郭虛若の如きは、その著、圖畫見聞誌に、近代方古、多不及、而過亦有之、若論佛道人物、士女牛馬、則近不及古云云と激揚せり。然れども漢代以降、支那繪畫發展の大勢を見るに、六朝の繪畫は其大體に於て、漢代の畫風より唐朝の畫風に進む橋梁となりたる過渡時期に屬し、其畫風巧緻なるも、尙、漢代古拙の餘韻を存し、

寫生的技能の如きも、之を漢代に比するに遙に勝れたるも、猶、唐朝寫生の巧整なるに如かざるが如し。蓋し、これは何れの過渡時代にも共通せる現象にして、從つて未だ確然たる格式を成さざりしが如く、これを其他の美術に徴するも、未だ渾融大成の運に至らずして、頗る動搖的なるを見む。而して繪畫が唐代に入りて、あらゆる方面に於て完備の域に進み、支那繪畫史上に一新記元を開き、殊に寫生的技術の勝れたりしことは、其遺蹟並に當代の彫塑等によりて知らるべし。

第二篇 中世史

第一章 唐朝の繪畫

第一節 唐朝文化の概論

支那國民は漢の天下を失ふてより、前後三百年の間、風雲亂離の間に生活したりしが、西紀六百十八年、唐の高祖天下を統一し、尋いで太宗位に即き、貞觀の治世を見るに至るや、こゝに四海昌平の春風に接し、施政の組織、社會の秩序大いに備はり、憲章制度頗る整ひ、西紀六百八十年比には、西域の諸國皆朝貢し、其威令の及ぶ所、殆んど全亞細亞大陸の大半に互り、六都護府を置いて之を統轄せり。後、五十年を経て唐室の中興玄宗位に即き、勵精治を圖り、大いに文教を奨勵し、又屢々功を邊境に樹てしかば、再び開元、天寶の治世を生じて、國勢大いに震ひ、漢族氣運の盛大なりしこと、實に空前絶後なりとす。

貞觀の治世

開元、天寶の治世

文運の隆盛

密教の輸入等によりて圖像の變化豊富となる

されば詩には李白、杜甫の天才輩出して絶句、律等の格法始めて定まり。孔顯達、顔師古等によりて五經正義なるもの選定せられ、韓愈、柳宗元の徒出で、後代に於ける文章の師範となり。書家には虞世南、歐陽詢、褚遂良、顔眞卿、張旭、李邕等の名家輩出して、入木の妙を極め、宗教は國威、西域地方に震ひ、東西の交通頻繁を加ふるにつれ、景教、回教、拜火教の輸入を見、殊に佛教は道教と共に一般に流行し、智者の天台、賢首の華嚴、善導の淨土、慈恩の法相、南頓北漸の禪家、南山の律等、諸宗競ひ興り、玄宗等の將來せし佛畫佛像は、金剛智、善無畏、不空三藏等の密教と共に傳へたる圖像と、もに、當時の圖像に豊富なる變化を與へ、揚惠等の彫塑、吳道玄等の佛畫に著しき影響を及ぼすに至れり。而して當時に於ける佛畫美術の一部は、今尙、遺存せる龍門の石像、西紀六八〇、廣元の佛崖、西紀七二〇等によりて其一般を窺ふに足り、相貌圓滿、衣褶流暢にして、其技巧、復、六朝の古拙なるが如きにあらず。(高野代の作品本邦に傳存せるもの間々之あり、)其他建築術に於ても寺觀、道觀、宮殿、樓閣等の如き、何れも皆宏壯華麗を盡し、一代の

文物燦然として美を古今に肆にせり。
 斯の如く、唐朝三百年間は、文運隆盛にして書道亦盛なりしが、社會風尚の變遷と共に、文運の移るにつれ、繪畫も亦其變遷に従つて變化を生ぜり。これ繪畫も亦其他の文藝と同じく、國民思想の反映なるを以てなり。吾人は今便宜の爲に、唐朝三百年間の繪畫を、前期、後期の二大時期に分劃して、其概梗を述べんと欲す。蓋し、唐朝の思想界は、自然に二大時期に分劃され、唐室の中興、玄宗の開元、天寶の際には、初唐の文運其極に達し、更に新たな思潮を迎へんとせる時代にして、歴史はこゝに巨大なる分水嶺を作りて、各々其特色を色別するの觀あり。されば繪畫も亦自ら此時期を限界として各各其特色を發揮せり。

唐朝思想の二大色別

第二節 唐朝前期の繪畫

唐朝前期の畫風

唐朝前期の畫風は、大抵、六朝の畫風を繼承し、其技巧一段の進歩を見たりと雖も、未だ一新紀元を開くに至らざることを、猶、初唐の文學の六朝後半期に於ける綺麗艶冶の餘波を揚げ、詩に於ては、沈、宋體の律の如き、六朝

貞觀の藝苑

の詩、律に一變化を興へたりと雖も、尙、其根柢に於て、六朝艶冶の餘韻を傳へ、其文章は依然として六朝の四六駢儷の體を踏襲して、未だ李杜、韓柳の正大雄渾の風韻を見ざるが如く、其畫風は多く古來より踏襲し來りたる、鉤研の法を以て畫かれ、細緻艶潤なりとす。而して山水樹石の如きも、未だ發展の氣運に向はず、其用筆極めて細緻なるものあるも、未だ其妙趣の發揮せられたるものなかりき。されば初唐の繪畫は嚴密なる意義に於て、未だ中世史の時期に入らざるものといふべし。然れども貞觀の治世は國運の高潮に達したる時代にして、初唐の文物をして隆盛の氣運に向はしめ、書道も亦大に發展し、其鑒賞の如きも六朝より盛なることを致しぬ。即ち唐の高祖天下を統一するや梁、隋の官本、長安、建康兩都祕藏の珍蹟は宋遵貴是れを載せて河を沂り、漂没十の一二を亡へりと雖も、其餘は皆高祖の御府に歸し、太宗更に天下に求購せしかば、貞觀公私書史に録せられたる名畫二百九十三卷の多きに及べり。天后の世、張易之奏してこれを修め、名工を鳩めて副本を模製し、自ら多く其真本を藏したりといふ。而して太宗の如きは、自ら書畫

壁畫の流行
佛畫の佛像
行はる

を善くし、其弟、漢王元昌、韓王元嘉、皆書を善くせし程なりしかば、閻立德兄弟等の如き一代の名手輩出して、四海統一の鴻業を謳歌するに至れり。加ふるに佛、道の二教大に流行し、寺觀、道觀の建築盛んに興りしかば、善導大師の如き、淨土變三百餘壁を造り、中宗が佛寺の壁に道相を畫きて道觀に佛畫を畫くことを禁じたるなど、畫壁の盛なりしことを知るべく。輕畫の佛像の如きも、當時行はれたりき。更に太宗、高宗の御世には玄奘三藏、國使、王玄策等の印度より將來せし佛畫は于闐王の太宗の朝に薦めたる尉遲乙僧の印度暈染法の凹凸畫と共に、支那の繪畫を益したること少からざりしならん。

かくて高祖以後、漸く世の太平に馴れ、奢侈淫樂を事とするに至りて、武韋の禍亂を惹起し、中宗の朝には、唐室の基礎將に傾かんとするに及び、唐室の中興、玄宗位に即き、此に開元、天寶の治世を開き、畫道の上に一新紀元を樹つるに至れり。

閻家

閻立德

唐朝繪畫界の劈頭に立ち、唐の四海統一の大業を謳歌したるものは、夫れ閻立德の一門が。父子兄弟俱に書を善くして家業を傳ふ。其父毗は隋朝に事へ丹青を以て開け、立德の弟立本は其家の白眉なり。高祖、武徳中、立德尙衣奉御となり。袞冕大裘等を作り、六服腰輿傘扇、皆其妙を得たり。太宗の朝、貞觀の初、王華宮の圖を作りて帝の旨に稱ひ、官、工部尙書に至る。貞觀中、東蠻の謝元深入朝す、時に顔師古上奏して曰く、昔、周武の世、遠國のもの歸款す、乃ち其事を集めて王會の圖を作れり。今、卉服、鳥章、俱に蠻邸に集まる。實に圖寫せしむべきなりと。因つて立德等に命じて之を寫さしむ。其詭異の狀、毫末も違へず、具備せずといふこと莫しと。

立德の弟閻立本も亦太宗、高宗の兩朝に事へ、顯慶の初、令兄立德に代りて工部尙書となり、總章元年(西紀六六八)右相に拜せらる。立本應務の才に長じ、兼て書畫を善くす、最も形似に妙なり、朝廷號して丹青の神化と稱す。詔して太宗の眞容を寫さしめ、又秦府十八學士の圖を寫さしめ、褚亮をして之が贊を爲さしむ。貞觀十七年には凌煙閣功臣二十四人の圖を作り、自ら讚

閻立本

を爲せり。當時、天下初めて定まり、威令外國に震ひしかば、外臣の來朝するもの多く、立本をして多く其風俗を圖寫せしむ、曾て太宗、侍臣と舟を春苑地に泛ぶ、時に異鳥ありて波間に漂遊す、上、愛玩して已まず、乃ち侍臣をして之を歌詠せしめ、急に立本を召して寫貌せしむ。閣外皆畫師と傳呼す、立本、官、既に主爵郎中たり、而も池側に俯伏して丹粉を吮ひ、坐者を望んで差恨流汗す。退いて其子を戒めて曰く、吾、少して讀書文辭儕輩に減せず、今獨り畫を以て名を知られ副役と撰ぶ所なし、汝曹、慎んで此藝を習ふことなかれと。

閻氏一家の畫風

今史冊に徵するに、閻氏一家の畫風多く沈着痛快を極め、其宮女は曲局豊類にして神采生ける如く、體法高古、景物變幻にして無窮に出づと謂はる。更に元の黃子久等の記す所に依れば、其作、西嶺春雲圖は、曾て内府に入り、宣和の御書題ありて、墨を用ゆる峻嶒にして骨あり、色を設くる奇崛にして法あり、又丹朱を以て石質となし、後加ふるに青綠を以て點綴せられたるものにして、人物僅に寸餘、而かも生動活潑、纖毫滲漏の所なしといふ。又彼

釘頭紋

等のいふ所によれば、兩宋人の釘頭紋を以て染むるもの、其源、此圖様より出づとあり。

尉遲乙僧

當時、于闐國の王、尉遲乙僧の丹青を能くせるを以て、之を太宗に薦む。太宗之に宿衛の官を授け、郡公に封す。外國圖及び佛像に長ず。時人其父、拔質那遊朝に來を太尉遲と爲し、彼を小尉遲といへり。其用筆は緊勁にして屈鐵の如く、大は灑落にして、氣概ありと。曾て慈恩寺の塔前に千手千眼の觀音圖を畫く、凹凸の花面の中間に千手眼の大悲菩薩あり、其精妙の狀名くべからずと。書鑿に曰く、尉遲乙僧佛像を作りて甚だ佳なり。其用色沈着にして絹素の面に推起す、而かも指を隠さずと。其書法張僧繇の畫きたる一乘寺の凹凸畫に相似し、また我法隆寺金堂の壁畫を想起せしむ。其指を隠さずといふは、蓋し陰影の著しきをいふか。

瑞錦宮綾章彩の創始 屏風の制

其他初唐に於て特種の技工を有したるは、寶師綸の瑞錦宮綾章彩を創始し、蜀人之を陵陽公様と稱し。范長壽張僧繇の田舎の光景を作り、其の山川の形勢には屈曲、向背、分布、遠近、各々條理を具へ、今の屏風の制を創め、河

東の薛稷字通は書畫に通じ、其鶴は黄筌の五代蜀主以前に於て第一と稱され、屏風の六扇鶴圖の如き彼より始まれりといふ。其餘、曹元廓は、天后の朝に九鼎に九州物産の圖を書き、殷仲容は其父、開禧と共に寫貌を善し、墨色を用ふるに五采を兼ねるが如かりしといふ。又長孝師の地獄變圖の如き、尹彬の佛道鬼神に長じて、其筆力快利なりしが如き、並に其最も顯著なるものなり。

第三節 唐朝後期の繪畫

西曆七百三十三年、玄宗位に即き、唐室を再興し、姚崇、宋璟等の名相を任用して、屢々邊功を建て、威令西域に震ひ、内外能く治まりしかば、貞觀の治世以來、約六十年を経て、此に開元天寶の治世となり、其四十年間の昌平は、謂ゆる開元、天寶の文化を啓發して、文學、技藝一時に勃興し、李唐一代の文運、美を前代に肆にせり。而して開元、天寶の際には、漢族氣運の最高潮に達したる時代にして、文化も亦其特相を發揮し、詩には李、杜の天才輩出して、初唐の格調を一變し、正大渾雄の格律を開き、文章の如きも、漸く

漢、魏の古體に返りて、渾融一變の風潮を見るに至りたるが如く。畫道に於ても、吳道玄、李思訓、王維等の名匠巨擘輩出して、道釋、人物、山水畫の上、新紀元を開くに至れり。即ち佛像、人物畫は、吳道玄の謂ゆる墨痕中に略、微染を施こし、自然に練素の面に超出せる淡彩の法は、謂ゆる裝の風格を出せり。道玄、初の名は道子、幼にして孤貧なり。生地陽翟の附近、洛陽の都に客遊し、書法を當時の名家、張旭、賀知章に學びてならず、因りて繪事を習ふ。若年にして既に深く妙處に造る、大率、張僧繇を師法とす。初め兗州瑕丘尉と爲る、時に名聲、天朝に達す。玄宗召して禁中に入れ、内教博士を授け、詔あるにあらざれば畫くことを得ざらしむ。乃ち其諱を賜ひ、名を道玄と改めしむ。因りて舊名、道子、を以て字となす、世稱して張僧繇の後身といふ。曾て將軍、裴旻の爲に天宮寺の壁に畫く、時に裴旻の壯觀なる舞劍を視、爾來筆力激昂頓挫、風行電激の情勢を増せりといふ。而して其縱橫壯拔の格法、

地獄變相圖

永く中絶し、宋朝以來、李龍眠等の名手によりて祖述せらるゝに至れり。曾て張孝師の地獄の圖により、改めて地獄變相圖を作る。時に京師の屠酷魚罟の輩、之を觀て皆罪を懼れ、業を改めたりといふ。北宋の黃伯思曰く、吳道玄の地獄變相圖は、今日諸方の寺院等に於て見るが如きものとは、大いに其趣を異にせり。此の畫中には謂ゆる劍の林、地獄の釜、牛頭馬頭の鬼又は赤鬼青鬼なるものもなし、而も尙、一種言ふべからざる陰氣襲ひ來りて觀るものをして覺えず膚に粟を生ぜしむ。以て惡業を捨て、善道に就かしむ、誰れかまた繪事を以て小技と言はんやと。其着想の非凡なるを想見するに足らむ。

其畫風

蓋し、前人の長技を集大成し、其潑々たる天才は、往く所として可ならざるはなく、其人物、鬼神、鳥獸、臺閣、山水、皆世に冠絶せり。即ち蜀道の山水は自ら一家を成して風塵の表に傑出すと謂はれ、其人物、鬼神は、面目の新意を得、手足の變態を窮め、方圓、平生、高下、曲直、折算法ありて八面生動の概ありと稱さる。其線に一種の技巧を加へ、始めて古法を變じて壯

印度美術の影響

重の趣を發揮し、其の焦墨痕中に略々微染を施せる淡彩の手法は、謂ゆる吳裝の新格として、永く後世の格法となれり。宜なる哉、其縦横壯拔の妙技、當時の藝苑を風靡し、支那繪畫史上に一新紀元を開き、古今に互りて藝苑の大立物となりたることや。(其歴史上の位置並に其傳説は恰)而して其人物畫の特に新意を出し、手足の變態を窮めて、古今に冠絶すと稱せらるゝもの固より其靈腕に因ると雖も、抑も亦當時印度より、新たに眞言秘密の宗旨を傳ふると同時に、印度婆羅門の圖式を輸入し、或はまた健駄羅式(歴山王の東征の結果、頭即ち健駄羅地方に希臘パクトリア王國を建設し、後印度ヌキユマイ人即ち大月氏の爲に亡されたりと雖も、歴山東征以後次第に波及せる希臘文化と、月氏王朝中の迦膩色迦王前後の交通より來れる羅馬の文物とは、從來此地方に行はれたる佛教美術と融合して、遂に健駄羅式の美術なるものを生じ、又此地方は無着、世親、那羅延天寺諸大論師の出産地にして、北方大乘佛敎が東方亞細亞地方に傳播せる根據地なりしを以て、佛敎が支那大陸に輸入せらるゝと共に、亦其美術の傳へらるゝ機會も多かりしならむ。殊に唐及我天年代に成れる佛像の衣褶の形法は多く此式に依りたるが如し。而して其特相は印度婆羅門式に於ては印度固有の佛像の儀軌に準じて三十二相の標範を具へ其面相等全く形式的なるも、健駄羅式に至りては、總てが自然的にして顔面は表情に富み、衣褶の如きも西歐の彫塑に類し、頭髮の如きも兩肩を覆へり。)の美術をも傳へて、像容、圖法の豊富なりしが爲に、彼亦其影響を受けたるに由るなら

道玄の遺蹟と稱するもの、本邦間々之あり。京都東福寺の釋迦三尊像、紫野大徳寺の中尊の觀音像及び左右の山水畫は、最も道玄の畫風に近きものと謂はる。

其弟子、盧稜伽、揚庭光、李生、翟琰、張藏、王耐兒等、並に吳裝の新格を傳へ、盧稜伽、揚庭光の如きは、往々別ち難きものありしといふ。後、五代の朱繇亦此法を傳ふといふ。中に就き盧稜伽最も顯はれ、其筆蹟、風骨師に及ばざるも、物像精備にして經變、佛事に長じ、其作、十六羅漢及び佛陀の像は、最も有名なりしものといふ。

同天清錄に曰く、唐の盧稜伽の筆、世人見ること罕なり、余、道州に於て畫く所の十六羅漢圖を見る。其衣紋鐵線の如し。惟、崔白北宋の名手、墨線を作り、頗る緒餘を得たり。李公麟の如きに至つては、遂に及ばず。蜀地に入るに及んで名聲益々高く、乾元の初、大聖慈寺に行道僧の圖を畫き書道の名家顔真卿之に題す、時に號して二絶と稱さる。其他當時佛事、人物畫に於て著名なるは、僧法明の詔を奉じて、合象亭に

於て麗正殿の諸學士の像を畫き、又車道政の旨を承けて、于闐國のコーナー王家に到り、毘沙門天王の圖を寫貌して歸り、又談皎の態度、衣裳、潤媚にして、其大髻、寬衣の大に當時の風尙に投合したるが如き、並びに一時の撰たり。

山水樹石の科は、魏、晉以來、屢々名手の筆に上り、宋炳、王微の山水畫論、並に梁の玄帝の山水松石格の如き論畫ありと雖も、唐代に入りて始めて其大成を見るに至れり。蓋し、世界何れの國と雖も、山水畫は人物畫に後れて發展せり。必竟、山水畫は人物畫の背景に過ぎざりしものが、漸次に獨立して山水畫の一體をなせるに由る。唐の張彥遠の歷代名畫記によれば、唐以前の山水畫は、大抵、群峰の勢、鉅飾犀櫛の如く、其水は容泛の妙を缺き、其人物の如きも往々山よりも大にして、其體法未だ古拙たるを免れずといへり。また以て山水畫なるもの、寧ろ人物畫の背景に過ぎずして、未だ其獨立をなさざりしを知るに足らむ。然るに初唐より中唐の初葉に亘りては、既に山水畫は人物畫より全く獨立し、殊に吳道玄の蜀道の山水畫は、此科の上

に一變調を與へたるが如く、更に李思訓父子の、細勁の皴法、青綠金碧の賦彩を見るに至りて、格調こいに成れるもの如く、樹石の如きも畢宏、張操、韋鷗等の出づるに及んで、始めて其妙趣を發揮せられたるが如し。而して李思訓等に次いで王維、盧鴻、鄭虔の輩出で、淡彩、水墨の別調を有する山水書を振興して、茲に山水畫の上に幾多の流派を生ずるに至れり。されば後世に至り、唐以降、歴代の山水畫を南北の二大系統に分ち、李思訓を以て北宗の祖となし、王維を以て南宗の開祖と仰ぐに至れり。思ふに斯の如き南北畫別の當否は暫く置き、後世に至りて山水畫の淵源を唐代に求むるが如きは、やがて唐代に至りて山水畫の格式を大成したるに由る南北兩宗の畫參照。斯の如く、山水畫は、唐代に至りて全く其格法を大成し、大いに發展の氣運に向ひたるは、晉時漢族の南方に移動せしより、益々山水に對する風尚を煥發し、其後、漸く人物畫の背景より獨立して、開元、天寶の文運興隆に伴ひ、頗る發展の氣運に向ひたるものならむ。而して唐人の最も山水を好み、又其技に長じたることは、當時の諸工藝品若くは詩文等に徴して明かなりと

南北畫の二大系統

山水畫勃興の原因

支那には血族傳承より成立せる大流派の樹立を見ず

李思訓

金碧青綠の山水當時用絹の法

抑も支那の藝苑に於ては、古來より本邦の畫家の如く、累代相續して其家名を揚げ、以て血族傳承より成立せる大流派の樹立なるものを見ず。只、僅に父子兄弟にして美を濟したるものに、閻氏父子兄弟、黃氏父子兄弟、徐熙、高文進の一門、馬氏一家、趙孟頫父子等の如きものにして、李氏一家の如きは、其尤もなるものとす。

李思訓一家

李思訓字は建見、唐の宗室孝斌の子なり、戦功を以て當世に顯はれ、官、武衛大將軍に到る、故に時人稱して大李將軍といふ。弟思誨、子の昭道、思誨の子林甫、林甫の姪、湊、一家五人並に丹青を善し、細勁の皴法、青綠金碧の賦彩、世、威な之を重んず。思訓、富貴に生長し、日夕觀覽する所自然に精麗なる畫風を興し、遂に金碧青綠の山水を以て一家の門庭を樹て、其子昭道に至りて、更に工緻細目を加へ、筆法細勁にして、石に小劈斧を用ひ、樹葉に夾筆を用ひたりといふ。其用絹の法は皆熱湯を以て半ば熱さしめ、粉

蜀道の山水

を入れて之を髓ち、銀版の如くす。後、青緑を質となし、金碧を文と爲したりといふ。蓋し當時の畫家は、概ねこの法によりたるが如く、吳道玄の如きも亦此法を用ひたりと傳へらる。

玄宗曾て吳道玄に命じて、蜀道の風景を大同殿に寫さしむ、道玄半日にして畫を成す。後、復、李思訓をして同じく大同殿に蜀道の山水を寫さしむ、思訓、數月を費して畫漸く成る。時に玄宗歎じて曰く、李は數月を費して成し、吳は半日を經ずして畫く、而も俱に合作たるを失はずと。また以て兩者の畫風の如何に相違せしかを知るると共に、思訓の畫法の如何に細緻なるものなりしかを想見するにたらむ。

思訓の子昭道、此家の白眉たり、世稱して小なりしかを想見するにたらむ。昭道の子昭道、此家の白眉たり、世稱して小なりしかを想見するにたらむ。

李將軍といふ、蓋し官、將軍に至らざりしも父子各々美を濟したるが爲めか、山水、鳥獸、樓臺皆善く、巧緻細目の點に於て父に過ぎ、寸馬、豆人、鬚眉畢く具はるといふ、畫鑿に曰く、昭道の海岸圖は絹素百碎せるも、粗其神采を存せり、其筆墨の源、皆展子虔の輩より出づと、蓋し父子共に展子虔、立本の畫風より出で、別に一家を樹つるに至りたるものか。

李昭道

王維の畫風の傳流

斯の如く山水畫なるものは、盛唐の李思訓父子によりて大成せらるゝに至りしが、安史の亂後、中唐の世に入るに及んで、更らに王維鄭虔の輩によりて、一種別格の水墨、淡彩の山水畫を開かれ、其畫風、章偃、王洽、王宰、項容の徒相傳へて、五代の荆浩、關同に至れり。而して中唐以後、北宋の後末に至れる山水畫家は、大抵、此の派に屬したるもの多く、李思訓一派の畫風は、漸く南宋の畫院に至りて、再興せられたるが如し。是れ一は王維等の天稟の資質の偉大なるが爲めに由ると雖も、抑も亦中唐以降、社會の風尚漸く移りて高雅冲澹に傾きたるに由るか。蓋し前述の如く、開元、天寶の際、昌平日久しく、六朝艶冶の風尚を繼紹せる初唐の文運は、いつしか其高潮を呈し、更に新たなる思潮を迎へんとしたる時代にして、李、杜の輩先づ雄渾蒼勁の格調を出して、唐詩の精華を啓發し、更に中唐以後に於て、韓、柳の高雅冲澹となれるに徴しても明かなりとす。更に當代に於ける宗教思想の變遷に見るも、時代思潮の推移を徴するに足らん。

六朝の思想界を一貫する時代思潮の脈世的なりしこと前に述べたるが如く

文運の推移

宗教思想の變遷

南北の禪宗
禪宗興隆の
原因

随つて道、佛の教へ隆盛となり、佛敎の如きは、其宗派を分つこと實に九宗の多きに及べり。而して大仙密附の禪宗は、梁の武帝普通元年(西紀五二〇)、達磨大師によりて輸入せられたるも、未だ其興隆の運に向はざりしが、少林山に引き籠りてより、凡二百年の星霜を経て、六祖慧能の晩年に至り、禪宗の一門漸く隆盛となり、支那の宗敎界に一、新面を開かんとするに至れり。而して六祖の世を去りたるは、玄宗の開元元年(西紀七一三)にして、李思訓、吳道玄の名聲既に高く、王維、盧鴻、鄭虔等の漸く頭角を顯さんとする時代なりとす。爾來、六祖の法兄、神秀の禪風は、湖北に於て盛大となり、禪の禪と稱され、六祖の祖風は、多く江南に榮えて、南嶺の禪と呼ばれ、頼みに興りて其門葉漸く繁く、偶々會昌の厄難に遇ひ、他宗等しく衰へたるにも拘らず、獨り禪家ののみは、其影響を受くること少なく、特に六祖の南禪は、五代の末に至るまで、凡二百五十年間に於て、謂ゆる五家各其門戸を張り、其宗風天下を風靡するに至れり。斯の如く中唐以後に於て、獨り禪家の隆盛を來したるは、重に當時社會人

王維

王維

心の風尙既に移りて、又六朝、初唐の好尙する所と同じからざるが故に、他の宗派の理論の花、濃艶にして、其宗旨の煩瑣迂遠なる、亦適合すべくもあらず。之に反して禪の宗旨は、高遠にして直截簡明なる、自ら洒落風韻の餘情を有し、其直截輕妙なる一種別調なる語録は、士夫、文人の文雅思想に投合して、當時の社會風尙に適合したるが爲めなりとす。而して畫道に於ても、此文運轉機の間に處して、時代の新思潮に乗じたるものを、王維、盧鴻、鄭虔の輩となす。彼等は皆是れ當代の高士、思想相通する所ありて、自然に寄興寫情の畫風を興し、裁構淳秀、出韻幽澹の水墨、淡彩の法門を開くに至れり。

●王維字は摩詰、太原、祁の人なり。玄宗の開元中進士に擧げられ、官尙書右丞に至る、故に世人王右丞と稱す、弟縉と名を齊うす。妻を失ふて娶らず、西紀七百五十五年安祿山反し、玄宗蜀に出奔するに及んで、彼れ賊の爲めに獲らる。祿山、固より王維の才を知る、迎へて洛中に置き、追つて給事

中と爲す。既にして賊平ぎ、彼れ亦獄に下さる、時に弟縉既に高官たりしかば、彼の爲に罪を贖はんことを請ふ。肅宗亦憐んで之を許す。後亦授くるに右丞を以てす、時に王維、上表して曰く、己れ五短あり、縉に五長あり、願くは其官を還して田舎に放たれんことを請ふと、遂に縉川の別業に隠居し、水木琴書を友とす。其襟懐の高曠、魄力の宏大なる、從來の鈎研の法を變じて、渲淡の墨法を創め、其餘流綿々として後世に波及せり。又詩を善くし、當時詩壇の四傑のひとり、其調、神韻の源頭に立て李、杜以外の別趣を發揮す。畫は尤も山水に長じ、當時の畫家者流、彼を以て天機の到る處、學んで及ぶべからずと謂へり。東坡曰く、摩詰の詩を味へば、詩中に畫あり、其畫を觀れば、畫中に詩あり、藍谿白石出、玉川紅葉稀、山路元無雨、空翠濕人衣。此れ摩詰の詩、或曰く非なり、好事者以て摩詰の遺を補ふと。文を好める支那國民の、後來、其畫風を掬めるもの多き、又所以ありといふべし。我京都智積院所藏の瀑布圖、千福寺の瀟瀟の如きは、其所傳なりといふが先輩諸氏の説に依れば、果して王維の作なるや否やは明かならざるも、南宋

渲淡の墨法を創む

王維の畫は無聲の詩なり

盧鴻一

水墨の法を創む

鄭虔、淡彩の妙を發揮す

張璪 畢宏

諸家の作に比すれば、較々古調なりといふ。

當時、盧鴻一、宛陽の高士、鄭虔、榮陽の人、の輩亦水墨、淡彩の畫風を興す。盧鴻一は開元年間王維と同じく諫議大夫を以て召さる、固く辭して就かず。因りて隱居草堂を賜はりて嵩山に歸らしむ。最も山水樹色に長じ、瀑布を以て名あり。墨法融液にして水墨の法を創む。鄭虔亦王維等と共に安祿山の事に坐して貶さる。詩は王維に及ばざりしも、書に至つては當代の逸品なりといふ。李伯、杜甫と詩酒の友たり。畫は最も山水を善し、頗る淡彩の妙を得、饒墨にして樹枝老硬の形ありしと。嘗て詩篇及書畫を明皇に獻す、時に明皇親ら三絶と題せりといふ。

張璪及畢宏

張璪字は文通、吳郡の人なり。官、檢校祠部員外郎に至る。最も樹石山水に工にして、繪境一篇を撰し、畫の要訣を述ぶ。當時、畢宏なるもの西紀七六七年、官給事中に至る、從來の松石の畫風を一變して前法に拘滯せず、落筆縱橫、意、筆先に在りて生意多く、山水松石に於て名を擅まゝにせり。而

も尙ほ一度、環の書を見て驚歎措く能はず、環に其受くる所を問ふ。環曰く外、造化を師とし、内、心源を得たるのみと。畢宏此より遂に筆を手をせざりしといふ。大抵、秃筆を用ひて書をなし、或は手を以て絹素に模することあり。曾て手に雙管を握り、一時に齊下す、一は生枝となり、一は枯朽と爲る、氣傲烟霞、風雨を凌ぎ、槎枒の形、鱗皴の狀、意に随つて縦横に描出せりと。されば當時韋偃、畢宏の如き、既に松石に於て、名を得たる名手ありと雖も、張璪の古今に特出するに及ばざりしが如し。而して其山水の狀は、高低秀麗にして、咫尺深重の趣を有し、石尖りて落んとし、泉噴いて吼るが如しといふ。後世松石を云ふもの、皆張璪をいはざるはなし。

更に鞍馬等の動物畫に就て見るも、又後世の宗となれるもの多し。即ち曹霸、韓幹、孔策、陳閔、韋偃等の鞍馬に於ける、又韋瓘、孟詵の獅子圖に於ける、其最も著しきものなり。蓋し開元、天寶之際は、唐室の威望西域に震ひ、諸國より名馬、奇獸を獻納するもの多かりしかば、當時の畫家は、自然に好個の模範を得たるに由るか、古來韓幹の馬は、肉を畫きて骨を畫かすといふは、

松石の妙趣を發揮す

動物畫

韓幹

畫馬の變遷

彼の畫馬の從來のものと大に其撰を異にし、自ら一家の妙を成したるに由る。唐人の畫馬を善くするもの多しと雖も、韓幹を以て第一とすべきが如し。彼れ長安の附近に生れ、少して酒店に雇はる。偶々、王維の爲めに其畫才を知られ、毎歳二百錢を惠まれて、専心繪事に従事することを得たりといふ。天寶の初、召されて供奉官太府寺丞となる。善く人物を寫し、最も鞍馬に巧みなり、山水は王維の畫法を傳へたりといふ。初め曹霸を師とし、後、獨り其能を擅にす、時に陳閔畫馬を善くす、玄宗、韓幹に命じて陳閔に師事せしめんとす。幹曰く臣自ら師あり、陛下内廄の馬皆臣が師なりと、其寫生に重きを置きたるを知るべし。古來、八駿圖なるものあり、史道碩の跡なり、或は云ふ史乘の筆と、其何れなるにしても、皆螭頸龍體、矢激電馳の類にして、馬の狀貌を具ふるもの稀なりといふ。蓋し晉、宋の間、既に顧、陸によりて其風一變し、周、隋の時代に至りて、董、展の輩更に其態を變ずるに至りしも、屈産、蜀駒、尙、翹舉の姿を存し、安徐の體を缺きたりしが、韓幹の時に至りては、玄宗、大馬を好み、御厩四十萬の多きに達し、中には沛、艾、大馬の

如き名種あるに至り、加ふるに當時大宛國より毎歲名馬を獻納し、北地に命じて群牧を置かしめ、韓幹に命じて其駿なるものを寫さしめ、玉花、驄、照夜、白等の名畫あるに至れりといへば、其狀貌大に古馬と異なり、毛彩奕々として地を照すが如きものありしならん。

斯の如く、彼は好個の模範を得、其の畫風の寫生的なりし結果、形似の完きを得て、遂に畫馬に於て古今の宗となりしものか。其寫生に重きを置きたることは、彼が春夏秋冬の季節、骨相の解剖、色彩の調合、及び其動勢と位置とに注意したりといふを見て知らる。其門弟多かりしが孔榮を以て其上足となすが如し。後、宋の李公麟、元の趙孟頫など、皆幹を師法として其妙域に達したるもの、如し。

陳閔

其の傳統

陳閔は開元の中頃、朝廷に召され、明皇の肖像、及び唐室諸帝王の像を畫き、人物、鞍馬に巧なり。曾て玄宗の泰山に出獵せらる、時、吳道玄、韋无忝と共に供奉し、金橋の圖あり、此圖は右三名手の合作にして、有名のものなりしといふ。御容及帝所乗の照夜白馬は陳閔之を畫き、橋梁、山水、車輿

韋无忝

人物、草木、鷓鴣、器仗、帷幕は吳道玄之を主り、狗馬、驢騾、牛羊、麋鹿、猴兔、猪狍の屬は、韋无忝之を主る、圖成りて時に三絶と稱せり。

章偃

章偃家

當時、韓幹と共に畫馬に於て雙壁と稱せられたるを章偃となす。黃伯思曰く、曹霸の馬は其形似より精神の優れたるを見、韓幹に於ては、精神よりも形似に於て勝ちたるを見、章偃に於ては其二つの調和せられたるを見る。而も三者の行筆の跡、相類似せるものありと。彼又山水、松石を善くし、筆力勁健にして風格高舉なりといふ。其山水は王維の一派に屬したるが如く、其父章鑾亦山水、松石を善くし、鑾の兄鑾亦龍馬を善くしたりと云へば、其來る處深しといふべし。

德宗以後の藝苑

前述の如く唐朝三百年間の藝苑は、玄宗の開元、天寶の際に一時に煥發し、名匠巨擘彬々として踵を接し、支那繪畫史上に新紀元を開き、多く後世の宗となりしが、德宗艱難の後、以來、間々唐代掉尾の藝風を舉揚したるものあれども、大抵、其餘勢を持続し來りたるに過ぎず。殊に德宗の朝に至るまで

は官榻の設けありて盛んに朝廷に於て、古畫名蹟の摹倣をなし來りたるも、其國事多端となるに及んで、漸く廢絶せられたるが如く、其後、武帝の神仙を好んで、佛寺伽藍を毀つこと四萬餘に及びしかば、佛畫の發展に一大打擊を與へたるべく、宣宗位に即き銳意廢寺を修復したりと雖も、當時、憲宗の時以來、黨與を結びて相争ひし宦官朋黨の軋轢甚しく、加ふるに藩鎮の禍を以てし、懿宗の朝には更に邊境の入寇を見、僖宗の世に至りては、國用不足賦斂愈々急にして、百姓流離し、盜賊蜂起し、遂に王仙芝黃巢の亂を生じて、唐室の末路目睫の間に迫りしかば、中唐の末葉より晚唐に及んで、藝術の發展に不便なりしものあらむ。然れども祿山の亂に唐室所藏の名蹟散失するもの多く、肅宗の往々貴戚に頒ち、轉じて好事者の有に歸し、徳宗、難の後、更に散逸を経たるもの、偶々人間に秘藏の行はるゝ導機となり、張、遠の時代には、董伯仁、展子虔、鄭法士、揚子華、孫尚子、閻立本、吳道玄等の屏風、一扇の値、二萬金より一萬五千金に達し、孫尚子、閻立本、吳道玄、輪、尉遲乙僧、閻立本等の畫、一萬金に値せりといふ。又、以て當時名畫の寶

鑿藏漸く人間に行はる

卷軸を葉子となす
唐末の争亂は偶々蜀地の藝苑を啓發したる導火線となる

項容
王宰

王洽の潑墨

雲山の祖

重されたるを想見するに足らん。且つ古製の卷軸の不便なるより綴つて葉子となしたるも、當時よりのことなりといふ。而して唐末の争亂は、孫遇、張詢、刀光胤等の名手をして、蜀地に難を避けしめ、偶々五代争亂の世に於て、蜀地の藝苑をして益々隆盛の運に向はしめたる導火線となれり。玆に中唐の中頃より晚唐の間に於ける重なる畫家を見るに、山水畫には、王洽、顧生、王子洽の潑墨、天台の項容處士の墨あつて筆無き、王宰の巉巖峭なる、並に王維の一派に屬して、其畫風の顯著なるものとす。其他、沈寧、劉商の張環の松石を繼げる、高陽の齊皎兄弟、會稽の僧道芬、河東の裴誦、吳興の朱審等亦一時の撰たり。其中最も顯はれたるを王洽となす。王洽、或は云ふ名、初め筆法を鄭虔に受け、後自ら潑墨の法を開き、善く墨を潑して山水を畫く、故に時人之を王墨といふ。性、奇僻にして酒を好み、醉後、頭髻を墨汁に濡して畫を成す。徳宗の貞元中、朝海中都巡となる。人其意を問へば、要は海中の山水を見るにありのみと。半歳にして職を辭し、爾來、落筆奇趣を得たりといふ。古來王洽を以て雲山の祖となす、宋朝の米芾

父子の如き、王治の潑墨の手法を傳へて別に一家を成したるものといふ、蓋し彼れ屢々海中を往來して、時に雲烟漂渺たる海山を見、時に又雲霞卷舒し、煙雨慘澹たる景象を目撃して、益々潑墨の妙趣を發揮するに至りたるものか。其畫くに當り、必らず沈酣の後を待つて、衣を解きて礎礪し、吟嘯鼓躍して先づ墨を障上に潑し、其形像に因りて、或は山となし、或は石となし、林となし、泉となす。而かも墨汚の迹なく、天成自然にして、宛然太古渾沌の景象の如かりしといふ。

佛道、人物

佛、道、人物畫には、周肪の水月の體に於ける、范瓊、陳皓、彭堅の、宣宗の佛宇を復興するに當り、成都の大慈、聖壽、聖興、淨衆、中興の五寺に畫き、牆壁二百餘間各々其妙を盡したるが如き、又常榮の上古の衣冠を善くしたるが如き、孫遇、張南本の兼て水火に長じたるが如き、其餘成都の趙公祐一家、蜀の左全、及び常榮の子重胤の信宗の朝に翰林供奉となり、呂岩、竹虔の同じく翰林侍詔となりたるが如き、共に著名なるものとす。

周肪

水月の體を創む

其の傳流

趙公祐 趙德齊

周肪字は景元、長安の貴族なり、官、宣州長史に至る。初め張萱の畫を學び、後、自ら一家を成す。頗る精神姿致に富み、其衣冠、閭里のものと同じからず、衣裳勁簡にして彩色柔麗なり。其菩薩の圖は端嚴微妙にして、水月の體を創むといふ。曾て德宗、肪の畫を善するを聞き、屢々召して畫かしむ。落墨の時、幄帟を撤去して往來するものをして之を縱覽せしめ、其衆評を聞きて改定するを常とせり。其子女、大抵、穠麗豐肥の態を作り、晩年に至りて深簡を旨となしたるが如し、當時其畫風を傳へたるものに、王拙、趙博文、鄭寓等あり、後、五代の周文矩亦其法を傳へたりといふ。

趙公祐一家

趙公祐は成都の人、佛道、鬼神を善くし、時に高絶と稱す、文宗の大和中已に畫名を顯はす。其の子趙溫其綽として父風あり。其の子德齊又畫を善くし、二世の精藝を襲ふて奇縱逸筆の妙を得、時輩皆之に推伏せりといふ。昭宗の光化中、詔して成都の祠に西平王の儀仗、車輅、旌纛、禮物を畫かしめ、又朝眞殿に后妃嬪御の圖を畫かしむ、遂に翰林侍詔となる。

其餘花鳥には邊鸞、陳庶邊鸞の刀光胤、陳格、白晏、等あり、牛羊には韓
 湜、太冲、戴嵩、韓湜あり、並に士夫にして書を善くし。嵩の弟暉亦水牛を善く
 す。虎に李漸あり。梅、竹に李約、蕭悦等あり、共に最も其顯著なるものと
 す。

抑も花鳥畫なるものは五代の末葉より發展して、宋代に至りて大成せられ
 たるものにして、唐代に於ては花鳥畫に於て特に名を顯はしたるもの甚だ稀
 なりとす。是れ一は唐代に於ては未だ玩賞繪畫なるもの、發展を見ざりしが
 爲なり。邊鸞は實に唐朝三百年間に於ける花鳥畫の名手とす。曾て徳宗の朝、
 新羅國より孔雀の善く舞ふものを進む。徳宗鸞をして之を寫貌せしむ。貴飾
 彩翠の美を盡し、加ふるに娑婆たる態度自から節奏に應ずるが如き狀ありと
 いふ。又折枝、蜂蝶共に生意を具へ、設色に精しかりき、當時其傳を得たる
 ものに陳庶等あり。

第四節

唐朝の論畫

此に唐朝の繪畫を終るに臨み、唐代の論畫を紹介し置かんと欲す。是れ唐

代の藝苑は、文運の興隆につれて、百花爛熳の光景を呈し、支那繪畫史上に
 陸離たる光彩を添へて、後世の模範となりしのみならず。又其論畫に於ても
 大に發達し、後の批評家をして範を此に取らしめたるが故なり。即ち王維の
 山水訣、山水訓、李嗣眞の畫後品、僧彦棕の後畫錄、張彦遠の歷代名畫記、
 朱景玄の名畫錄等は、其最も著名なるものとす。こゝに王維の山水論と彦遠
 の畫論とを拔萃して、其所論の一斑を窺ふの便とせん。

王維の山水賦

凡畫山水意在筆先、丈山尺樹、寸馬豆人、此形法也。遠人無目、遠樹無枝、遠山無皴、隱
 隱如眉、遠水無波、高與雲齊、是形訣也。山腰雲塞、石壁泉塞、樓閣樹塞、道路人塞、石看
 三面、路看兩岐、樹看頂頸、此形訣也。
 凡畫山水、尖峭者峰、平夷者嶺、峭壁者崖、有穴者岫、懸石者岩、形圓者巒、兩山夾路者
 壑、兩山夾水者澗、水注川者溪、泉通川者谷、路下小土者坡、極目平夷者坂、若能辨別
 知山水彷彿也。觀其體用、看氣象、後辨清濁、分賓主、之朝揖、列群峯、之威儀、多則亂、少
 則漫、不少不多、要知遠近、遠山不得連近山、遠水不得連近水、山腰廻抱、寺觀可安、斷

岸亂堤，小橋可置。有路處人行，無路處林稠。岸崖枯木露根而藤纏，臨流石嵌空而水痕。

凡作林木，遠則疎平，近則高密，有葉者枝柔，無葉者枝硬。松皮作鱗，柏皮纏身，生土者修長正直，長石者拳曲冷汀。古木節多而半死，寒林扶疎而蕭森。

凡畫山水，須按四時。春景則霞鎖煙籠，林下陰陰，遠水揉藍，山色堆青。夏景林木蔽天，綠蕪平坡，穿雲瀑布，近水幽亭。秋景則水天一色，簇々疎林，雁橫煙塞，蘆島沙汀。冬景則天地爲雪，老樵負薪，漁舟傍岸，水淺沙平，凍雲黯淡，酒旗孤村。風雨則不分天地，難辨東西。行人傘蓋，漁夫蓑笠，有風無雨，但看樹枝；有雨無風，枝葉下垂。雨霽則雲收，天碧，薄霞霏凝，山光添翠，網晒斜暉。早景則千山欲曉，靄霧微微，朦朧殘月，色色昏迷。晚景則山岫落日，帆卸江濱，路行人急，半掩紫扉。若留意於此者，須念玄微矣。

論顧陸張吳用筆

或問余以顧陸張吳用筆如何。對曰：顧愷之之迹，緊勁聯綿，循環超忽，調格逸易，風趨電疾，意存筆先，畫盡意在，所以全神氣也。昔張芝學崔瑗杜度草書之法，因而變之，以成今草書之體，一筆而成，氣脈通運，隔行不斷。唯王子敬明其深旨，故行首之字往往

顧、陸、張、吳
之用筆
論之

繼其前行，世上謂之一筆書。其後陸探微亦作一筆書，連綿不斷，故知書畫用筆同法。陸探微精利潤媚，新奇妙絕，名高宋代，時無等倫。張僧繇點曳斫拂，依衛夫人筆陳圖，一點一畫，別是一巧，鈎戟利劍，森森然。又知書畫用筆同矣。國朝吳道玄古今獨步，前不見顧陸，後無來者。授筆法於張旭，此又知書畫用筆同矣。張旣號書顛，吳宜爲畫聖。神假天造，英靈不窮，衆皆密於兩際，我則離披其點畫，衆皆謹於象似，我則脫落其凡俗。彎弧挺及，植柱構梁，不假界筆直尺。虬鬚雲鬢數尺，飛動毛根，出肉力健，有餘當有口訣，人莫得知。數仞之畫，或自臂起，或從足先，巨壯詭怪，膚脈連結，過於僧繇矣。

或問余曰：吳生何以不用界筆直尺，而能彎弧挺及，植柱構梁？對曰：守其神專其一，合造作之功，假吳生之筆，向所謂意存筆先，畫盡意在也。凡事之臻妙者，皆如是乎。豈止畫也。與乎庖丁發矟，郢匠運斤，効鑿者勞，捧心代斲者必傷其手，意旨亂矣。外物役焉，豈能左手割圓，右手割方乎？夫用界筆直尺，界筆是死畫也，守其神專其一，是真畫也。死畫滿壁，易如污墁，真畫一劃，見其生氣。夫運思揮毫，自以爲畫則愈失於畫矣。運思揮毫，意不在於畫，故得於畫矣。不滯於手，不凝於心，不知然而然，雖彎弧挺及，植柱構梁，則界筆直尺，豈得入於其間矣。

死畫
與真畫

畫に疎密の二體あり

畫の體法

又問余曰、夫運思精深者、筆迹周密、其用筆不周者、謂之如何、余對曰、顧陸之神、不可見其盼際、所謂筆跡周密也、張吳之妙、筆纒一二、像已應焉、雖披點畫、時見缺落、此雖筆不周意周也、若知畫有疎密二體、方可議乎畫、或者領之而去、張彥遠歷代名畫記、又畫の體を論じて曰く、古人畫雲、未爲臻妙、若能沾濕絹素、點綴輕粉、縱口吹之、謂之吹雲、此得天理、雖曰妙解、不見筆蹤、故不謂之畫、如山水家有潑墨、亦不謂之畫、不堪倣効、(同)又六法を論ずる中に曰く、

夫象物必在於形似、形似須全其骨氣、骨氣形似、皆本於立意、而歸乎用筆、故工畫者多善書。

又曰、今之畫人、粗善寫貌、得其形似、則無其氣韻、具其彩色、則失其筆法、豈曰畫也、(同)

第二章 五代の繪畫

五代の戰亂

唐の鴻業跡を絶ちて、支那大陸は此にまた戰亂の衝と化し、五代の諸國、後梁、後唐、後晉、後漢、後周、各々競ひ興りて、中原を定むること前後、五十

藝術の餘命を維持す

當時文藝の兩中心地

餘年に至れり。然れども五代の君主は、僅かに中原の地を領したるに止まりしかば、其間、唐末より群雄の邊地に割據して、國を建て、王と稱し、之を子孫に傳へて、依然として其地に據れるもの十個國の多きに及べり。故に史家此時代を稱して、五代十國の世ともいふ。後、西紀九百六十年に至り、趙宋の興るに及んで、皆其版圖に入れり。

斯の如く五代の世は、兵馬倥傯の時代なりしを以て、唐時、その昭代の熙熙たる春光に誘れて、爛熳と咲き亂れたる文藝の華も、五代兵亂の朔風に遇ふて、忽ち落葉たる觀を呈するに至れりと雖も、尙、西方には蜀主孟昶等ありて、畫道を奨勵し、江南には南唐の李諸王ありて、畫家を眷遇し、殊に蜀と江南との兩地は、古來名手の出產地なりしかば、文藝の餘命は漸く此等の地に保存し、涵養されて、遂に大宋の昭代に入り、潑々たる生氣を煥發して、再び百花爛熳たる藝苑を見るに至れり。されば五代及び宋初に於ける名家は大抵、蜀地の成都、江南の鄴都附近より輩出せり。蓋し當時此等の地は自然に支那大陸に於ける文藝の中心地となりたるが如し。これ江南の地には、到る處勝

景に富みて瀟灑たる自然美を擅まゝにし、人々藝に精しく、加ふるに李中主、李後主並に書道を奨励し、後主李煜の如きは、書院を設けて當代の名手を優遇し。蜀の地は當時戰亂の渦中を遠ざかりしと見え、孫位、刀光胤、滕昌祐の輩、何れも戰亂の地を避けて蜀に入り、其主、王衍、孟昶の諸王、大いに書を好み、南唐の制に倣ふて翰林院を置き、位を設けて書家を待遇したるに由る。

江南の藝苑

今此等兩地の藝苑を見るに、李中主の時、保大五年元日、天大いに雪る。因りて中主、太弟以下に命じ、樓に上りて宴を張り、各々詩賦を詠せしむ。時に建勳、徐鉉、張義方等、溪亭に於て即時に和詠して進む、侍臣皆興詠あり、時に徐鉉前後の序を爲り、又名手の圖書を集め、一時の妙を曲盡す。眞容は高冲古之を主り、樓閣宮殿は朱澄之を主り、侍臣、饜部、絲竹は、周文矩之を主り、雪竹寒林は董源、之を主り、池沼禽魚は徐崇嗣之を主れりといふ。更に後主、李煜に至りては、政治の暇、意を丹青に寓し、書は顔筆、樓曲の状を作り、遒勁にして寒松霜竹の如く、其小字は鍼鐵を聚めたるが如く、

金錯書の一筆三過の法

南唐の書院

曹仲元

十日一水、五日一石、五日一石

周文矩

徐熙の一家

之を金錯書といひ、一筆三過の法ありといはる。當時周文矩、唐希雅の輩、其書法によりて書を成し、瘦硬戰掣にして風神餘りありしといふ。其書院には周文矩、趙幹、曹仲元、高太仲、王齊翰、顧闳中、竹夢松等ありて、皆其待詔となれり。曾て曹仲元に命じて、建業の佛寺の座壁に畫かしむ、凡、八箇年を経て就らず。李煜其緩慢を責め、周文矩に命じて之を較せしむ。矩報じて曰く、仲元の繪、細密にして凡工の及ぶ所にあらず、故に遅々たること此の如しと。越えて明年乃ち成る、李主特に恩撫を加ふ。杜甫の詩に云ふ、十日一水、五日一石、能事は相促進を受けずと。蓋し、仲元の書を云ひしものか。仲元初め吳道玄を學びて成らず、遂に其法を棄て別に細密なるものを作り、最も傳彩に長じて一種の風格を具ふと。當時、江南に於て道釋をいふもの、皆仲元を推したるが如し、其他、周文矩は、道釋に兼ぬるに冕服車器人物子女を以てし、其畫風唐の周肪に類し、唯其衣紋顛筆多きを別となすとす。然れども當時江南の畫家にして、其畫風の後世に最も影響を及ぼしたるものは鐘陵の徐熙なりとす。世々南唐に仕へて江南の名族たり。蜀の黄筌

と名を齊うし、其孫、崇嗣、崇勳、崇矩あり、皆其家風を傳ふ。徐熙、志趣高尚にして花竹、草木、蟲魚の類を畫く、多く園圃に遊んで其情姿を求め、意を寫して古人の外に出づと謂はる。當時、花果を畫くもの、大抵、色彩を以て暈染して成す。黄筌一派の如き概ね然りとす。然るに熙、落墨を以て其枝葉藥萼を寫し、後、少しく色を傳ふ。故に骨氣人に過ぎ、生意勃然たりといふ。當時、江南の花鳥畫は、徐家一家を始めとし、其下に唐希雅、希雅の孫中祚及宿あり、大抵、徐氏の緒餘を得、以て蜀地の黄家一派の花鳥畫と相對峙したるが如し。

蜀の藝苑

更に蜀地の畫苑如何にと見るに、また南唐と競ふに堪へたり。其翰林院には、黄筌父子、趙元德父子、房從真、阮知晦、杜齡龜、高道興父子、蒲師訓、等皆待詔となり。張玟、徐徳の如きは、其祗候たり。而して黄筌父子其名最も著る。

黄筌の鐘馗

曾て蜀主王衍、筌を内殿に召し、吳道玄の鐘馗の圖(一目、一足にして髮蓬蓬、左手を以て鬼を捉へ、右手の第二指を以て其鬼の目を抉り、筆意遒勁なり)

りしものといふを觀せしむ。筌一見して其妙絶を稱す。蜀主因りて筌に謂ふて曰く、此鐘馗、若し拇指を以て其目を指らんには、愈々力あるを見ん、試に我爲に之を改めよと。筌請ふて私室に歸り、數日之を看れども足らず。乃ち別に絹素を張り、一鐘馗の拇指を以て目を指る狀を寫し、翌日、吳道玄の圖と共に一時に獻す。時に蜀主問ふて曰く、向きにたゞ卿をして改めしむ、胡ぞ別畫を爲るや。筌曰く、吳道玄の畫く所、鐘馗一身の力、氣色、顔貌、俱に第二指に在つて拇指に在らず、故を以て敢て改めざりき。臣今畫く所、古人に及ばずと雖も、然れども一身の力並に拇指に在り、是れ敢て別に畫きたる所以なりと、蓋し當時、鬼神を善せる翰林院の畫手、大抵、新年の作として鐘馗の圖を畫く習慣ありたるが如く、蒲師訓、趙忠義等の如きも、皆鐘馗の圖を畫けりといふ。

黄家

黄筌字は要叔、後蜀成都の人なり、初め刀光胤に事へて禽鳥を學び、花竹は滕昌祐を師とし、人物龍水は孫位を師とし、山水は鄭虔、李昇に、鶴は薛稷に學び、諸大家の善美を資りて、遂に一家を成す。其子、居實、居來亦畫

を善し、一家獨主に事へて待詔となる。後蜀主、孟昶の宋朝に歸順するに及んで、共に召されて宋の翰林圖畫院に隸屬し、名聲一時に擅まゝにせり。或はいふ筈、召されて未だ京師に入らずして死すと。筈尤も花竹翎毛等の寫生に長ず、其神を盡し其情を悉して、古今の規式となると謂はる。凡、花鳥を畫く、先づ勾勒して後に五彩を以て填彩す、其花の色初めて開けるが如く、極めて生意ありと。蓋し江南の徐熙と共に其畫風後世に影響を及ぼしたること大なり。

蜀の六鶴殿

西紀九百四十四年、淮南より蜀主に六鶴を獻す。蜀主筈に命じて便座の壁に寫貌せしむ。筈、啜天、驚露、啄苔、舞風、疎翎、顧歩の六鶴を畫く、其狀眞に迫る。因りて其殿を六鶴殿と名く。當時蜀人薛稷の鶴を以て第一とせしが、筈の鶴を畫くに至りて、稷の名驟に落ちたりといふ。

蜀地の花鳥には黄家の一派、李吉、夏侯延、李懷等の外、刀光胤、劉贊、滕昌祐の如き。又趙弘の邊鸞の古體を變じて新意を出したる。郭乾暉兄弟の亦自ら一派をなし、名聲藉甚なりしかば、鐘隱の變姓して郭乾暉に事へ、久

道釋畫
僧貫休

伏見佛國寺
の觀音圖

山水畫の變
遷及び點畫

うして其筆法を受け、遂に自ら別に墨色の淺深を以て其向背を分ち、自然に陰影法を利用したるが如き、竝に其畫風の最も顯著なるものとす。其他蜀地の道釋畫にして、本邦に其名最も高きを僧貫休となす。貫休亦蜀主王衍の爲に重んぜられ曾て紫衣を賜ひ、禪月大師の號を賜はる、最も羅漢の圖を善す。我國伏見佛國寺の三十二幅對の觀音圖は其遺跡なりといふ、普門品中の應身の所を描きたるものにして、其中の一幅の上邊には、大圓形を畫き、外邊を淺黄色にて塗抹し、中は頭青にて、胡粉を以て隈取れり。其他金澤の稱名寺京都高臺寺には十六羅漢の圖あり。(挿圖參照)

上述、諸家の外、五代の山水畫家には、荆浩、關同、李昇、趙幹等の名家あり。其畫風、荆浩、關同に至つて既に一變し、唐風より移りて宋格に入る。荆浩を成したるが如し。明の王肯堂は山水、六朝よりして後、王維、張璪、畢宏、鄭虔に至りて一變し、五代の荆關に至りて再變すと。王世貞も亦いふ、山水、二李一變、荆、關、董、巨再變と。殊に山水中の點畫の如きは、關同に至りて大いに啓發せられたるが如し。

荆浩、洪谷子と號す、河南の人なり。嘗て人に語つて曰く、吳道子の畫、筆あつて墨なし、項容、墨あつて筆なし、吾、二子の長を採り自ら一家の體を成さんと。されば其畫風皴鉤布置共に宜しく、筆意森然として凝滯の跡なく全く纖弱の弊を免がれたりといふ。好んで雪中の山頂を畫き、四面峻原にして、百丈の危峯青冥の間に屹立せるの觀ありと。其畫法、范寬等の祖となり、關同と共に宋、元以來、之を宗とするもの多きが如し。畫の外博く經史に通じ、善く詩文を屬す。五季の亂に遭ひ、太行の洪谷に避れて、山水訣一卷を著はし、畫法の大要を述ぶ。

關同、長安に於て荆浩を師とし、木石は畢宏より出で、枝ありて幹なしといふ。晩年に至り筆力大に進み、其技荆浩に過ぎたりと謂はる。多く秋山、寒林、村居等を作る、其畫風全く市氣を絶ち、塵俗の狀なく、深く古淡の趣を得たりといふ。其皴法設色の秀潤なると、其師荆浩と相上下したるが如し。徳隅齋畫品に、其仙游圖に就いて曰く、關同山水を畫きて妙に入る、人物は其長とする所にあらず。毎に得意なるものあれば、必ず胡翼をして、人物

を主らしむ。此圖、大石叢立、屹然として萬仞、色、精緻の如く、上に塵埃なく下に糞土なし。四面斬絶して人迹を通せず。深巖委澗の間、樓觀洞府、鸞鶴花竹の勝あり、枝履して遊するもの、羽毛の飄々たるを見る、石の並なるもの左右より之を見るに各々其圓鋭長短、遠近の勢を見、其座臥するものは上下より之を視るに、各々其方圓、廣狹、薄厚の形を見る。筆墨略到りて便ち人の心目を移し、人をして必ず其意趣を求めさしむと。蓋し、隋の時既に鄭法士等によりて山水中に樓閣、花草の點景を畫かれたりと雖も、唐以來人物、樹木、花卉、巖石の描法大に發展せしにより、山水の點景に於ても、關同に至りて一層の精巧を見るに至りしものならむ。

其餘山水、道釋、人物、花鳥畫の外に、畫龍に僧傳古あり、墨竹に李夫人等あり。傳古は四明の人、畫龍獨り妙に進む。建隆の際西紀九六〇頃名一時に重く、晩年に至り筆力愈々壯重を加へ、簡易高古の趣ありて、謂ゆる三停九似、蜿蜒の狀、湖海風濤の勢を具ふといはる。

之を要するに、五代五十年間の藝苑は、山水畫に於ては、王維等の流派を

掬むもの多く、道釋の如きは、大抵、吳道玄の書法を傳へたるが如く、是を史冊に徴するに、朱絲、左禮、王仁壽、李祝、韓虬の徒皆然り。又人物畫は、周文矩を始めとし、燕筠、杜霄、升夢松等の如き、概ね周防を師法となしたるが如く、李仲元の如き間々顧、陸に遡りたるものもありき。花鳥畫に至りては、徐、黃二家の畫風専ら行はれ、其技工、唐代に比して大に進歩したるを知るべく、更に宋代に入りて玩賞繪畫の興隆するに當りて一大進歩をなしたる素因をなせり。蓋し五代の技術は、種々なる點に於て、概して進歩發達の跡を觀取し得らるゝと同時に、其氣勢の雄大なる點は、唐代に比して數等讓歩せざるを得ず。之を當代の文學に徴するも亦然るもの、如し。

第三章 宋朝の繪畫

第一節 宋朝文化の總論

西紀九百六十年、宋の太祖、唐末、五代の擾亂を掃蕩し、節度使專横の宿弊を除去して、民治、財政、兵馬の大權を朝廷に收め、専ら文臣を重用して、

宋の治世

宋の滅亡

朋黨の軋轢は偶々學術に益ありき

内治の革新を圖り太宗、眞宗等次いで位に即き、大いに學藝を奨勵せしかば、才學の士彬彬々々を接して起り、宋朝三百年間の文運隆盛を見るに至れり。然れども宋朝三百年間の社稷は、太宗の時以來、西夏、金、遼、蒙古の外寇交も到り、加ふるに神宗以後、朋黨互ひに相擠陥して、兄弟牆に闘ぎ、外其侮りを禦ぐこと能はず、遂に徽宗、欽宗の二帝、金人に執はれて復還することを得ず。爾來徽宗の子高宗、金人の南下に壓せられて漸次南方の各地に轉移し、遂に臨安に都を奠め、僅かに江南の一部を保ちて、南宋を稱したりと雖も、後、蒙古の勢漸く強大となり。終に崖山の舟中、趙氏の祀を載せ、冕旒盡く魚服の鬼となりて之を絶つに至れり。然れども一代の文運は依然として衰へざりき。

抑も宋朝三百年の國政を煩はしたる朋黨の軋轢は、偶々、學術の上に競争の効果を致し、活潑なる思想界の状態は、漢、唐以來の訓詁の學に據らず、佛老の思想に出入して、理性の研究なるもの興り、周敦頤、邵雍の大儒、先づ理學の基を樹て、次いで二程、朱熹之を大成し、陸象山亦別に一家を成せ

理學の成立

禪宗の隆盛

宋代の天職
は武斷的に
あらずして
文藝的なり

徽宗皇帝と
足利義政と
は好一對な
り

支那繪畫史

九八

り。又論策、叙記に於ては、司馬光、歐陽修、蘇氏一家、王安石、曾鞏等の諸文豪を輩出し、詩には東坡、山谷等の絶代の詞宗を出だし、宗教は特に申唐以來隆盛の運に向ひたる禪宗盛んにして、所謂五家七宗の法幢海内を風靡せり。されば學界の形勢再び春秋諸子時代の如き盛況を呈し、支那人文史上に特筆大書すべき時代を形成するに至れり。

斯の如く宋代は、國初よりして屢々外敵の侮を受け、武運拙なかりしも、其文化は却つて戦勝者を征服し、元、明の時代をして、其思想を繼承せしむるに至れり。されば宋代の天職は武弁的にあらずして、文藝的なりしといふべし。かの徽宗皇帝の専ら文藝に耽り、青丹の卷、常に手を去らず、遂に金に執はれて五國城頭の慘禍を招きたるが如き、猶、我足利義政の、東求堂の別天地に書畫、骨董の玩賞に耽りて、山名、細川、兩上杉家の旗幟京師に充つるを知らざりしと一般、而して徽宗、義政の共に書に堪能にして、其興廢の跡に考ふるに、經世に非にして藝術に益ありしは、豈に好個の一對にあらずや、又かの宋室の特に亡びんとするに臨み、陸秀夫が幼帝の前にて大學を

宋代は支那
のオーガス
チン時代な
り

畫道風尚の
推移

第二篇 中世史

九九

講じたる一事に見るも、其間の消息を傳ふるにあらずや。然れども士を養ふこと三百年、國祚沈淪の際に至るまで、四方の義故を出して、社稷の運命、日一日たりとも永からしめたるもの、抑も亦名教の餘澤ならざらんや。

宋代の文運既に斯の如く、謂ゆる支那のオーガスチン時代にして、學者各研究的精神を發揮して、専ら思索に耽り、謂ゆる理學なるものを大成して、支那思想發達史の上に、古今の關鍵となり、北方思想を壓倒して、南方思想の高潮に達したる時代、即ち非儒教的にして、理想を重んずる特相を有し、隨つて哲學的内容に富みたるが故に、繪畫に於ても亦自ら形似よりも精神を重んずるの風尚を煥發し、又實際的利用厚生の方面を離れて、玩賞繪畫の勃興を見るに至れり。

蓋し、此思潮風尚は、先秦時代より支那の文藝を通じて、旺盛として一大思潮をなし、超世的遁世的精神に富みて、最も人生の物質的方面と交渉の少なき風尚を代表し來りたるものにして、其思想の高潮に達したるは、實に宋代に於ける一大特色なりとす。而して此思潮を激成したるものは、佛、老の

氣韻生動の趣を發揮す

哲學的思辨なりしが如し。されば當代の文化は概ね此面影を存し、繪畫の如きも、大抵此時代の色彩を發揮せり。例へば花竹を畫くにも花竹を以て單に植物の標本、室中の裝飾、又は花瓶に挿めるものと考へずして、大自然の無限の生氣を宿せる活物として畫かんとせり。即ち形似傳彩の問題を超越して、氣韻生動の趣を活躍せしめんと努力したるが如し。之を山水畫に見るも亦其の大體に於て、時代的特色の認むるものなきにあらず。宋朝の山水畫は後節に於て述ぶるが如く、幾多の流派並び行はれたりと雖も、特に宋風と稱する畫風は、情趣よりも氣に勝ちたるが多く、其の筆勢の兀々としたるは、宋儒の所謂格物致知を標榜して思辨に傾き、萬事理を以て推したる時代風尚の餘響にあらざらんや。されば最も形似を重んずべき人物畫に於ても、亦梁楷によりて減筆の新格を開かるゝに至れり。而してかゝる趨勢は益々助長され、遂に北宋の末葉より、草略の水墨畫の流行を來し、明、清人の謂ゆる文人畫の先蹤をなし、畫人外の畫を益々發展せしむるに至れり。

第二節 宋朝の畫院

文人畫の先蹤

翰林圖畫院の六種の階級

五代の名手大抵宋の畫院に入る

畫道獎勵の極點

趙宋の世、畫道の盛なること唐代に過ぎ、支那歷朝の中、帝室の畫道を獎勵し、畫人を優遇せること、宋朝に及ぶ時なし。五代の世、南唐の李煜主の如き、既に畫院を設け、唐以來待詔、祇候等の官職を以て、畫人を優待したるあれど、宋朝に入ては、更に其規模を擴張し、國初より翰林圖畫院を朝廷に置き、天下の選良を集めて祿を給し、才に従ひて各々待詔、祇候、藝學、書學正、學生、供奉の階級を授け、常に畫を執扇等に作りて進獻せしめ、其最良なるものを撰びて、宮殿、寺觀等に畫かしたるといふ。殊に太宗の時には、悉く藩鎮を征服して天下始めて宋朝に歸順し、蜀の後主、孟昶、南唐の後主、李煜等相降りしかば、此等諸僞主の蒐集せし名畫も、多く宋の御府に入り、其の待詔、祇候たりし名手も、大抵、召されて宋の畫院に入りしかば、畫院は一層の隆盛を見るに至れり。即ち郭忠恕は周の亡びると共に召されて國子監主簿となり、黃居家、高文進父子は蜀より、董羽は南唐より、並びに宋に事へて翰林院待詔となり、其他、祇候、藝學等になりたるもの多かりき。爾來、仁宗の如き自ら丹青を善くしたりしかば、益々畫道を獎勵し、

畫を以て天下の士を採

徽宗の朝に至りては、殆んど其極に達し、神宗、元豊の頃、景靈宮を修し、徽宗、宣和の頃、五岳觀、寶真宮を新築したる時の如きは、嘗に畫院の畫人のみならず、徧く天下の名工を徵して障壁に畫かしむ。賀眞が同僚の反目を受けて、最も落筆に不便なる講堂の壁面に高さ八尺に餘れる雪林を畫きたるも此時ならむ。

蓋し、徽宗の朝に於て、繪畫獎勵の絶頂に達したるは固より徽宗の自ら畫を善くし、大に文藝に興味を有したるが爲めなりと雖も、抑も亦當時の情勢を察すれば、寵臣蔡京等が、帝をして心を政治に用ひざらしめ、己れ久しく政權を專にせんと欲し、帝の嗜好に乗じて畫道を激揚したるに由れり。徽宗は神宗、哲宗の後を受け、内に朋黨の軋轢ありたりと雖も、當時遼夏の勢漸く衰へ、四方無事にして、内庫充盈せしかば、蔡京は豊亨豫大の説に托し、帝に勸めて花石綱、應奉司、御前生活所、營繕所、蘇抗造作局等を興して奢侈を事とし、詩文論策を以て天下の士を採りたるが如くに、畫を以て士を採るに至りしかば、當時の文臣武臣、大抵畫を善くし、朝廷は漸次に強大を加

書畫院の官職者に佩魚を許可す

畫院の試法

へつゝある金人の南下を餘所にして、盛んに大土木を起して京城を修め、只管、豪奢風流に是れ日も足らざる有様なりき。されば政和の歲、畫學を興し、畫院の官職は舊制に倣ふて六種の階級を設け、舊制には藝を以て進みたるもの緋紫を服するを得るも佩魚を帶ぶこと能はざりしに、政、宣の間に至り、遂に書畫院の官職者に獨り佩魚を許すに至れり。又待詔の班に列する時の如きも、畫院を首とし、書院此に次ぎ、琴院棋玉等其下に列するに至れり。又

以て畫院の大に重せられたるを見るに足らん。而して畫院の試法の如きも始めて大學の試目に倣ひ、勅令を以て課題を天下に公布し、以て四方の畫人を補試せり。其試法古詩を以て題を命じ、畫を作らしむるに在り。今一二の例を擧げんに、其課題中には、

踏花歸去馬蹄香、

といふが如き句あり。此は形似を以て表はし難きものなりしが、或畫手の如きは、馬蹄を追従する一群の胡蝶を畫きて香の字を活したりといふ。又

嫩綠枝頭紅一點、 惱人春色不須多。

といふが如きもあり。時に畫手皆樹木花妍によりて盛春の光景を描出し、詩意を傳へんと欲して、悉く撰外に落ちたりしが、只一人ありて僅かに其撰に當りたりといふ。彼は先づ危亭を畫き、添ふるに美人の當時の流行に従ひ、紅の衣裳を着たるが、物想はしげに欄干に凭れたる様の、青柳の相映する間より穂の見ゆる所を描出せり。此は其詩意の春思の發露にあるが爲めなり。又西紀千百〇九年、王道亨の畫院に入れる時に課せられたる畫題は、

胡蝶夢中家萬里、杜鵑枝上月三更。

の兩句なりしが、彼は先づ漢時蘇武の韃靼人に虜へられ、滿目蕭條たる韃靼の草原に羊を牧し、腕を枕に打ち臥したるに、雙蝶の枕邊を彷徨する所を畫きて、故山の夢の濃かなるを表はし、更に森林の黒すみたるが、浩浩たる月光を浴びて、枝葉樹幹の地上に娑婆たる影を投じ、枝上血に泣く子規の月に訴ふる様を描出したるといふ。

當時四方の召試者踵を接して汴京に上りたるも、旨に稱はずして去りたるもの多かりしといふ。蓋し、徽宗専ら法度を尙び、神逸妙能の作を以て次と

なし、専ら形似を以て採り、又師承なきものは其撰に與らざりしが如く、又帝の召對に堪へしめんが爲めに、畫院の人を探る、往々人物を以て先きとなし、其筆力を以てせざりしが爲ならむ。

されば畫院内外の軋轢は、國初以來漸く高まりたるが如く、其軋轢は偶々切磋琢磨の好結果を生じて、斯道を益せしこと甚大なりしが如し。

畫院内外の軋轢は偶々斯道の發展を促せり

かくて徽宗、欽宗の金人に虜るゝや、宋室南方に地を避け、其子高宗、臨安に位に即き、岳飛、吳玠、世忠の諸將屢々金人を破りしかば、宋室は漸く南方の地を維持することを得、西紀千百三十八年遂に新都を臨安に營むに至れり。然れども爾來和戰の議朝廷に喧しく、宋室の武運日々に非なりしにも拘らず、高宗の如き書畫共に巧みにして、畫院の待詔一圖を進むる毎に、各御書を其後に題し、従つて文臣武官多く風雅の心に富み、窮理實踐の學は、朱熹によりて大成され、其感化社會に周ねく、一代の文運は依然として衰へざりき。されば臨安の新都は更に文藝の中心地となり、畫人亦舊職に復し、加ふるに紹興、淳熙の際、名手頻りに輩出し、劉、李、馬、夏の徒院内に在

臨安の新都更に文藝の中心地となる

圖書の蒐集
賞鑒

宣和、紹興

りて、謂ゆる院體畫なるもの興るに至りしかば、南宋の畫院榮として美を古今に肆にし、院外亦此に應じて別派の畫風を擧揚せり。而して古畫の蒐集、鑒の如きも、國初より繪畫の興隆と共に盛にして、太宗の如き即位の當時西紀九七六、天下の郡縣に詔して、前哲の墨蹟圖畫を搜訪せしめ更に待詔、黃居家、高文進に命じて、民間の圖書を搜求し、之が品目を詮定せしめ、瑞拱元年(西紀九八八)には、崇文院の中堂に秘閣を置て、古今の名書を收藏し、毎歲暑伏の際、近侍、館閣の諸公をして縦觀せしめたりといふ。爾後、歷代の諸帝皆鑒藏を好み、徽宗の勅撰にかゝる宣和書譜には、國初より帝室に蒐集されたる六千三百九十六軸を、道釋、人物、宮室、番族、龍魚、山水、畜獸、花鳥、墨竹、蔬果の十門に分ちて、分載されたるを見て、御府收藏の豊富なりしことを想見するに足らん。更に士人間に於ける鑒藏の如きも、唐末より漸く盛にして、宋代に入りて殊に隆盛に赴きたること、諸書に徴して明かなりとす。而して當時畫院の衆工一畫を作る毎に必ず先づ藁を呈し、後、眞本を進めたるを以て、宣和、紹興の所藏には其藁本なるもの多かりしならむ。

の所藏には
藁本多し

後世亦此粉本の草々にして意を經たる處、却て自然の妙味を存するより、競ふて之を蓄ふるに至れり。

繪畫玩賞の
形式一變す

此の如く上下の鑒藏盛なると共に、時代風尙の變遷に伴ひて玩賞繪畫なるもの勃興するに至りしを以て、繪畫玩賞の形式亦從ひて一變し、古來の屏障、壁畫、卷軸等の外に挂幅なるもの創まり、横幅の如きは米元章より生まれりといふ。又宋以前には小幅なるものなく、南宋以後、始めて盛なりしといふ。かの李迪、夏珪等の作に、執扇方幘の小品、殊に多しといふは、南宋の流行に従ひたるが爲めか。

第三節 宋朝畫風の沿革

前述のごとく、宋朝三百年の藝苑は、國初より興隆の氣運に向ひ、名匠巨擘踵を接して輩出せしかば、畫風も種々に分れて、變遷推移を經たるは、蓋し自然の數なり。茲に叙事の便宜を主とし、科を分ちて畫風沿革の跡を尋ねん。

(一) 山水畫の沿革

山水畫の沿革

元の湯垢の畫鑿に曰く、

山水之爲物、稟造化之秀、陰陽晦冥、晴雨寒暑、朝昏晝夜、隨形改步、有無窮之趣、自非胸中丘壑、汪洋如萬頃波者、未易摹寫、如六朝至唐初、畫者雖多、筆法位置、深得中古意、自王維、張璪、畢宏、鄭虔之徒出、深造其理、五代荆關、又別出新意、一洗前習、迨於宋朝、董源、李成、范寬三家鼎立、前無古人、後無來者、山水格法始備、三家之下、各有入室弟子、二三人終不逮也。

國初の三大家

實に宋初の山水畫をして古今の絶響なりと稱せしめ、其影響する所後世に周ねからしめたるものは、此等三大家の畫風なりとす。然れども其傳流の明かなるは、李成、董源の二家なりとす。

李成一派

李成字は成熙、もと長安の人、唐の宗室なり。五代戰亂の際、四方に流寓し、遂に地を北海の營丘に避く、故に世人李營丘といふ。父祖世々文學を以て時に聞え、中頃、衰へて李成に至る。而も猶儒を以て業となし、善く文

李成

遠近透視の法

を屬す。氣調凡ならず、磊落にして、大志あり。初め關同に師事して其法を學び、後、遂に一家を成す。墨を惜むこと金の如く、直擦の皴法、好て平遠寒林を寫し、其樹木は節を作る處墨圈を用ひずして、大點を下し、通身淡墨を以て空過す。其雪景は峰巒林屋、皆淡墨を以て爲し、水天の空處、全く胡粉を以て之を填めたりといふ。其山の體貌の古今獨歩と稱せられたるは、遠近透視の法を悟りて、山上の亭館飛簷を仰畫したるが爲ならむ。蓋し、宋時に入りて遠近法、明暗法の漸く畫論家に認められたるが如きも、畫家の之を作物の上に發揮したるは稀にして、李成の如きは自から遠近法の重要なことを自覺したる一人なるが如し。

其の傳流 郭熙

其畫風を傳へたるもの、其弟子、許道寧、李宗成、翟院深を初めとし、宋代の高手、郭熙、高克明の如きあり、後、元、明に至りて其流を掬むもの漸く多し。而して李成に郭熙あるは、猶董源に釋巨然あるが如しといへり。郭熙は仁宗、神宗の頃、御書院藝學となりしが、又書を善くし、其畫風始めは巧膽致工なりしも、深く李成を慕ひ銳意摹寫して其堂奥に入りたるが如く、

山水の三遠

高克明

自ら胸臆を據發して一家を樹て、爾來巨障高壁愈々壯なりしといふ。元豐の末、顯聖寺悟道者の爲めに、十二幅の山水大屏風を作る、山重水複、雲物を以て映帶せず。筆意乏しからずと。神宗深く郭熙の筆力を愛し、一殿及第中、悉く熙の作を以て掩へりといふ。李成、郭熙能く丹青、水墨を合して一體となして用ひしかば、當時、書院の畫工競ふて其法を倣ふ。南宋紹興間に於ける畫院の待詔、揚子賢、張洄、顧亮、朱銳の如き皆其風化を受けたるものか。熙、晩年に至り山水訓論を著はし、遂に畫式となる、三遠の畫法高遠、深遠、平遠は彼の創むる所なり。

高克明もまた李成の山水を學びて蒼古清潤の趣を得、又佛道、人馬、花竹、屋宇をも善す、大中祥符の際、圖書院に入り、後、遷つて待詔少府監主簿に至る。最も仁宗の厚遇を受く。時の名手太原の王端、上谷の燕文貴、潁川の陳用志の輩と畫友にして、郭熙より少しく先きなるが如し。景祐の初め、顯川の宗、畫臣鮑國資に命じて、四時の景を彰聖閣に畫かしむ、國資戰懼已まず、筆を下す能はず、克明に命じて之に代らしめたりと。又皇祐の初め、克明等

宋 趙

董 源

其の傳流

に命じて三朝盛徳の事跡を畫かしむ。人物纔に寸餘にして、宮殿、山川、鑾輿、儀衛、皆備はる、更に學士李淑等に命じて序を作りて之を讀せしむ、凡、一百事別つて十卷となし、三朝訓鑑圖と名く、遂に傳摹鑿版して大臣及宗室に頒ち賜はれりといふ。當時宋趙又畫名一時に高かりしが、其山水林木は李成の遺法を傳ふといふ。

董源一派

董源字叔達又は北苑と號す、江南鐘陵の人、南唐に事へて畫名あり、山水墨は王維を學び、着色は李思訓に依れりといふ。秋嵐遠景を巧にし、多く江南の眞景を寫す、嵐色鬱蒼、枝幹勁挺にして、小樹の如き點綴を以て形を成し、墨勢淋漓たり。嘗て落照の圖を畫く、用筆草々にして近く之を視れば物象に類せず、離れて之を觀れば、村落杳然として、景物悉く晚景の有様を呈し、遠峰の頂、宛も返照の色あるを見るといふ。釋巨然、劉道士の如き皆此手法を得たるものにして、米氏落伽の手法も亦實に其の點綴より來るもの如し。其他、南宋の江參、元朝の黃公望、倪迂、王蒙の如き、最も其影

釋巨然
劉道士

惠崇
玉潤
江參

范寬

響を受けたるものとす。蓋し、元、明の山水諸家、大抵、李、董二家の流を
掬むに至れり。中に就いて董源の正傳を得たるものを釋巨然とす。劉道士と
共に鐘陵の人にして、董源と同郷たり。共に董源の畫法を學んで堂に上る。
巨然初め業を開元寺に受け、後、南唐の李後主に隨ひて京師に出で、開寶寺
に住す、聲譽一時に高し、其筆蹟嵐氣清潤にして布景天真を得、壯年多く磬
頭を作り。老年に及んで平淡趣高く、積墨幽深なるものを作る。釋惠崇其の
衣鉢を嗣ぎ、更に僧玉潤に傳はる。
江參字は貫道、江南の人、又董、巨を師法として平遠曠蕩の趣を得、泥裏
拔釘皴を創む、山水の外に百牛の圖ありといふ。

范寬始め荆浩、李成の畫法を學びたりと雖も、後、別に新意を出して一家
を成す。曾て曰く、人を師とせんよりは造化を師とするに如かずと、終に居
を終南、大華の岩隈林麓の間にトし、日夕、其雲煙慘淡、風月陰霽の景を目
撃して、之を筆端に著はす。其千巖萬壑、雄偉峭拔の勢を存すといふ。晩年

郭忠恕の界
畫は古今の
絶響なり

界畫

に至り墨を用ふること太多く、深暗暮夜の如くにして土石分たず、物象の
幽雅なること古今に獨歩たり、特に業々たる山頂に密林を作り、水際に突兀
たる落石を出し、其屋宇を畫くに墨を以て籠染し、後世稱して鐵屋といふに
至れるが如きは、特徴の最も顯著なるものなり。

郭忠恕

郭忠恕は洛陽の人なり、初め五季の周に事へて博士となる。宋の海宇を統
一するに及び、太宗其名を知り、召して國子監主簿と爲す。作石は李思訓に
似、樹法は王維に類し、而も多く關同を師と爲したるが如し。屋木樓閣に至
つては、自から一家を成し、古今界畫の絶響と稱せらる。重樓複閣、天外數
峯に疊出して、妙趣自から筆墨の間にありといふ。

古來、界畫に於て名を得たるもの、隋の董伯仁、唐の檀知敏、宋の郭忠恕、
王士元、元の王振鵬、明の仇實父等にして、王士元五代にして、山水中に多く樓閣
に畫るは忠恕の法を傳へたり。
蓋し、忠恕の用筆に妙を得たるは、書道より來れるもの、如し。其楷法に

精しく、兼て篆隸に長じたるは、曾て太宗の彼に命じて歷代字書を刊せしめ、佩觿を著さしめ、又古今尙書並に釋文を定めしめて世に行はるゝより推して知らるゝなり。然るに後世に至り、界畫家大抵尺を用ひて筆を引き、折算斜整を事とし、刻意巧緻ならんことを欲して、遂に印本中の臺樹樓閣と撰ぶ所なきに至れり。

此等の國初に於ける畫家に次いで、英宗、神宗の頃には、王洗、燕肅等の高手あり、更に哲宗の朝には趙令穰字大年其畫法王あり、徽宗の朝には米元章あり、其子、米元暉は欽宗の妃、仁懷皇后の師となる。各々一家の門庭を樹て、後人の模範となれり。

米家

米芾字元章、襄陽の人、徽宗の朝、官、書畫博士、禮部員外郎となる。山水、人物、烟雲掩映、書畫共に自ら一家を爲す、畫理に精しく、鑑定に於ては古今第一と稱す。畫史、畫評、寶英、光俯の著あり。資性曠達にして不羈、世と係らず、冠服の如きも唐人に效ひ、風神蕭散なりしといふ。凡、書

米芾

雲山の祖

米友仁

畫を作る、萬乗の前と雖も、亦必ず衣を解き、帶を脱し、未だ嘗て官守の爲めに其落魄を改めざりき。其雲山烟樹は王洽を宗とし、點筆破墨は董源の手法より來りたるが如きも、其行草の書法によりて雲山烟樹を畫き、遂に其妙趣を發揮するに至りたるが故に、後世雲山は彼より始まると稱するに至りたるものか。而して其行筆早々の間、變幻無窮の意を存し、悠然として自ら晴雲出沒し、重林濕翠、烟嵐人を襲ふものありといふ。又好んで墨戲をなし、或は紙、或は甘蔗、或は蓮房の片々を取りて畫けり。蓋し墨の濃淡によりて妙趣を發揮する畫風は、米家の特色なりしが如し。其子、友仁字元暉、乃父の衣鉢を嗣ぎて家名を揚ぐ、大隸を畫して古意あり、父の畫法に少しく自己の意を加へ、烘鎖點綴をなし、山水を寫して尺寸皆雲烟の勢を挾むといふ。宋室南に移りてより、畫名愈々高かりき。其畫風を傳へたるもの、南宋に興開あり、元の高克恭亦父子の感化を受けたるが如く、其風流餘韻綿々として元、明の間に及べり。

宋朝後期の山水畫

米元章以後、宋室南に移り、徽宗の子高宗、臨安に新都を營み、文藝の中、心漸く新都に移るや、山水の畫風も亦自から變潮を呈し、趙伯駒、李唐、劉松年、馬遠、夏珪等の名匠畫院に輩出するに及んで、山水畫に於ける院體畫なるものを生じ、此に新派を開くに至れり。蓋しかゝる趨勢は既に北宋の朝翰林圖畫院を設け、殊に徽宗の極端なる畫道の奨勵に刺戟されて頭を擡げ、新都の畫院復興するに及んで、一時に煥發するに至りたるものか。爾後、畫院の風、大に勃興し、其餘勢元朝の中世に及び、所謂宋風なるものを大成するに至れり。然れども等しく宋風といひ、或はまた院體畫といふも、其間には自ら異調別格の存するあるが如し。今其徑路の梗概を見るに、嘗て唐の李思訓父子、金碧青綠の整巧なる山水を作り、其法久しく中絶せしが、北宋末より南宋の初めに渡りて、趙白駒宋室の先づ其法を嗣ぎ、筆法織線牛毛の如く、最も巧整なるものを畫きて、南宋の畫苑に一旗幟を建て、弟趙伯驥文藝を以て高宗の左右に侍し、また山水花木に長じて其家風を傳へ、李唐の如きも畫譜によれば、また遙かに李思訓を學び、張敦禮之れを嗣ぎて劉松年

俗に暗門の待詔に傳へ、其畫風筆法細潤、綵緋亦潤麗にして、趙千里の筆法と同巧なりといふ。若し之をして眞なりとせば趙、李、劉の三家は、其風、自ら相通じ、巧整にして専ら青綠を用ひたりとすべきか。然れども李唐の如き、現時其作品と稱するものを見るに、筆法細潤ならずして宋風の突兀せる筆致を存せり。蓋し、初め法を李思訓等に取りしも、後、遂に新機軸を發揮して一家をなしたるものか。李唐字は晞古河陽三城の人、建炎の際、畫院の待詔となる、高宗深く愛重して金帶を賜ひ、當時畫院の名手多かりしと雖も、李唐を以て冠と爲せりといふ。此等諸家の外、馬遠、夏珪などの蒼勁の一派あり。専ら水墨を成して、勁拔の畫風を興す。其法漸次に變遷して明の戴文進等に及び、所謂浙派の目あるに至れり。我雪舟翁の如きも亦馬、夏の法を祖述せり。斯の如く南宋以後、李、劉、馬、夏の名家畫院に勃興して一大勢力を成し、院體畫の隆盛を見ると共に、宋風の大成を以てせり。されば爾後、李唐の流を掬めるものに、蕭照詔興中待詔、陸青の紹熙中、高嗣昌嘉定中待詔等あり。閻仲待詔、其

李嵩 江參 玉珊

子閻次平、候興中、帶閻次子、同一家の畫風も、亦李唐に類せりといふ。又馬遠の法を傳ふるものに、樓觀待詔の等あり、薛顯祖の待詔の如きも、沒興の馬遠と稱せられし程なれば、恐くは蒼勁の一派に屬せしならむ。尙、院内には李嵩朝の待詔三馬、永忠、李嵩を師とすの一派あり。而して院外には北宋諸名手の流派に屬せるもの、江參、玉珊、朱敦儒、龔開、張師義等の僅に其餘墨を維持したるの觀あり。

馬氏の二門

馬遠の先、馬貴宣和の待詔となり、興祖亦書を以て紹興中待詔となり、伯父公顯、父の世榮、兄の馬遠、子の麟、皆書を善くし、一門大抵藝を以つて宋朝に事ふ。中に就き馬遠の技倆尤も秀で、寧宗の朝、書院待詔となりて金帶を賜はる。最も山水、人物を善くし、院中獨歩と稱す。字は欽山、世、馬一角と稱す。李唐を學んで更に簡率を加へ、其樹石の如きは、概ね巨然によりたるが如く、又鄭虔の淡彩法をも用ひ、又其人物の衣褶は、吳道玄に基きて蘭葉描をなせり。筆法勁拔にして水墨を專にし、樹石の如きは、樹葉夾筆をな

夏珪

し、石皆方硬にして、大抵焦墨を用ひ。夏珪と共に謂ゆる蒼勁の一派を開くに至れり。夏珪字は禹玉、錢塘の人なり、馬遠と共に寧宗の書院待詔となり、金帶を賜はる。初め李唐を學び、范寬、米氏一家の畫法をも加へたるが如く、筆法蒼老、墨汁淋漓にして、墨を用ゆること傳彩の如く、其皴法は拖泥帶水を、先づ水筆を以て皴し、後加ふるに墨筆を以てせり。其畫風大抵馬遠と同一なり。たゞ好んで秃筆を用ひ、樓閣、尺を用ひず、界畫手に信せて畫を成し、突兀奇怪にして氣韻更に高きが如し。其子夏森亦書を善くす。

道釋人物畫の沿革

(二) 道釋、人物畫の沿革
宋初の道釋畫は、五代以降、唐朝の餘風を維持して、寺觀の障壁及宗教畫なるもの最も流行し、王霽の如き太祖の朝に於て圖書院祇候となり、開寶年間、開寶寺に文殊の像を畫き、後又景德寺等に彌勒下生の像を畫き、王仁壽、長壽、と共に早く其名を揚げ、次いで太宗位に即き、蜀の孟昶、江南の李煜、を降して、天下始めて宋朝に歸順するに至り、蜀、江南の諸名手、大抵、召

に應じて畫院に入り、四方の名匠も亦競ふて汴京の都に上りて畫院に入りしが、此等の畫家は皆道釋、人物に長じ、専ら壁畫を作りたるものにして、唐風の餘波を揚げたり。即ち待詔、高益、高文進、高懷節、祇候、王道真、昭慶、牟谷、揚斐、藝學、趙元良、學生、趙光輔及び院外の孫夢卿、孫知微、王瓊、候翼、童仁益等は、何れも此種の名手にして、其餘饒、真宗、仁宗の朝に於ける武宗、元文臣にして曹祇候、高元亨、馮清、陳用志等に及び、爾後此種の妙手漸く稀なるに至れり。蓋し此等の佛敎畫は神宗の朝以來、社會風尙の推移と共に一大變遷を経るに至りたるが故なり。

抑も佛敎は唐末以降、顯密の諸宗漸く衰運に向ひ、五代の世に至りては、禪門獨り盛にして、謂ゆる五家七宗の門葉繁くなり、宋時に入りて禪風益々盛なりしかば、五代の世より流行し始めたる羅漢圖及び禪僧の頂相圖等は、宋代に入りて益々發展し、神宗以後に及んで、此等の圖像専ら行はれ、禮拜に供する從來の諸尊圖像漸く廢れて、玩賞繪畫たる道釋人物の繪畫是れに代るに至り、宗敎繪畫史上に一大變革を生ずるに至れり。而して此等の玩賞

宗敎畫史上の一大變革

玩賞繪畫の發展

禪の宗旨と藝術との關係

繪畫の道釋人物は、山水に兼ねて諸家大抵之を書き、本邦流傳の遺品亦少なからず。即ち釋法常、牧谿の白衣觀音、無華、禪師の禪僧の頂相等皆人の知る所にして、此風尙は遂に草略なる水墨畫を助長し、由來文士禪僧の墨戲頗る隆盛なるを致せり。即ち羅窓は牧谿と同じく山水、樹石、人物等皆筆に隨つて點墨し、意思簡當、裝飾を費さざる畫風を擧揚し、釋子温は水墨の葡萄畫を創め、圓悟の竹石、慧舟の小叢竹等共に墨戲に於て其名あり。其餘、梵隆、李公麟を、超然、王彌、惠崇の山水、月蓬の佛畫等皆禪林の鏘々たるものなり。蓋し禪門の宗旨は、直指頓悟を旨とし、世間的實相も亦是れ解脱海中の波瀾にして、雨竹風聲皆禪を説くものと解するを以て、其美術に對する態度の如きも、隨つて爾餘顯密諸宗の如く、繪畫をして宗敎の奴隸たらしめず、木石花卉、山雲海月乃至人事百般の實相は、自から自家を照すの淨鏡となり、成悟の對象機縁となるものなるが故に、從來の禮拜圖像の如き羈絆藝術の外に、あらゆる種類の繪畫を歓迎することとなり、此に玩賞的道釋人物畫の發展を助長し、繪畫をして禪宗の隆盛と共に、此種の風尙を激揚するに至れり。而

して此宗教畫の變遷は、當時士人間の鑒賞盛なると共に、繪畫玩賞の形式に變化を及ぼしたること前述の如く、又これと因果して山水、花鳥畫の流行發展を見るに至れり。

羅漢圖の變遷

今宋畫道釋の本領とも稱すべき羅漢圖の沿革を見るに、羅漢圖は既に六朝の戴逵、印度僧跋摩によりて始めて畫かれ、唐初亦盧稜伽等によりて多く畫かれ、爾來好個の畫題となりしが、其の圖様大抵耳に金環を符め、豐頤、盛額、隆鼻、深目、長眉の類にして、全く印度高加索人種の相貌を表現せしめ、其服裝も全く印度的にして、附屬品の如きすら概ね印度式のものゝ模寫したるが如し。然るに五代の末葉より宋代の初頭に互りて、王齊翰、張元簡の輩、世態の相を取りて羅漢を畫き、從來の圖様を變じて大に支那化したるが如く、宋の太宗即位の當時王齊翰の羅漢圖を得、爾來、其の畫風も漸次巧整を加へ、神宗の朝、李龍眠の出づるに及んで、常に支那化されたるのみならず、又前代に比して一層精巧なる羅漢圖となり、其流麗にして而も起倒著き描法は、遂に一種の典型を成して後代畫家の師表と爲れり。本邦宅磨派の畫風は其影響に成

宋代宗教畫の師表

梁楷の減筆

りしものといふ。而して宋代の羅漢圖は我國に傳存せるもの頗る多く、太宗雍熙四年(西紀九八七)喬然の將來せし清凉寺都京の十六羅漢、孝宗、淳熙五年(西紀一一七八)明州惠安院義紹の勸緣したる林庭珪に逸せり、周季常上の五百羅漢(京都大徳寺の什寶元陸信忠支那畫傳に逸して我がの作といふ相國寺都京の十六羅漢等百幅現在八十二幅)殊に李龍眠の遺作と稱せらるゝものは頗る多く、東京美術學校所藏の羅漢二幅は最も佳なるものなりといふ。此れ等の畫は皆巧整の作風を存し、李龍眠の如きは實に此種の畫風の師表ともいふべく、以て宋代佛敎畫の技風を窺ふに足らん。後、南宋の賈師古、李龍眠を學んで梁楷(光宗嘉泰書院に傳へ、梁楷更に減筆の新格を創めて、兪珙待詔定李權成淳に傳へき。其他、劉宋古待詔興蘇漢臣待詔薄焯蘇漢臣の子蘇堅元待詔一家、並に蘇漢臣の法を傳へたる孫必達待詔陳宗訓待詔及李從訓待詔其子李班待詔等亦一家を成し、共に南宋に於ける道釋人物の能手にして、其畫風大抵傳彩精妙なりとす。此に宋代道釋人物畫の重なる名家の略傳を載せん。

李公麟

北宋の名家其人に乏しからずと雖も、諸家の長を集めて之を大成し、佛畫人物の上に精巧なる畫風を發揮し、後世、其畫風を傳へたるもの多く、百代の師表と仰がるゝこと、猶我國の谷文晁と相似たるものを李公麟となす。公麟字は伯時、舒城の人なり、北宋の神宗、熙寧三年西紀一〇七〇進士となり、歴官して朝奉郎に至る。西紀千百年病を得て龍眠山に歸老す、因りて龍眠居士と稱す。博學にして詩文を能くし、眞行書は晋、宋人の筆致あり。其叔父書畫を好み、所藏多かりしかば、彼が前人の長所を集大成したるも、一は其朝夕觀覽に便を得たるが爲めか。彼常に古今の名畫を得る毎に必ず摸寫して其副本を蓄へ、古今の名畫有らざる所なかりしといふ。佛像人物は吳道玄の旨を得、畫馬は韓幹に法り、清秀の氣韻は王維の正傳を得、著色山水は李思訓の風ありといふ。大抵、澄心紙を用ひ、白描して著色せざるもの多く、古畫を臨摹するに至つて絹素著色を用ひき。行筆細潤にして精緻なりとす。其白描の筆法に至つては、行雲流水の起倒あるが如し。晩年に至り書畫共に蒼古遒勁となり、其徐神翁像の如き、筆墨草々にして神氣烟然たりといふ。大

抵立意を先きと爲し、布置縁飾を以て次ぎと爲したるが如し。其畫風を傳へたるもの多しと雖も、最も有名なるものを釋梵隆となす。白描人物を善くし、兼て山水に工なり、曾て十六羅漢の圖を描く、行筆極めて精細古雅にして精彩煥發すといふ。其作、往々李龍眠の作と紛ふものあり、然れども氣韻筆法に於て師に及ばざりしといふ。

高文進家

高文進は花鳥畫の泰斗、黄居家と共に太宗の畫院に入り、當時、道釋壁畫に於て名を馳す、成都の人なり、四世相續して家業を傳ふ、蓋し支那畫家の相傳に於て稀に見る所なり。其曾祖父を高道興といふ、唐末の光化中、趙德齊と共に西平王の儀仗を畫きて名あり、道興の子を高從遇といふ、五代の時、蜀宮の大安樓下に天王の仗隊を畫く、高文進は實に其子なりとす。文進の子に懷節、懷寶の二子あり、共に家業を揚ぐ。文進、乾德三年西紀九六九蜀主に孟昶降るに及んで宋に歸す。時に太宗潛邸に在りて多く名藝を訪求す、文進往いて之に依る。後、翰林院待詔の職を授く、未まだ幾許ならずして大相國

高懷節兄弟

寺を修復するに當り、文進に命じて高益の舊本に倣ふて其行廊に變相の圖及び太一宮等の圖を畫かしむ。時に畫院の學者咸な之を宗とせりといふ。其手法は曹、吳の法に依る。文進の子、懷節亦太宗の朝に待詔となり、頗る父風のあり。曾て乃父と共に相國寺の壁に畫く、兼て屋木に長ず。弟懷實も亦太宗の朝に祇候となり、花鳥草蟲蔬果を善す、

(三) 花鳥畫及雜畫の沿革

花鳥畫の沿革

花鳥畫は五代末葉の黄筌、徐熙等によりて大に啓發され、宋に入りて玩賞繪畫なるもの、流行し繪畫玩賞の形式亦一變するにつれて、山水花鳥畫の大發達を見るに至りたること前述の如し。されば宋代の繪畫は、山水、花鳥畫に於て遙かに唐代のそれを凌駕したりといふべし。而して山水に於ける院體風なるものは南宋の劉、李、馬、夏等によりて勃興されしも、花鳥畫に於ては、宋初、黄筌の子、黄居寀尤も太宗の眷遇を受け、翰林院待詔となり、太平興國の際、命を奉じて民間の名蹟を搜求し、其品目を詮定せり。其畫風乃父の手法を傳へ、句勒の老硬、填彩の濃厚を以て優れ、花竹翎毛皆天眞を

革黄居

院體畫の端緒

黄氏體

徐崇嗣の没骨寫生の創格 徐氏體

得、怪石山景に至つては、往々乃父に過ぐるものありといふ。其畫法遂に畫院の程式となり、當時、藝を較ぶるもの大抵黄氏一家の體製を以て優劣を定めたりしかば、此に院體畫なるもの、端を開くに至れり、而して父黄筌の筆蹟には、未だ畫院の習氣なく、筆墨老硬にして柔媚の跡なく、間々水墨のものをも作りたるが如く、其の子、居寀に至つて、日夕朝廷の富貴に馴れ、句勒、填彩の手法に、莊麗富貴の趣きを專にし、遂に院體の畫式を大成するに至りたるが如し。後世、黄氏體と稱するものは是れなり、其徒、夏侯延、李懷衰、李吉等は、皆黄筌以來此家に屬したる名手にして、李吉の如きは最も院體に妙を得たりといふ。當時、徐熙の孫、徐崇嗣、院外に在りて没骨寫生の畫法を創始し、加ふるに祖父の輕淡野逸の手法を傳へて、黄氏一派に對峙したるの觀あり。謂ゆる徐氏體なるものは是れなり。徐熙に徐崇嗣あるは、猶、黄筌に黄居寀あるが如く、共に其家名をして重からしめたるの効あり。崇嗣、連枝花禽に長じ、果實の地に墜つる様を畫きて具さに形似を得たりといふ、祖父以來其徒亦多く、

花鳥畫に於ける南北の畫別

没骨圖の由來

支那繪畫史

唐希雅一家の如きは、其風化を受けたる重なるものか。國初、黄筌父子早く召されて圖畫院に入り、徐氏一家は永く院外に留まりて、自然に兩派相對抗したるが如し、後、明人の唐以降の山水畫を南北の二大系統に畫別する至り、本邦に於ては、黄氏體の畫院に用ひられたること、猶、山水の北宗派に同じく、徐氏體の院外に成りしこと、猶、南宗派の多く院外に發展したるが如く、又其兩家の畫風の自から山水畫南北の別に似たるものあるより、遂に黄氏體を北宗とし、徐氏體を南宗に屬せしめて、山水と共に包括して、花鳥畫をも南北の二宗に別ち唱ふるに至れり。

傳へ云ふ國初江南の徐熙、京師に到り、圖畫を畫院に送る。其畫格を品弟するに、黄氏一派の畫花、妙、句勒填彩にありて、用筆極めて精細なりしに、徐熙の畫法、筆墨を以て之を畫き、殊に草々にして、畧丹彩を施すのみ、而も神氣迥かに出で、別に生動の意あり。黄氏一派其軋轢を避けんが爲めに、其粗惡なるをいふ、遂に格に入らずして止む。後、熙の孫徐崇嗣乃ち諸黄の格を倣ふて、更に墨筆を用ひず、直ちに彩色を以て之を圖し、之を没骨圖と

趙昌

易元吉

第二篇 中世史

いふ。最も工にして諸黄の體と相下らず、黄氏の一派復能く瑕疵する能はず、遂に院品に入るを得たりと。此は其真相の何れなりとするも、當時、既に畫院内外の反目ありたるが如く、此反目軋轢は、偶々競争の効果を致し、當代の藝苑をして益々發達せしめたる一因となりたるが如し。斯の如く、宋初の花鳥畫は、黄氏體、徐氏體、院の内外に對峙して、春蘭秋菊各々其名を擅にし、其餘の畫人大抵此兩家の緒餘を繼ぎたるが如く、又別に陳常の飛白法の如き、丘慶餘の草蟲を作るに、唯墨の淺深を以て映發せしめたるが如き畫法も並び行はれたりき。かくて黄氏體は神宗の朝に至り、崔白兄弟、吳元瑜の輩によりて一變され、徐氏體は眞宗の朝に趙昌、英宗、神宗の朝に易元吉等ありて、徐氏没骨の手法を傳へたるが如し。趙昌最も傳彩に妙を得、當時雙ぶものなかりしといふ。弟子許多あり、王友は其高足なり。易元吉嘗て趙昌の畫を見て曰く、世未だ人に乏しからず、須らく舊習を擺脱することを要す、若し夫れ古人の未だ到らざる所を超軼すれば、則ち名家と謂ふべしと。乃ち荆湖の間に遊び、奇を搜り古を訪ひ、名山大川、毎に勝

麗佳處に遇ふごとくに意を留め、猿狖鹿豕と與に遊び、目撃する所即ち之を毫端に上す。又嘗て長沙所居の舍後に圃を開き、池を鑿ち、亂石、叢篁、梅菊、葭葦を點置し、多く水禽山獸を馴養して、其動靜游息の態を伺ひ、以て畫筆の思致に資せりといふ。治平中、景靈宮の御辰を修む、英宗、元吉に詔して花石珍禽を畫かしめ、又神游殿に於て牙獐を作らしむ。後又詔して百猿の圖を畫かしむ。其寫生に妙を得たる、所由ありといふべし。

畫院の程式一變す

崔白兄弟

今院體畫の變遷を見るに、宋初より神宗の朝に至るまでは、専ら黃氏體を以て畫院の程式となし來りたるに、崔白兄弟、吳元瑜、武臣、崔白に至り遂に其格式を一變するに至れり。崔白、花竹、羽毛、菱荷、鳧雁を善くし、其道釋、鬼神は唐の盧稜伽の筆法を傳へ、最も寫生に長じて精絶なりしといふ。熙寧の初、神宗の詔を奉じて艾宣、丁昞、易守昌、侯と共に垂拱殿の御辰に夾竹、海棠、鶴の圖を畫き、旨に稱ふて藝學に補せらるゝや、從來、畫院の採用し來りたる格法を漸く變ずることとなり、其弟、崔慤、及び當時崔白を師とし、遂に一家を成したる武臣、吳元瑜など、大に世俗の氣を變じ、遂に從來

吳元瑜

李安忠久子

李迪父子

の院體風を革むるに至りたるが如し。宋、南に移りては、李安忠高宗頃の待たるは、黃氏體の畫法を傳へたるものか。林椿、淳熙は待詔となり、其花鳥は趙昌を師とせり、李迪は畫院の副使となり花鳥竹石を善くし、其子李德成父の衣鉢を繼ぎて、景定中の待詔となり、共に其の畫風生動秀拔の趣ありて自ら一家を成す。其他毛益、乾道中其の子毛允、及び吳炳、紹興間等並びに南宋の朝に於ける、動植畫家の鏘々たるものにして、李從訓一家亦花鳥畫を兼ねて名あり。

畫竹畫梅の沿革

畫の四君子記號畫の蓋

畫竹、畫梅も亦宋代に於て大に啓發せられたる一特産物にして、後來の藝苑に於て特種の發達を見るに至りしものなるを以て、此に其變遷の梗概を叙述すべし。蘭、竹、梅、菊の畫は、元、明、清の時代に及んで盛に行はれ、謂ゆる畫の四君子として、高人志士が自己の戒めとなし、又諷諫の一助ともなしたるものにして。宋末、鄭思肖の蘭は記號畫の濫觴とも見るべく、後世の畫家は此四品

墨竹の起原

によりて花葉幹莖の書法を習ふに至りしものにして、其の起原は大抵唐、宋の間にあるが如し、而して此等の書はもと畫竹、畫梅といはずして、寧ろ寫竹、寫梅といふが多かりき、蓋し梅竹の清魂を畫人が胸中に得て、之を筆下に寫し出すに在るを以てなり。古來、墨竹は五代の李夫人が竹葉の娑婆たる隨上の月影を描寫せしに創まれりといふも、唐時既に王維、孫位、張立の如き並に墨竹を善したるが如く、山谷の云ふ所によれば、吳道玄の畫を作る、連筆にして卷を作す、青丹を加へず、思ふに墨竹の師此に始まるかとあり、未だ其是非を辨じ得ずと雖も、其起原の唐代に在りたるは事實なるが如し。爾後、五代の李夫人、黃筌、李煜、北宋の崔白、吳元瑜等、其作者漸く多かりしが、大抵、鈎勒を以て畫かれたるが如し。然るに墨の濃薄によりて其表裏を表はし、種々奇趣を出して、寫墨を専らにしたるは、北宋哲宗の朝に於ける文與可に始まりたるが如し。文同字可嘗て篆隸行草飛白を學び、十年にして未だ堂に入らず、偶々途上に鬪蛇を見て遂に其妙を得るに至れりといふ。其畫風瀟灑の姿致に富み、風を迎へて動くが如し。當時蘇東坡之を學んで堂

墨竹の妙趣を發揮したるは文與可なりとす

蘇東坡

畫梅の變遷

楊補之

董羽

奥に達す。此を以て古來墨竹をいふもの文同、蘇東坡を稱せざるはなし。爾來、一燈分焰、益々盛んにして金の完顔、樗軒の如き其法を得たりといふ。又畫梅の如きも唐時已に之あり、然れども宋に至るまでは、概ね色彩を施したるが如きも、北宋の陳常に至りて白描を以て畫かる。徐沁の言ふ所に依れば、北宋、花光の僧仲仁始めて墨暈を以て別趣を創め、覺範之に效ひ卓子膠を用ひて生絹の扇上に畫き、更に尹白祖花光を師とし、一派流傳して南宋に至り、楊无咎字補之、始めて其致を極め、猶子季衡及び甥の湯正仲等大に其源を暢べ、争ふて相趨尙せしなり。爾來、元、明に至りては作者寔盛にして史を爲り譜を爲すものいと多し。斯の如く此等の畫は、宋代に入りて大に發達し、文士、禪僧の墨戲盛なりと共に、特殊の發展をなすに至れり。其餘、魚龍海水に妙を得たるものに、國初待詔董羽字仲翔あり。好んで長風、萬里の浪を破り、驚雷怒濤、之と共に魚龍の出没する狀を畫く、曾て太宗の命を受け端拱樓に畫き、又玉堂の北壁に畫く、皆筆端遒勁にして壯觀を極め

たりといふ。後、理宗の朝に陳所翁名は陳容端平二出で、詩文豪壯、畫龍を善くし變化の意を得、濃墨雲を成し、水を噴き霧を成す。快に乗じて隠々數筆、龍其中に藏し、傲兀、變滅名狀すべからず、寶祐間、名一時に重く、其畫法、後世畫龍の軌範となる。其製作に水墨の畫龍と絳色のものとありて、後なるは董羽に似たりといふ。

第四節 宋朝の論畫

宋朝は謂ゆる理性の學の創設せられたる時代にして、學者多く情味を離れて理論に耽りたるを以て、論畫の如きも頗る多く、見るべきもの亦少なからず。郭熙、郭若虛の二家は論著最も多く、蘇東坡、李成、韓拙、李廌、鄧椿等是れに次ぐ。山水訓及畫訣は郭熙の論著にして、謂ゆる高遠、深遠、平遠の三遠は其創見となす。其子、郭若虛の圖畫見聞誌は、唐の張彥遠の歷代名畫記に次いで、斯道の變遷を徴するに足り、其用筆上の三病、結、刻、の如きは、後世、畫家の軌範となれり。東坡は形似を主とするは其見兒童に隣すといひて大に傳神の論を鼓吹し。李成は山上の亭館飛簷を仰畫すべしといふて、其

三遠法
用筆上の三病
傳神論

透視畫法

山水十二忌

明暗法

法、近世の透視畫法に符合せり。其他、饒自然の山水、十二忌、一布置迫塞、二遠近不分、三山氣無脈、四水無源流、五境無夷險、六路無出入、七石止一面、八樹少四枝、九人物僂僕、十樓閣錯雜、十一滄淡失宜、十二點染無法の如き、其見解の頗る徹を穿ちたるを見つべし。
思ふに郭若虛の狀物平編、不能圓渾を板といひて、明暗法なるものを畫の一要素となし、李成の山上の亭館飛簷を仰畫すべしといひて、從來の手法に透視法を加へたるが如きは、支那繪畫に於ける一大發達といふべし。明暗法は既に六朝の張僧繇、唐朝の尉遲乙僧等の凹凸畫法に於て見るを得たりと雖も、當時の畫家、論畫家は、これを以て單に外國畫の手法となし、支那繪畫には關係なきものとなせしにや、南齊の謝赫の畫六法には、謂ゆる明暗法なるものなし。唯唐代に入りて王維は其山水論中に石有三面といひ、又遠人無目、遠樹無枝など論じたるあれど、此は單に畫家の漫然たる想像若くは一種の約束に過ぎずして、未だ明暗、遠近法に於て明確なる構想なかりしが如し。本邦畫道の變遷に見るも、明暗法の漸く畫家の自覺に上りたるは、足利時代

以後のことにして支那に於ては宋代に及んで始めて明暗、透視の必要なることを明確に認めらるゝに至りたるものにして、郭若虚の三病並に李成の透視法の如き蓋し卓見といふべし。然れども由來、支那畫は、連筆の妙味の上に立ちたるを以て、寫生を輕じて専ら線の抽象美を發揮するに努力したる結果、其山水畫に、明暗、透視法の如き寫實的なる畫法を顧みざるに至れるは蓋し自然の勢といふべし。左に李廌の書品中より畫の鑑識に關する論を掲げて其参考に供せん。

畫の鑑識法

人物顧盼語言、花果迎風帶露、飛禽走獸精神逼真、山水林泉清間幽曠、屋廬深邃、橋約往來、石老而潤、水淡而明、山勢崔嵬、泉流灑落、雲烟出沒、野逕迂回、松偃龍蛇、竹藏風雨、山脚入水、澄清水源、來歷分曉、有此數端、雖不知名、定是妙手。人物如尸似塑、花果類瓶中所插、飛鳥走獸、但取皮毛、山水林泉、布置迫塞、樓閣模糊、錯雜橋約、強作斷形、境無夷險、路無出入、石止一面、樹少四枝、或高大不稱、或遠近不分、或滄淡失宜、點染無法、或山脚浮水面、水源無來歷、凡此數病、雖不知名、定是俗手、舉之以觀、畫亦不大失眼矣。

第四章 元朝の繪畫

第一節 元朝文化の概論

元朝文化の概論

元朝の主權者は其先オノン河邊に勃興し、其後裔、亞細亞、歐羅巴を席捲して、一時歐亞の天地を震撼せしめたる武弁的人種なりしを以て、胡人が宋末より、支那中原に浸入せし以來、支那の文化、藝術は、其發展の上に一時的障害を蒙りたりと雖も、由來、漢人種の文化は、常に却りて其征服者を同化し、漢族文化の繼紹者たらしめ、以て其特有なる文化の發達を遂げしめたること、猶、希臘の羅馬に於けるが如きものありしを以て、胡人宋に代りたりと雖も、そは唯、政治上に於て、主權者となりたるまでにて、社會的見地より見れば、寧ろ、劣敗者たるを免れず。されば其文化藝術に至りては、宋風元を覆ひて、漢族文化一途の發展を遂げたりき。是を以て元朝の治世八十年、官に畫院の設けなく、唯、僅に御衣局使などいふ官ありて、劉貫道、花鳥、す善の如き、至元十六年祐宗の御容を寫して、御衣局使に任せられたるあれ

御衣局使

ど、大抵、畫工として其職に在りたるが如く、前朝の如く畫家としての待遇を受けざりしが如きも、尙、史傳に依るに元代の畫家總じて四百餘人の多きに及び、書道亦隆盛なりき。而して其畫風概して宋代の餘波に屬し、其多くは未だ明、清の近體に似ずして、較々古調なるを見む。然れども其文學界に戲曲、小説の如き軟文學の新たに勃興したるは、やがて元代人の心風尙の既に推移したるを徴し得らるゝが如く、元代の繪畫は、多く宋畫の餘勢を保ちたる中に、既に畫風變遷の萌芽を宿し、山水畫には高克恭、黃子久等の諸大家輩出して、明、清諸家の謂ゆる南宗畫の先驅となり。花鳥畫にては、錢舜舉、王若水等の整綴なる畫風興りて、明朝に於ける花鳥畫の先蹤となり。更に明代に至りて大いに流行せり。又明の仇實父等が盛に製作せし細密巧麗なる歴史、風俗圖の類は、任月山、馬手斯の如く元代の繪畫は、山水花鳥、人物たるが如し。任月山の作と稱せらるゝ斯の如く元代の繪畫は、山水花鳥、人物畫等の諸方面に涉りて、明、清の近體に移らんとする情勢を呈し、中世より近世史に移る橋梁を成せり。而して元朝蒙古人種の武威、西南諸方の外國

元代繪畫の
畫風漸く遷
る

佛教美術

波斯畫風の
影響

元初の藝苑

人物畫

に震ひしかば、元朝以前の佛教美術の、多く希臘佛教式即健陀羅式に屬したるに反し、世祖以後に於ける佛像の様式は、大抵、梵式即印度婆羅門式にして、爾波羅國を通じて南方佛教の系統に屬したるものが輸入されたるが如し。然れども元朝に於ては、禮拜圖像には關係少なき禪宗を除き、其他の佛教諸宗は皆衰運に傾きたるが故に、此等圖像の婆羅門の様式は、遂に宗教繪畫の上、其影響を與ふるの機会に遭逢せざりき。然れどもローレンスピンソン氏の云ふ所に依れば、錢舜舉等の風俗人物畫には、波斯式の要素を認め得らるるといふ。暫く記して後の研究を待つ。

第二節 元代繪畫の變遷

元代の繪畫は概ね宋格より明、清の格法に移る過渡の橋梁をなせし觀あるが、今、元初の藝苑を風靡せる主なる名家を擧ぐれば、趙子昂、高克恭、錢舜舉、王若水等の數家にして、其名蹟大抵本邦に傳存し、親しく其畫風を窺ふの便あり。

元初陳琳、父陳珪は南宋賈陳仲仁、寫生に妙を得、當時盛懋、王若水等皆古風を復

趙子昂の復古派

興い、晋、唐の古へに遡りて、高古細描の人物書を善くし、其畫風自ら相似たるものありしが、此種の畫風に於て、最も妙手と推されたるを、趙孟頫は字子昂、松雪道人となす。宋秦王德芳の後にして太祖十一世の孫、吳興に居り、吳興は文敏といふ。元朝の仁宗に仕へ、翰林學士承旨に至り、魏國公に封せらる。故を以て趙魏公とも稱せらる。才氣英邁、書畫共に其妙域に達す。常に書畫同體の論を唱へ、共に古風を復興す。書は眞行、草、篆、籀、分隸皆古人の地位に造り、其畫は高古細描の人物、鞍馬、山水等を畫きて、晋、唐の趣を得たりと謂はる。蓋し、其の描法は主に晋の顧愷之より脱化したるもの如く、謂ゆる鐵線描なり。陳琳、陳仲仁等の如きは其畫友にして、日夕講論裨益したりといふ。其子、仲穆、弟仲光、及仲穆の子、允文、允徳、子昂の室管夫人墨竹に皆時に名あり、其末流、唐棣に至るまで、趙氏一派相紹いで家學を傳ふ。中に就き趙中穆最も顯はる。山水は董北苑を師法とし、人物士女鞍馬を善す。其胡人歸獵の圖の如き最も精絶を極む。斯の如く趙氏一家の代表せる畫風は、高古細描の筆を用ひて更に濃墨を事

鐵線描

高克恭の一派

宋格一變す

錢舜舉

花鳥畫

王若水

とせず、描寫精絶なりしが、元初高克恭、房山と號し、其先、西域の人、元朝の一派、山水畫に於て寫意氣韻を取り、以て趙家等の復古派に相對峙したるの觀あり。克恭初め李成、董、巨を學び、後、米芾父子の法を祖述して山水を畫く、時人之を重んじて宋格之が爲めに一變すといはる。蓋し畫法二米に似て而も別に氣韻を存し、怪石奔湍、山頭水口に至りて烘鎖潑染を成せり。當時、龔開米芾の畫も亦彼に類し、我京都金地院所藏の高然暉畫傳に逸す、蓋し元代の作らむの筆蹟と稱せらるゝものも、亦其畫風高克恭に酷似せりといふ。錢舜舉名は選、王潭と號し、又巽峯、清癯は趙子昂と共に元初吳興、八俊の一派にして、子昂嘗て彼に從つて畫法を問へりといふ。人物、山水を善し、最も花鳥を工にす。蓋し、王若水と共に元代花鳥畫の泰斗たり、共に寫生を善し、畫風整緻清麗を加へて明代花鳥畫の先蹤となれり。錢舜舉は徐、黃二家の法を兼ねると稱するも、多く宋の趙昌、易元吉を祖述し、徐氏體鈎勒の華麗を専らにせり。め。王若水名は淵、澹軒と號す、はこれに對して黃氏體鈎勒の華麗を専らにせり。されば舜舉の作には務めて鉛華を脱して之を沖澹清麗に歸せしむる風あり。

山水畫の派別

其書法、戚良之れを嗣ぐ、其山水は趙千里を宗とせりといふ。本朝畫史には錢舜舉、盛子昭名は如きは青緑の精密を以て名を得たりとあり。其餘畫には仁宗の朝に王振鵬あり。墨竹には李衍字仲實、息柯九思等最も顯はる。大抵、文興可、蘇東坡の餘流にして、張遜は王維の雙鉤竹法によりて鉤勒竹を善せり。

元代山水家中には錢舜舉一派の青緑山水に於て、僅かに南宋院體畫の一派たる趙孟頫、劉の面影を見るのみにして、此派に屬するもの殆んど稀なり。又特に此派に屬して傑出せるものなかりしも、南宋馬、夏の遺風は、孫君澤、丁野夫、張芳汝、張遠、張觀等によりて傳へられ、中に就き孫君澤の如きは、殆んど馬、夏の疊を摩し、此派に於て最も傑出せる一人とす。其畫風、沈鬱、適勁の趣を存し、馬、夏の一派の淡彩、水墨の精妙を發揮せり。然れども元代の山水畫として其影響の後世に周ねかりしものは、實に國初の數家に次いで輩出せる、謂ゆる元季の四大家倪雲林、吳仲圭、王の四大家等は、皆大抵、董、巨、李、郭の兩派に屬し、黃、倪、吳、王の四大家等は、皆

元季山水の二派

元季の四大名家

王蒙

溥暉乾筆

董、巨を以て家を起し、朱澤民、曹知白、方從義も兼ねて唐子華、姚彦卿等は皆李、郭を祖述して名を成せり。而して此等元季の諸家は、國初の高克恭一派と共に、宋畫山水の格法を一變して、謂ゆる元格なるものを啓き、明、清諸家の南宗畫なる一種の典型を創作するに至れりと雖も、其南畫の大成に最も與つて力ありしものは、倪、吳、王の四大家にありとす。黃子久は公望、字なり、一峰と號し、山水に兼ぬるに寫生を以てす、董、巨に倣ひ晚年自ら一家を又大痴道人といふ。山水に兼ぬるに寫生を以てす、董、巨に倣ひ晚年自ら一家を成す、其格二あり、一は淺絳色を作る、山頭礬石多く筆勢雄偉なりとす、一は水墨にして皴紋極めて少く、筆意最も簡遠なり。王蒙字叔明、黃鶴山樵とは趙子昂、董源、王維等前人の諸法の錯綜して、樹石臺榭、人馬雞犬、紆餘曲折の巧致を肆にし、多く赭石を以て藤黃に和して山水に着け、好んで山頭に蓬々たる草を畫き、再び赭色を以て拘出す。又時に著色せざるものはたゞ赭石を以て山水、人面、松皮に着るのみ。蓋し元朝以前の畫山水多くは溥暉を用ゆ、之を水暈墨章といふ。唐に起り宋に及んで猶然り、元季の四大家に至り始めて乾筆を用ゆ。中に就き倪雲林、吳仲圭、梅道人といふ。

の二家は猶、墨法を重んじたるが如く、他は淺絳烘染を主となせり。鹿柴氏の云ふ所によれば初め淺絳色なるものなかりしが董源に至りて始めて行はれ、黄子久に盛にして之を吳裝といふ、傳へて文徵明、沈石田の畫に明代に至り、遂に專尚と成れり。されば古來、倪雲林の畫は疎淡簡勁の趣に富みて最も學び難く、吳仲圭は用筆古勁にして鐵崖公といはれたる程なれば、同じく董、巨を學びたるも亦自ら徑庭なくんばあらず。然れども此等四大家の渴筆の抹擦と、淡墨の渲染、烘染とを以て畫調をなし、其の簡淡高致の畫風は、謂ゆる宋格を變じて元格なるものを大成したるものにして、共に明、清に於ける南宗畫の典型を啓發するに力ありたるは一なり。殊に倪雲林の如きは落款の美を發揮し、明、清の時代に至りて、大いに發展せる風尚、即畫に略する所は書贊、詩賦を以て之を補ひ、書畫印章俱に兼備せしむる端緒を開けり。芥子園畫傳に曰く、

元以前多用款或隱之石隙恐書不精有傷畫局耳至倪雲林書法道逸或詩尾用跋或後系詩文衝山行款清整沈石田筆法灑落徐文長詩奇拔陳白陽題精卓每侵

南畫の典型

元季山水二派の消長

元以降山水畫の趨勢

道釋畫の衰退

顏輝

畫位、多寄趣。近日俚鄙匠習、宜學沒字碑爲是。

斯の如く、元季山水畫二派の中、董、巨の流派勃興し、董、巨を以て家を起し名を成したるもの多く、李、郭の一派は朱澤民等によりて祖述せられたるも、其派よりは名家を出す能はず、従つて其勢力振はざりき。宛も李、郭の爲に蹊徑を壓せられる所となりて、自ら堂戸に立つ能はざるの觀あり。されば其畫風の明、清に及ぼせる影響より見るも、後者は前者に及ばざりき。即ち明代に於ては宋、元二格並び行はれ、明人亦一種の風致を開きしが、清朝に入りては清人専ら上述の元季四大家に成りし元格を振起し、其畫論特に精しきを致せり。

前述の外、元代の山水畫家にして、南宗の系統に屬すと目せらるゝ作者甚だ多く、陸廣、天遊、孟玉潤、天澤など其名尤も顯はる。

元代の道釋畫は、當時、喇嘛教の興隆に引き換へ、佛敎は衰運に傾きしが故に、從來の道釋畫なるものも亦衰頽の否運に陥りたり。然れども元代亦此種の名手なきにあらず。顏輝の如き蓋し此種の代表的作家とすべきか。顏輝

字は秋月、江山の人なり。筆法奇絶、八面生動の概ありて氣象亦雄偉なり。我京都智恩寺什寶の蝦蟇、鐵拐の二仙圖雙幅は、其眞蹟なりといはる。其他宋朝の李龍眠、張思恭等の流派に屬すといはるものに、蔡山、趙瑤等の羅漢圖等あり、竝に其遺蹟を我國に傳ふ。而して上述の如く元時佛教衰へたりと雖も、其は禪家以外の諸宗のことにして、禪門は獨り依然として隆盛なりしかば、由來禪門に關係深き牧谿流の水墨畫は比較的に多かりしならむ。即ち月湖、阿加々、嘸子の水墨觀音圖、率翁、因陀羅等の禪門機緣圖等皆本邦に傳存し、玉潤、海雲の如き竝に禪林の妙手と謂はる。また本邦に渡來し、五山文學の指導者たる寧一山並に、梵竺仙等皆畫を善したるが如し。而して此等の蔡山、趙瑤、月湖、阿加々、嘸子、率翁、因陀羅等の遺蹟の、多く本邦に流傳したるのみにあらず、また其名の支那畫傳に逸して、却つて本邦の君臺觀左右帳記等の畫傳に其名を留めたるは、當時喇嘛教専ら行はれて、此等の佛畫の時人に迎へられず、加ふるに我が鎌倉時代には宋、元の交通盛なりし爲め、彼此の緇徒互に往復し、當時鎌倉の地は、五山薈を並べて、宛然

牧谿流の水
墨畫

佛畫の本邦
に多く流傳
するに至れ
る原因

天龍寺船

支那禪僧の居留地たるの觀ありき、然るに弘安年間胡元の役により一時彼我の交通杜絶したるも、間も無く京師に室町幕府起り、天龍寺船なるものによりて更に彼我の貿易を助長し、幕府またこれによりて其財政の窮乏を救はんと欲して、美術工藝の盛に輸入せられたるに由らむ。

第三篇 近世史

第一章 明朝の繪畫

第一節 明朝文化の概見

元の胡族支那大陸に君臨せること僅に八十八年にして、明の大祖朱元璋の爲に亡ぼされ(西紀一三六八)、支那國民は此に亦漢族治世の下に生活して、朱明一代の文化を啓發するに至れり。太祖、元に勝つて歸るや、圖籍を修めて之を南京に致し、大いに四方の遺書を搜求し、收書鑿丞を設け、尋いで翰林典籍と改めて之を掌らしめ、京師に國子學を設け、地方に府學、州學、縣學を置きて、大いに學者を優遇し、科擧の法の如きも一時中止したりしが、また再び行はれ、世祖の世には四書大全を勅撰して、經義を一に定め、程朱の學說を以て正學となして、教化の主旨となせり。加ふるに元代以降文學下向して社會的となり。小説、戯曲等の如きものを見るに至りたるが、明朝に及

翰林典籍を
設く
國子學等を
置く
科擧の法

支那小説の
四大奇書

工藝品の發
展

足利時代の
工藝との關
係

んで更に隆盛となり、かの水滸、三國と共に支那小説の四大奇書と云はる、西遊記、金瓶梅の如き名篇を出し、傳奇作者としては、湯若士等の如き大家を輩出せり。工藝の如きも明代に入りて頗る發達し、國初より萬歴の際には、歴代の諸窰巧技益々進み、統白なる磁器始めて精良の域に入り、青華、五彩、燦然として見るべく、漆工、象牙細工、鑄銅、七寶等の諸工藝又大に發達し、特に漆工には永樂の針刻銘、宣徳の金屑銘、反黃平沙等の剔紅、剔黑、夏白、眼等の駒殼象嵌、汪家の彩漆等最も名あり、而して此等の諸工藝品は、本邦南北朝の時以來、謂ゆる八幡船の支那、朝鮮の沿岸に寇して奪掠し來れるものと、又景泰、天順、成化の頃、足利義政の明朝に修聘して、輸入したるものとは、共に東求堂の數奇屋の裡、又は諸大名等の書院、茶室に裝用され、以て我國戰亂の際に於ける諸工藝を誘掖して、頓に發達をなさしむるに至れり。

斯の如く、明代の文化は國初より隆盛なりしも、其科擧を以て士を採るに當り、課するに入股文を以てし、經義を先となしたる結果、天下の俊才を羈

一代の文運
擬古、形式
に流る

社會の風尚
淫靡に傾く

明代繪畫の
特色

支那繪畫史 一五〇
束し、朱明三百年間の文運をして、其精神的な生活に於て、概して擬古に傾き、鑄形的に流れ、宋儒の如き自由活潑の風尚を見ざるに至らしむ。されば國初に於ける宋濂、李邱の輩を外にして、詩、文の品致、大抵、模擬細巧に傾き、又王守仁の陸象山を祖述して、良知良能の説を唱へたるが如き、偶々、萬緑叢中紅一點の觀ありしも、謂ゆる正統派の學者より異端邪説視され、其學徒多くは政府の虐待を受けたるが如き状態にして、學問多く形式、模擬に陥り、朱明一代の文學は、唐詩、宋文、元曲の剩山剩水ともいふべく、僅に小説、戯曲等の軟文學に於て、支那文學史上に一光彩を添ふるのみ。而して此現象はやがて明代に於ける社會風尚の淫靡に傾けるを證するものにして、宮女九千後宮に滿ち、脂粉の費毎歲四十萬兩を要したるは、金瓶梅等の猥褻とともに、能く其間の消息を傳ふるものにあらずや。これを繪畫に見るも、仇實父等の風俗畫の流行を來し、石田、戴進等の簡選壯拔の技を外にしては、多く纖穠細麗を以て其特色となし、其論畫に於て盛に欽尚せる宋、元南宗諸家の雄渾簡勁なる風韻を見るもの稀なるに至れり。蓋し社會風尚の然らしめ

たるが爲ならむ。
之を要するに有明三百年間に於ける畫風の大勢に就いて見るに、其運筆のたわやかにして裁構秀淳なる、縦令、神來の雄渾に缺くる所あるも、概して穩健なる畫風を馴致し、其技術的圓成と色彩調和の精良とに於て、畫道の上に一進歩をなしたるものといふべし。

第二節 明朝の畫院

漢族文化の發展に便を得
朱明の胡元に代るや、其主權の漢人種の掌裡に歸したるは、漢族文化の發展に一層の便宜を與へ、其時代風尚は既に世と共に移りたるも、有明三百年間の文物隆盛を啓發すると共に畫道復一層の興隆を見るに至れり。されば元朝には官に畫院の設けなかりしも、明朝に於ては再び趙宋の遺緒を紹ぎて、朝廷、復、畫院の設けあるに至れり。而して其畫院の規模趙宋の如く花々しからず、又其官職の如きも其名稱を異にせるも、歴代の帝王多く畫を好み、大いに斯道を奨勵せしかば、名匠巨擘彬々として畫院より輩出し、有明一代の院畫盛を南宋と競ふに堪えたり。洪武の初、趙原董法とす。先づ京師に徵さ

畫院の狀況

れて畫史となり、次いで周位畫院に入り、命を被りて天下江山の圖を便殿に畫き、宮掖の畫壁多く其手に出づといふ。更に沈希遠は傳神に巧なるを以て御容を寫し、旨に稱ふて中舎を授けられ、陳遠の陳遇も亦御容を寫して文淵閣待詔となる。其他、王仲玉、相禮の如きも亦能畫を以て京師に召され、共に畫院に事へたるが如し。唯夫れ太祖、元末放縱の後を承けたるを以て、最も刑罰を嚴にし、資性亦峻酷なる所ありしかば、趙原の應對、旨を失ひて法に座せられ、周位の讒口に遇ふて死に就き、盛著内府の天界寺の影壁に水母龍背に乗するを畫き、旨に稱はずして棄市せられたるが如き、往々かゝる奇禍に遇へり。然れども國初、既に畫院の隆盛なりしこと想見しつべし。次いで世祖の永樂年間には、天下の名工を徴して京師に詣らしめ、北京、奉天殿の兩壁に眞武、神像を畫かしめ、又文華殿には漢文止聲受諫圖、唐太宗納魏徵十思圖を畫かしむ。當時邊文進、范暹、蔣廷樞等は、花果翎毛を以て、郭純は山水を以て、共に召に應じて永樂の内殿に供事せり、陳撝亦世祖の御容を寫して名あり。爾後、宣德、弘治の時代は、明朝畫院の最盛の時期にして、

畫院の最盛
時期

猶、宋朝の宣和、紹興の畫院の如く、又宣宗、孝宋の畫を善したるは、宛も徽宗、高宗の畫に堪能なりしが如し。従つて宣德の畫院には、謝環山水は荆宗と倪端山水、馬遠一顧應文等の名手あり。商喜山水、人物を善し、亦同じく畫院に入りて錦衣指揮を授けられ、戴璉文、李在、郭熙、夏馬、石銳、畫、金碧山水に長す。周文靖、馬夏の等亦共に仁智殿に直せり。成化、弘治の頃には、吳偉、小仙、呂紀、呂文英、王諤、林時詹、張乾、夏馬の、鐘欽、禮、派、沈、政等共に仁智殿に直し、吳偉は錦衣百戸を辱うし畫狀元の圖章を賜はれ、呂文英は更に指揮同知を拜し、呂紀と並び稱せられて小呂と呼ばれ、呂紀亦錦衣に官す。林時詹は冠帶を賜はり、王諤は孝宗の爲に大いに寵遇を受け今の馬遠と尊稱され、正徳の初、錦衣千戸に官たり。林良、林郊父子の寫意派の妙技を院中に肆にしたるも弘治の間なるべく、良は内庭の供奉を以て錦衣衛百戸を授けられ、郊は詔を以て天下の畫工を探りし時、考第一を以て錦衣衛撫に官となり武英殿に直せり。馬時揚亦弘治の際に、錦衣衛の鎮撫を拜し、吳偉の父、剛翁も孝宗の時錦衣百戸を授け、畫狀の印章を賜へりといふ。其他、張玘、錦衣に官すの人物

馬、夏の流
派殊に盛なり

支那繪畫史

士女に長じ、三停積粉の法を用ひて名を弘治の書院に占め、郭詡は吳偉、杜
董界畫に工にして又沈舟と名を齊うし、弘治の間錦衣の官を受け、後、王陽明、杜
に從て遊びたるが如き、當時書院の高手實に濟々たりといふべし。而して宣
德、成化、弘治、正徳の書院に於て、馬、夏の流派に屬する院體畫の名手殊
に多かりしは、一は戴文進の、南宋に於ける馬遠、夏珪の流派より出で、郭
熙、李唐の長所をも兼ねて、新に健拔勁銳の浙派を開きしより、天下の畫苑
之が爲に風靡せられたるに由るも、尙、孝宗等の最も馬、夏の蒼勁の畫風を
好尚せるに由りしならむ。次いで正徳の前後には、曾和は朱端馬夏と共に山
水を善し、正徳の間、共に仁智殿に直し、趙麟趙雍の、亦仁智殿に直して官
錦衣副千となり、朱佐名は硯人の書院に入りたるも、此頃か。更に萬歴の初
には王廷策、書院に入り、次いで顧炳、内殿に供事す、沈應山馬夏の書院
に秘画たりしもの頃ならむ。嘉靖の頃には陳鶴百戸を襲し、侯鉞は傳神の
妙手を以て御容を寫し、其餘、年次を詳にせざるも劉晋の錦衣指揮を拜し、
莊心賢の如きも時に徴されて御容を寫しき。爾後、邊境屢々事あり、清室亦

一五四

萬歴以降畫
院漸く衰ふ

院内の軋轢

北方より壓迫して國事日に非なりしかば、書院の如きも漸く廢れたるが如く、
加ふるに當時、尙南、北の論評一世を蓋ひ、北宗の流派を引き、南宋の院體
畫を傳へたるものを目するに狂態邪學を以てし、遂に此派をして漸く漸滅に
就かしめたるが故に、嘉靖以後に於ては書院の聞え寂として音なく、僅かに
明末崇禎の間に文震亨、曾孫の武英殿に給事たるを傳ふるのみ。然れども國
初より萬歴の初に至るまでは、書院の名手彬々として輩出し、院風亦振ひし
かば、從つて書院内外の軋轢もありしなるべく、又院内に於ても同僚の競争
甚しかりしならむ。國初、周位の同僚の讒口に遇ふて死し、宣徳の書院には
明代の第一手といはれたる戴文進の、偶々、同輩の讒口によりて久しからず
して野に下りて窮死したるが如き、其間の消息を傳ふるにあらすや。傳に依
るに、戴進一日仁智殿に於て畫を呈す、其首幅を秋江獨釣圖とす、一紅袍人、
釣を水次に垂る。畫家、惟、紅色を傳る最も難し、進獨り古法を得たり。時
に謝環曰く此畫佳なり、恨くは野鄙なるのみ、宣宗、其所以を問ふ、對て曰
く紅品は官の服色なり、用ひて以て魚を釣る、大體を失ふと。宣宗之を領み

第三編 近世史

一五五

餘幅、復、閱せずして放ち歸すと。顧ふに此の如きは偶々競争によりて生じたる弊害の明かなるものなるも、又時に切磋琢磨の効果を収め得たるものありしならむ。吾人は此に節を改めて畫風沿革の梗概を述べん。

第三節 山水畫の沿革

明、清山水畫の特相

明、清の畫風は、何れの方面より之を見るも、所謂近體の作風を存し、支那繪畫史上に明確なる一境界を成せること既に總論中に述べたるが如し。今山水畫の一科に就て之を見るも、萬歴の頃に至るまで、南宋以降支那の畫苑を壓倒したる、所謂南宋院體畫の系統に屬すべきもの、流行せしが、其作風の上にも明確なる境界を存して、時代的色彩の區別顯著なるものあるを見む。即ち南宋の馬遠、夏珪の遺風を紹述せりと謂はるゝもの、畫風の如き、其南宋の渾厚沈鬱の趣は、變じて健拔勁銳の作風となり、謂ゆる浙派の新格を樹立せり。また周東村、唐伯虎の如き、南宋の趙李、劉の一派に屬すと謂はるゝもの、周臣村東の畫は、唐伯虎の如き、南宋の趙李、劉の一派に屬すと謂はるゝもの、日本に於て呼ぶ所の南畫に似たり。蓋し、此等諸家の作風を南北の系統に似たり。

南北の區別より時代の區別顯著なりとす

山水畫の三大流派

統に分つが如きは、之れを文字の上よりは明確に區別し得らるゝとするも、實際は甚だ困難ならむ。其當時に在りては顯著なる境界も、後世吾人の目よりは餘り甚しからず。されば後世吾人の目には、南北の區別よりも、寧ろ時代の區別の明確なる境界あるを認め得べし。今宋、明兩朝に於ける同一系統に屬すと謂はるゝ作を比較對照せんに吾人は一見して其兩者の間に、自ら幾多の流派並び行はれたるものあるを見む。されば明朝に於ける山水畫には、前に前朝よりの系統を組織して、有明一代の山水畫を峻別せむは、其當を失するの嫌ひあるも、今暫く記述の便を計り、其小異を去りて大同に就くに、大別三種の系統ありとすべし。即ち南宋院體派の末流と稱せらるゝものに、馬遠、夏珪の流派に屬せりと謂はるゝものと、李唐、劉松年の流派に屬せりと謂はるゝものとの二系統あり。又別に主として元季四大家の流を汲めたる一系統あり。今此等各流派の興廢の跡を見るに、明代山水畫は自から前後の二期に分劃されて、各々其風尚を異にしたるが如し。即ち國初より萬歴の

文人、士夫
畫の稱

初めに至るまでは、此等三大流派の中、殊に前二者の系統に屬すと謂はる、もの最も流行し、萬歴の末年よりは殆んど後者の獨占する所となり、其勢ひ清朝の康熙、雍正、乾隆の間に及んで、其絶頂に達し、明末より清朝を通じてまた前者を顧るものなきに至れり。蓋し明代の正徳、嘉靖の間には、後者の系統に屬したる一代の名手、沈周、文徵明等輩出し、次いで明末崇禎の際には、董其昌、陳繼儒の輩、踵を接して出で、其學識と名望とは、當時の翰墨壇上を壓し、文徵明先づ文人畫を以て標榜となし、次いで董其昌等筆墨の精微を折ち、宋、元の異同を究めて、士夫畫の大成者を以て自ら任じ、南北兩宗の畫別を立て、盛に尙南貶北の論畫を公にして一世を傾倒し、時代の風尙亦漸次に移りて、蒼勁の畫風を嗜好せざるに至りしが爲ならむ。

(一) 浙派
明代の山水畫に於て、南宋の馬遠、夏珪等の遺風を紹述せりと傳へらるもの、前述の畫院に事へたるもの、外、朱侃、王履、洪武、張觀、元末、明、沈遇、沈周、周鼎、林廣、李在、丁玉川、沈希

浙派の始め

戴文進

遠、雷濟民、民性范寬の風、邵南、朱端、沈昭、大斧、潘鳳、等ありと雖も、戴文進出で、其畫風を一變せしより、此等の畫家も多く其風化を受け、謂ゆる派に屬するもの多かりしが如し。而して浙派の戴文進に始まると諸傳の一致する所なり。戴進字は文進、靜菴、又は玉泉山人と號す、武林の人なり。山水、人物、花果、翎毛を善くし、臨摹精博にして明代の第一手と稱さる。其山水は、大率、馬遠、夏珪の遺風を祖述し、兼ぬるに郭熙、李唐等の長所を以てし、縦横の技巧、眞に一代の師表たる行家として歎賞するに足れり。其神像、花鳥の如きも俱に精緻を極め、人物の描法は謂ゆる蠶頭鼠尾の描法を用ひ、行筆頓挫ありて、蘭葉描を少しく變じたるもの、如く、尊老を畫くに多し、鐵線描によりといふ。蓋し遠く吳道玄、李龍眠の衣鉢を紹ぎたるものか。宣徳の朝に畫院に入り、同僚の讒口に遇ひ、久しからずして野に下りて窮死す。然れども其天稟の才藝は、死後人の爲に重せられ、其南宋の渾厚沈鬱の趣を變じて、新に健拔勁銳の一體を成せし畫風は、天下の畫苑を風靡し、吳小仙、陳景初等を首として、幾多の名流、風を臨んで崛起し、遂に其

其傳流

吳小仙

其傳流

江夏派

流派をして一大勢力を形るに至らしむ。而して元代より清初に渡りて、輩出せる趙松雪、王叔明、吳仲圭、倪元鎮等の諸名手の如き皆浙人なるも、進に至りて始めて漸派の稱あるに至りたるは、蓋し當時の吳派に對して用ひられたるが爲ならむ。而して文進の手法を傳へたるものに吳小仙、陳景初、外張路、吳理化成、何適、王世祥、戴泉、仲昂、夏芷、夏葵、弟の方鉞、汪質、謝寶學、汪肇、葉澄、釋朴中、陳璣等ありしも、最も其名の著れたるを吳小仙、仙となす。吳偉字は次翁、江夏の人なり、當時、北海に杜堇、姑蘇に沈周、江西に郭詡ありて名を齊うす。山水、人物を善し、落筆健壯にして、人物の如きは最も白描に長ず。憲宗の朝召されて錦衣衛鎮撫となり、仁智殿に直し、孝宗の朝には錦衣百戸を賜はる。成化中、成國朱公、吳偉を延いて幕下に至り、小仙を以て之を呼ぶ、因りて遂に號となす。其門流に蔣嵩、宋臣、薛仁、蔣貴、宋登春、王儀、邢國賢、俞存勝、小仙、鄧文明等あり。李著の如きは初め沈周の門に學びて其法を得たるも、時人吳小仙を重せしかば、遂に移りて小仙を學べり。其末流を江夏派といふ。此等の外、明代の山水畫にて、其名の

漸派の末流
類放に傾く

漸派の技巧
吳派に優る
ものあり

(二)

院體畫の一派

知られざる遺品にも、漸派に屬するもの甚だ多く、謝晉、王蒙、趙原を學章を宗とす劉俊、張有聲、我雪舟の明に渡りし時既に畫法を學びたる人、然れども雪舟には關係薄しといふべし。漸派の如きは、共に此派に屬すといふ。また以て當時この派の隆盛なりしことを想像するに足らむ。然れども蔣嵩等の焦墨枯筆の粗豪を弄び、鐘欽禮成化の間畫鄭顛仙、張平山、張復陽、汪肇の徒と與に、益々類放に陥りしかば、吳派よりの論難益々加はり、遂に狂態邪學の譏りを得、漸次、此の派をして衰運に向はしめたるぞ是非もなき。これ一は彼等自ら招きたる結果なりと雖も、抑も亦當時、尙南、北の偏頗の論一世を掩ひたるの結果ならずんばあらず。されば其病最も甚しかりし蔣嵩、張路、山平等の畫風に見るも、其技術の自由なる、却て吳派の企及し能はざる長所を存すといはる。

此派は南宋に於ける院體畫の一派、李、劉等の流派に屬すと謂はるゝもの一派にして、明時此派を繼紹せりと謂はるゝものに、冷謙、年、武、周、臣、村、東、唐、寅、虎、伯、周、延、祚、尤、求、石、銳、陳、裸、陳、言、沈、昭、朱、生、張、煥、沈、碩、等、あり。此等

遺品多く本邦に傳存す

浙吳、兩派との異同

支那繪畫史

の作家は、能く細麗なる青綠山水を作るのみならず、又金碧界畫をも善するが、多く、また兼て設色の人物畫に長ずるもの多し。石銳の如きは明代界畫の高手と謂はる。我國には水墨畫を主とせる浙派の逸名遺品や、又此派に屬せる逸名の青綠山水、其他、南宋院體畫の傳存甚だ多し。これ一は明末以降、宗獨り變盛にして、院體畫風の當時の風尚に迎へられざりしが爲に、多く本邦に流傳したるに由るならむ。今此等の遺品に就いて其畫風を見るに、此派に屬せるもの、用筆は、浙派に比すれば較々細巧綿密にして、往々輕軟幽雅なるものありて、吳派の用筆に近き筆致を存するにより、往々吳派と同視せらるゝことあり。蓋し南宋の院體畫には、自から二個の流派ありしが、其一派を成せる馬遠、夏珪等の水墨蒼勁の畫風は、明に入り戴文進等によりて其格調を變化されたるが如く、また其一派たる此派も、漸次、風尚の移るにつれて、妙なからざる變化を來し、李、劉の院體畫より吳派の畫風に移る過度の作と見るを得べきか。されば浙派の戴文進と並馳すべき明代第一流の名手といはれ、此派の代表的作家たる周東村、唐伯虎の畫風の如き、能く其間の

周東村

唐伯虎

消息を語り、周臣字舜卿、東村と號す、吳の人、初め畫法を陳暹に學び、六法に工にして大小像を畫く、古面奇裝、纖濃冶麗なり。又山水を善し、其繼頭に峻嶒多しといふ。其門下に唐寅、仇英、朱生、沈昭等あり。唐寅、字伯虎、又は伯虎といひ、自ら六如と號す。周臣と同じく吳の人なり。最も山水、美人を善す、初め周臣、畫法を以て之を唐寅に授く、寅を以て世に名あるに及び、或は應酬に懶く、寅をして代作せしむ、具眼にあらざれば辨する能はずといふ。然れども周東村は行家の意、勝ち、唐六如は文雅に富めりとい謂はれし如く、其遺墨に徵するに、周東村の畫は北畫より南畫に至る過渡の作に似、唐の畫は、日本にて呼ぶ所の南畫に似たるものあり。是れ諸傳に唐を以て多く、南宗の系統に入る、に至りし所以ならむ。蓋し、唐は應天府の考試に第一人と稱されし程なれば、其學殖の深かりしを知るべく、書卷の氣、自然に其楮墨の間に溢れたるものとすべきか。其門下に蕭琛、朱繪、錢貢、文徵明の及び僧日章等を出せり。

明代の山水畫中、唐の王摩詰以降、荆、關、董、巨、李成、二米、趙松雪、高克恭、元季四大家等の流を汲めるものを吳派といふ。蓋し明代に於ける此派の名匠巨擘、大抵、吳人なるを以てなり。此派元季の四大家によりて明代南畫の典型を開かれ、國初、趙原、周位、徐賁、張羽、其風を紹ぎ、更

汝言兄、惟寅と共に山水を學ぶ。楊基、陳珪、王芾、金鉉、夏昞等、其風を紹ぎ、更

に王紱、永樂、墨竹を以て名ありし、高棅、米芾父子を學ぶ。馬琬、米字は文璧、董、劉珏、王蒙、董、李時、黃蒙、張子俊、金潤、姜立綱、張寧、顧翰、姚綬、吳仲圭、毛良、米氏を

王田、高房山を。王顯、上同、錢復、董源の法を傳ふ。俞泰、王一鵬、等、又此派に屬し、夏仲昭、杜用嘉、名は王孟端の法を傳へ、杜瓊は更に沈周、田石の兄、沈恒に傳へ、沈昭、是其兄、沈貞と共に、翰墨壇上を壓して一世を傾倒せしかば、正徳、嘉靖の頃

徵明と共に、名望、翰墨壇上を壓して一世を傾倒せしかば、正徳、嘉靖の頃

大抵、弘治、嘉靖の間に凋落し、明末より清初に亘りて僅に浙派の院體派の高手、

いふべき藍瑛等を見るのみに反し、吳派に於ては、嘉靖以後、董其昌、沈繼

儒等の學者輩出して、沈、文の遺緒を紹ぎ、其尙南、北の論は、偶々時代思潮に投合して、遂に浙派をして立つ能はざらしめしかば、萬歴以降の畫苑は、全く吳派の獨占場となり、更に明の文化を繼紹せる清朝二百有餘年の山水畫をして、獨り南宗に屬せしむるに至れり。沈周、正徳四年卒、字は啓南、世稱し、石田先生といふ。博學にして詩文を善し、繪事を以て遊戯となす。最も寫生に長じ、山水、花鳥皆其態を極む。時に或は草々點綴して意已に足るものあり、畫成れば輒ち自ら其上に題す。時人稱して二絶先生といふ。而して落墨皴點は彼の最も心を用たる所に於て、常に畫を積りて篋中に盈て共に點苔を施さず、清明澄徹の時を須て之を爲せりといふ。蓋し、山水、林石の如きは點苔を以て眉目となすが爲ならむ。初め王、黃を師とし、晩年高尙書山の粉本十二段を得、又米氏父子の趣をも兼ね、其の畫風元代簡勁の體を具ふ。其門流、王綸、杜冀、盛時泰、陳鐸、朱南雍等甚だ多く、文徵明の如き亦彼を學べり。文徵明、嘉靖三十八年卒、名は璧、字を以て行はる、衡山居士と號し、又徵仲といふ。沈周と同じく長州の人なり。博學にして書を善し、其書は明代中一

二と稱さる。翰林待詔となり。畫は沈周に學び、李唐、吳仲圭をも兼ね、其畫風、筆墨精銳にして、細緻温雅なりとす。其子、李嘉、從子、陳淳、嘉靖の頃より、萬歴、崇禎、陸士仁の師。自ら畫を以て聞ゆ、明末の間に於ける連、李芳等あり。此等は陳淳の外、

一と頤源、黃克晦、貢昌言、徐渭、周天球、黎從表、莫雲龍、王逢元、朱多炆、日華、宋珏、鄒迪光、詹景鳳、王之、文昌、高陽、謝時、張維、震亨、倪元璐、徐宏澤、曹履吉、張瑞圖、魏之、璣、李流、楊文、程嘉燧、張、又村、元、王、建、章、其昌、王、敏、璣、李流、楊文、程嘉燧、張、學會、邵彌、中長、張潤甫、本邦に流傳して、其最も著名なるは謝時、張、元季の大家に出入して、華亭の一派を成し、趙左は、宋懋、晉、共、に、學、び、

畫中九友

華亭派

蘇松派

雲間派

董其昌
陳繼儒

明代南宗の
大家

董源、黃倪の勝を兼ねて蘇松派の祖となり、墨を惜み思を構へて輕しく沙筆せざる。又沈士充の清蔚蒼古にして氣韻に富みたる、共に顯著なるものとす。派を成し、其畫風の清蔚蒼古にして氣韻に富みたる、共に顯著なるものとす。趙左の下に陳廉あり、沈士充の門下に蔣、申、釋、大、樹、あり。斯の如く沈石田、文徵明以後、此派最も隆興し、其門流多士濟々たりと雖も、沈文に續いて其名の最も著はれたるを董其昌、陳繼儒の二家とす。董其昌行年八十二歳、字玄宰、號畫隱、大司馬伯晉宮保に至り、書法を以て海内に重せられ、陳は諸生を謝して高く隠れ、屢々徴さるゝも就かず。董の畫家は高房山の雲孫女なりといふ。北苑、巨然の法を得、秀潤蒼鬱を旨とし、陳の畫風は沙筆草々にして蒼老秀逸なり。陳會て自ら謂ふ、儒家の畫を作すは范、夷の三たび千金を致す、意此に在らず、聊か伎倆を示すのみ。色々相ひ尙ぶが若きは便ち富翁俗僧と異なる無しと。蓋し沈、董、陳の四家は、此派に於ける明代

南宗畫の四大家なりとすることを得べし。

第四節

道釋、風俗畫の變遷

會稽の徐沁は其著、明畫錄の道釋の紋に於て、

古人以畫名家者率由道釋始。雖顧陸張吳妙蹟永絕而瓦棺維摩柏堂盧舍見諸載籍者恍乎若在試觀冥思落筆傾都聚觀輦金輸財動以百萬此豈後人所能及哉近時高手既不能擅場而徒詭日不屑僧坊寺廡盡汚俗筆無復可觀者矣

といへり。蓋し宋、元以上の人物畫は、道釋畫を以て其主と爲せりと雖も、元代以降佛敎衰へたると共に、漸く其風潮に一變化を來し、明に至りては、其人物畫の主要なる地位を占むるもの歴史、風俗の圖となりぬ。而して僧坊寺廡に道釋を試むる能手漸く稀となりしは、南宋に於て禮拜の圖像廢れて玩賞的繪畫の勃興せし以來のことにして、元時既に此種の跡を絶ち、明朝三百年の間、只僅に上官、戴璣、劉淵、商喜、宋旭の數家を數へ得るのみ。徐沁の云ふ所によれば、南中、報恩の上官の畫廊、並に戴璣が殿壁ありしも、に切火に遭ひ、都門の慈仁、永安の二寺に劉淵、商喜僅に其蹟を存し、瀾の

寺壁の能手
漸く跡を絶つ

道釋畫

仇實父
歷史風俗畫

如き既に其生平すら致ふ可らずといへり。若し夫れ其他の道釋に至りては、明代亦其の能手なきにあらず。蔣子誠、永樂の朝、徽は佛像、觀音を畫きて有道釋を以て倪端、顧應文の二人、書院に入り、李福智は上官伯達に繼ぐといふ。其他、丁雲鵬、張靖等の吳道玄の法を傳へて行筆疎爽なる、殊に丁雲鵬の白描羅漢は禪月、金水兩家の作風を存して、別に一種の風格を具へ、其門流に熊茂松、李摩等あり。吳廷羽、張仙童等亦羅漢、道釋の畫を以て名あり。喜善の王立本は南宋の梁楷の減筆の法を傳へ、率筆疎遠にして微茫溼雨の致を存し、許至震は鬼神、人物を善して長康晉の順の譽れを得、陳遠、陳鳳、王鑑、李龍眠の風を慕へり。吳小仙の一派、法を吳道元に取り、其徒、張路、薛仁、蔣貴の輩漸く類放粗獷に流れたりしが、周東村の門より仇英出で、歴史、風俗の圖を作り、其流麗細巧なる畫風は、明代人物畫の師範となり、有明第一の大家と稱されて、當時の畫苑を風靡するに至れり。蓋し明代の流麗織巧なる風俗畫は、この人によりて大成せられたるならむ。

第三篇 近世史

十州と號す。嘗て丹青を事とす、周臣村異として之を教へ、遂に名を成せり。人物、鳥獸、山水、樓觀、旗幟、車容の類皆秀雅鮮麗にして趙伯駒の後身といはる、壯歲崑山周六觀の爲に子虛上林圖を作る、卷の長さ約五丈、年を歴て始めて就る、畫く所の人物鳥獸山林臺觀等皆古賢の名筆を臆寫し斟酌して成る、當時圖繪の絕境藝林の勝事と謂はる。仇英の流派に屬すとせらるゝものに程環、仇完、周行山、朱生、沈完、尤求、英景、段衝及仇英の女杜陵内史等あり、石銳、姜隱、誠意の作風も亦此派に屬するが如し。後崇禎の間順天に崔子忠出で諸暨に陳洪授起り、共に人物畫を善し、時に南陳北崔と稱さる。蓋し仇實父以後に於ける人物畫の大家にして其畫法清朝人物畫の祖といはる。斯の如く朱明三百年間に於ける道釋人物畫は、壁畫様のものは殆んど跡を絶ち、其他の道釋畫に至りても、社會の風尙の變遷に伴ひ、元朝以降文化下向せしかば、從來の道釋畫は宋朝李龍眠等の畫を以て最後の閃光となし、其後の道釋畫には、稱揚に値するもの殆ど希なり。而して是に代りて元朝以降新に勃興し來りたる風俗人物畫如何にと見るに、此種の大成者として明時仇

南陳北崔

明代人物畫の總評

人物畫の方面

實父の妙手を出し、其他時人に稱揚されしものなきにあらず、且又諸傳記中に神品、能品として列擧さるゝものありと雖も、實際は甚拙なるもの多く、概して明清の人物畫は感服に値するもの少く、其數量に於ても亦多からざるが如し。之を我朝人物畫家の多士濟々たる假令ば雲谷、狩野の嚴正高古なる、士佐の艶麗典雅なる、菱川、宮川の新に生面を開いて生趣躍々たる、降ては文晁、華山の東西南北の諸派を混成して一機軸を出し、華山の如きは道釋仙人より風俗寫真に至る迄悉く能くせざるなきに比すれば、明清以後の人物畫の如きは殆ど論ずるに足らず。蓋し人物畫は、六朝以降種々なる變遷を経て當代に至りしものにして、其格法既に唐に成り宋に至りて其極に達せしものが、時代の風尙に乗じて風俗人物畫を打成せしものと見るとを得ば、宋以後の人物畫は既に降り坂と見るべきか。宋時既に郭若虛は、「若論佛道人物士女牛馬則不及古」と論せり。されば當代に於ては、其手法の上に更に一轉路を開拓すべき必要に迫られ居りしなり。而して此新手法の開拓として其要素の幾分を提供したるものを、曾波臣一派の傳心寫照の一法なりとす。然れども

上官周の晩
咲堂畫傳
傳神寫照の
一派

曾波臣

支那繪畫史 一七二
明代に於ては僅に其端を開きたるまでにして未だ從來の畫法と渾融の時期に達するに至らず、之を清朝に傳へて乾隆の際に及び、此種の代表的傑作とも見るべき、上官周の晩咲堂畫傳を開發するに至れり。抑も此傳神寫照の新手法は、明代に至り東西の交通益々頻繁を加へ、西洋人の支那に來遊するもの多かりしより、就いて洋畫を學ぶもの漸く多く、遂に從來の人物畫以外に寫眞の一派を成したるものならむ。されば洪武、永樂の際には、前述の沈希遠、陳遇兄弟、陳撝、侯鉞、莊心賢等皆寫照を以て朝廷に徵されて御容を寫し、其他、陶成、青綠山水、唐宗祚、王直翁、陸宣、林旭等の如き、また一時に名ありき。然れども此種の妙技を以て、名聲一時に高かりしものを曾波臣とす。曾波臣は晉江の人なり。其技法神理を得たりと謂はる。蓋し傳神の一派波臣に至りて新に一機軸を出したるが如く、其法墨骨を重んじ、墨骨成る後傳彩を加ふ、精神既に墨骨の中に在りといふは、骨描に暈染を加へたるの謂にして、洋畫の影響を受けたるを知るべし。其徒明末より清朝に及んで甚だ多く、萬歴年間には金穀生、王宏卿、張玉珂、顧雲仍、廖君可、沈爾調、顧宗漢、張

禪門機縁の
圖

心越禪師

木庵禪師

花鳥畫の沿
革

邊文進及呂
紀の黃氏體

第三篇 近世史

一七三

子游其子沂山水を善し後僧等あり。上述の諸人物畫の外に、禪門機縁の圖間々これあり。然れども元代以降漸く稀なるが如く、明朝には僅に其二三を數へ得るのみ。僧心越、延寶五年長崎に侯の歸依深く祇園僧木庵、明暦元年隱元禪師に召されて長崎に來の如き其主なるものにして。竝に相前後して本邦に來る。心越禪師最も書畫を善し、其遺蹟の主なるものに寒山拾得と峴子和尙の圖水戸、祇園寺所藏、釋尊出山と達磨大師圖東京三古魁三尊圖、東京長泉寺所藏等頗る多し。木庵禪師の遺品にも達磨江渡圖等傳存す。太耶氏所藏三尊圖、寺所藏等頗る多し。第五節 花鳥及雜畫
花鳥畫は宋朝に於て黃氏體、徐氏體の二派興隆し、殊に宣和畫院の諸名手、黃氏體の衆妙を具へ、徽宗亦此種の畫法に工なりき。大抵、設色に妙にして、粉繪隱起、粟の如く、精工の極、儼として生るが如し。而して元代の花鳥は皆徐、黃二家を祖述し、錢舜舉、徐氏、王若水、黃氏の如きも猶之等の古法を傳へたりき。然るに明に至りて繪事一變し、其畫法に一變遷を経るに至れり。邊文進の宣德中英武殿呂紀初め邊文進を學び後唐宋の諸家等の黃氏體を祖述して妍麗工

綴の院體を作り、文進の門下には其子、楚祥、楚芳、楚善及び其徒、錢永、羅續、張克信、劉奇等あり、呂紀の徒には羅素、車明、唐志寅、陸錫、葉石、童佩等あるも、其畫風既に移りて頗る整緻を加へ、殊に呂廷振の如きは、鳳鶴孔雀を寫すに難ゆるに花樹を以てし、爾來其樹石頗る浙派の用筆に類せり。蓋し當時の畫苑を風靡せる浙派の風化を受けたるに由るか。其他、沈奎、沈政、仁智殿に陳毅、楊大臨、朱朗、朱謀殺等の精妍工麗なる畫と共に、また専ら簡易を旨とする花鳥畫家もあり。沈周、王問、王穀祥、孫克宏、魯治、朱承爵、徐渭、曹文炳、孫克宏等、大抵、落墨淡色にして徐易の蹤を追ひたるが如く、范進、永樂中畫林良の一派皆筆致雋逸にして、意を寫して工を事とせざりき。蓋し、寫意派なるものは明に至りて興りしが、林良は實に其創格者となすべきか。林良字は以善、廣東の人なり。弘治の間、入りて仁智殿に事へ錦衣指揮に官たり。多く水墨を取つて煙波出沒、鳧雁嘯啞容與の態を爲し、大に清澹の氣を見はす、運筆早快にして人能く及ぶなしといふ。其徒に邵節

寫意派 林良

陳道復

周之冕 勾花點葉體

乾旭、計禮、瞿果、劉巢等あり。沈周、陳淳復道等の如き亦其風化を受けたるものか。其他、殷宏は呂紀、林良、二家の法を兼ね、陳子和の畫風も亦之に類するもの、如し。又黃壺石、年間は陳子和と吳小仙との畫法を交へて一家を成し、黃翰、永樂十年、亦之に類す。並に皆寫意派に屬せり。更に王余洲の言に依るに、沈啓南の後、陳道復、陸叔平に如く者なく、周之冕能く二子の長を合せ、寫意花鳥最も神韻あり、設色も亦鮮雅なりと。蓋し、陳道復、家名は淳、草の寫生、一花半葉、淡墨欹豪にして疎斜歷亂の致を存し、之を久しして淺色淡墨の痕を并せて俱に化す、世、道復の畫を以て林藻の深慰帖より悟入すと爲す。其子陳括、甥の張元舉、元陸叔平治、徐、黃の意を得たり。古來道復は妙にして眞ならず。叙平は眞にして妙ならずと。周之冕は此等二者の長を撮りて之を大成せるものか。子冕字は服卿、少谷と號す、吳縣の人、萬歴の間、落魄して世の爲に重せられず、後、漸く其名を成す。家に各種の禽鳥を養ひ、其飲啄、飛止の態を寫生す、點染生動、最も擅場を爲す。蓋し、明に至りて始めて勾花點葉體の一派起りたりしが、周之冕の如きは其代表者と

視るを得べし。こは黃氏體と寫意派との融合に出でたるものなるが如く、以て清朝の常洲派に於ける純沒骨體を生ずるに至る橋梁となりたるが如し。姚裕、周裕、吳枝等は道復の法を紹ぎ、朱統銀は周之冕を學び、武林の劉奇より和色の法を得て、花色久しきを経て益々新なりしといふ。

其餘、大倉の陳天定、許伯明、董其昌の言ふ所によれば、吳中の國能、多く逸傳に留めたる一時の撰なり。董其昌の副使となる黃宸、傅清、葉大年等皆名を畫品を成すも、墨林居士項元、醞釀甚だ富み、兼ぬるに巧思間情を以てし、獨り宋意多しと。蓋し自ら一家を成すものか。之を要するに明代の花鳥は種々な點に於て新意を出し、家々その様式を異にして千態萬様なりと雖も、邊文進、呂紀の黃氏體、林良の寫意派、及び周之冕の代表せる勾花點葉體の三派を以て其主要なるものとなすを得べし。

明代の墨竹、墨梅また甚だ多く、其畫譜に名を留むる名流少なからずと雖も、墨竹に於て最も名の顯はれたるを宋、揚、王、夏の四家となす。宋克は字仲溫、洪武に於て最も名の顯はれたるを宋、揚、王、夏の四家となす。宋克は字仲溫、洪武に於て最も名の顯はれたるを宋、揚、王、夏の四家となす。宋克は字仲溫、洪武に於て最も名の顯はれたるを宋、揚、王、夏の四家となす。

明代花鳥畫の三派

雜畫の變遷

墨竹の四大家

夏仲昭

墨梅

蕭然として俗を絶すといふ。嘗て試院の牘尾に朱筆を用ひて竹を畫く。揚維翰字子固亦精妙絕倫にして兼て蘭石を善し、柯九思最も之を推遜せり。永樂中其名一時に重きものを王紱字孟端となす。石室、橡林の遺法を存し、適勤の中に姿媚を出し、縦横の外に洒落を見るといふ。中に就き最も末流の多きを夏昶字仲昭永となす。初め陳繼に師事す、楷書に工にして寫竹第一といはる。昶字仲昭永となす。初め陳繼に師事す、楷書に工にして寫竹第一といはる。煙姿雨色、偃直疎濃にして各々矩度に循ふ、當時争ふて兼金を以て購ひ求む。故に夏卿一箇の竹、西涼十錠の金の謠言あり。其門流に吳獻、張緒、季利等あり。賞簪の一派亦盛なりしが如く、何震、費楨共に此派に屬せり。陳芹字野は文徵明の爲に推服されしにや、徵明常に門下生に戒むるに白門を過ぎなば慎んで竹を畫くこと勿れと、蓋し陳芹詩文を善し、後年金陵に家し、盛時泰が輩と青溪社を結び、興に乗じて竹を寫し、醉墨欹斜、衫袖を沾溼し、其名遠近に高かりしに由るならむ。

墨梅の作家亦頗る多しと雖も、其名の最も顯はれたるを王元章、孫從吉等